THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿三年　第十一號

第二百三十六號

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

◉露國自然派の先蹤をなせる官能的描寫を看よ！

再版

トルストイ著　徳田秋江氏譯

生ひ立ちの記

【最上製函入美本】



我邦に於ける杜翁(トルストイ)研究は、從來其思想的方面に於て僅に皮相を穿てるに過ぎず。久しく閑却せられたる其文藝的方面は『生ひ立ちの記』の新譯によりて眞面目なる研究の報告に接する事を得たり。我邦唯一の杜翁學者徳富蘆花氏は曾て「若し杜翁の著作悉く焼き盡して其一二を殘すとせば予は『生ひ立ちの記』と『戰爭と平和』とを以てせん」と言ひたりき。『生ひ立ちの記』は實に翁が八十年の著作生涯に於ける處女作にして、時の大家ツルゲーフをして嘆賞措く能はざらしめたるもの、定木の如く直く、白紙の如く純白なる翁が少年時代の耳目に映せる自然人生の批評にして、露國に於ける最近自然派の先蹤をなせる杜翁が官能的描寫は遺憾なく此うちに味ふことを得可し。文藝に志ある者の必讀に値するは勿論、偉人が少時に於ける思想發達史として、善良なる家庭に於いて要する絶好の修養書也

◉偉人が少年時代に於ける思想發達の徑路を看よ！

定價九拾錢　小包料八錢

東京駿河臺 神田 **東京國民書院** 電話本三千四番 振替四千二百番

取次 東京上田屋

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

▶以て處世經たるべし◉以て思想辭典たるべし◀

高橋五郎先生譯

新刊

ベーコン論說集

（十一月五日發賣）

總クロース函入
正價一圓廿錢
郵稅十二錢

古來行路難は歌はれ、生活難は叫ばれ、處生難は唱へらるゝ、此浮沈盛衰、榮辱窮達の走馬的なる否活動寫眞的なる世に在て、吾人如何に進退出處すべきか、如何にせば榮え如何にせば窮すべきか、此書全編五十有八の名什、曠世の碩學鴻哲フランシス、ベーコンが天下大の博識を以て微塵小の細心を凝し、人事の百般、世相の萬態を表裏正反、縱橫無碍に論斷し來る所、光彩陸離變幻出沒、眞に天來の神、處世の機微、生活の秘訣、日月を並べ懸けて之を照すが如し。殊に自己實驗上より歸納し來る所、九鼎大呂の重きを有せしむ。泰西評家の言に『之を讀む二十回、讀む每に新意味を發見し來る』とは僞りならず。宜なり此三百年來、政治社交上の鐵案金箴として文明諸國爭つて之を譯誦し、之が讀否は實に一國文野の分岐點とさへ稱せらるゝこと。要之天下論文の模範典型なり。以て無二の處世經たるべし、以て無二の思想辭典たるべし。今斯學の泰斗高橋五郎先生の逐字譯成る。蓋し我文壇に一珍寶を加へたるもの。

前外務大臣伯爵林董閣下序文
マクス、オーレル著、正木照藏先生譯

再版

ジョンブル の文名英吉利氣質

全壹冊
正價五拾五錢
郵稅八錢

◉中央新聞（水田南陽氏）……英語教授の文學士が恬然として無責任の譯書を公けにして是れに因て衣食して居られる世に正木氏が、其職の傍ら斯る忠實精確の譯書を公けにして以て……

德富蘆花先生跋
マクス、オーレル著、藤井緊一先生譯

再版

「女」殿下

全壹冊
正價七拾錢
郵稅八錢

◉中央公論評　原書は彼地の批評界に名聲嘖々到る處の家庭に必ず一本を備へられて居る程の者ださうだ。譯文亦流麗、文章の清淺なる水の隨處に瀾を作り瀨を成して趣きを生ずるが如く……

發行所　東京神田區雉子町　振替第七九九五番　玄黄社　●賣捌　各書林

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

國民百科辭典

五千萬國民の師友!!!

執筆諸大家

男爵 岩村透
農學博士 稻垣乙丙
文學博士 井上哲次郎
工學博士 井上仁吉
文學士 今井貞臣
理學博士 池田菊苗
醫學士 石川日出鶴丸
理學博士 石川千代松
理學士 石谷傳市郎
文學博士 芳賀矢一
陸軍中尉 芳賀眞五
法學士 花岡敏夫
文學博士 服部宇之吉
文學博士 萩野由之
醫學士 西巻保市
文學士 堀再平
醫學博士 土肥慶藏
醫學博士 千葉稔次郎
醫學士 千葉眞一
文學士 長連恒
文學士 大原貞馬
理學博士 大幸勇吉
理學士 大日方順三

理學博士 大森房吉
理學士 小川琢治
工學士 岡田陽一
大藏技師 岡本金一郎
法學博士 河津暹
工學士 陰山金四郎
文學士 龜田次郎
文學士 樫尾治
工學士 横濱勉
早稻田大學講師 吉田東伍
理學士 吉田好九郎
理學士 田畑輔四郎
醫學士 高橋忠策
工學士 高橋享二
法學博士 高田早苗
農商務技師 田子勝彌
醫學博士 田代義德
法學博士 副島義一
文學博士 坪井九馬三
理學博士 坪井正五郎
工學士 辻本滿丸
工學士 直木倫太郎
法學士 中川忠順

法學博士 中村進午
理學博士 中村淸二
醫學博士 中濱東一郎
海軍大尉 村越八郎
文學博士 上田萬年
宮內省樂師 上眞行
音樂學校助教授 內田粂太郎
理學士 野田勢次郎
理學士 國枝元治
文學士 箭內亙
工學士 山田博愛
女子高等師範教授 山口西三郎
醫學博士 山口秀高
理學士 山崎直方
工學士 松繩信太
藥學士 巖松勝左衛門
文學博士 藤岡作太郎
小泉又一
高等師範學校教授 手塚千代吉
理學博士 寺尾壽
文學士 有馬祐政
醫學博士 天谷千松
法學士 西鄉陽

農學士 佐藤壽衛
文學士 相馬明次郎
ドクトル・フィロソフィー 氣賀勘重
醫學士 吃下功一
理學博士 岸上鎌吉
工學士 三橋四郎
理學博士 三好學
文學士 溝淵進馬
法學博士 志田鉀太郎
文學博士 白鳥庫吉
林學博士 白澤保美
早稻田大學講師 島村抱月
文學博士 幣原坦
海老田禪正
高等工業學校教授 平野耕輔
本山白雲
文學士 森田鐵三郎
文學博士 瀨川秀雄
關豹
文學士 鈴木暢幸
編纂主任
文學博士 芳賀矢一
文學士 長谷川龜平

○國民百科辭典とは何ぞ

宇內萬般の事物を該包し、古今一切の文明を縮收せる最新式百科辭典にして世界的學術的乃至は國民的實用的最新知識を國民一般に普及せしめんとするは本書編纂の目的也。

○現社會に最急要の書

本書の編纂様式は歐米最新の各種小百科辭典に準據し、解說切實、檢索

發行所 東京神田 合資會社 富山房

振替貯金口座 五〇一一番

電話本局 一〇三六

此廣告によりお申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

國民百科辭典

至大の利便、無上の重寶、加ふるに至便よく**最短時**間に於て**最多量**の**知識**を收得せしむ。實に百科辭典の最輕便最恰好なるものにして含蓄と眞價とよりいへば、儼然たる標準的大辭書と謂ひて可也。

○**價格低廉** 眞に國民百科辭典の名稱に背かず。

○**諸大家執筆** 本書の編纂法は内外相呼應して最も整頓せり。執筆の各專門大家は凡て**百餘名**に上り社會各方面のオーソリチーを網羅す。而して内部の編輯幹部に於ては此種の編纂に最經驗ある**芳賀博士長谷川學士**を主幹として苦心經營、遂に最も秩序あり最も活躍せる辭書中の辭書たらしむるを得たり而かも其**挿圖の豐富**にして精巧**絶美**なる、かく廉價なる書籍に、かく贅澤なる挿畫あるは、恐らくは空前といふべく、圖書のみを繙閲しても無限の趣味は油然として盡くる時無かるべし。

○**効用の無限無窮** 階級、職業、年齡、男女の如何を問はず、同人にも愛閲せらるべきは實に本書の有せる使命なりとす。社會の人は其**活動**の爲、家庭の人は其**修養**の爲、學校の人は其**研究**の爲、苟くも國家社會の一員として世の進運に伴隨せんと欲する人は必ず本書一冊を携へざる可らず、本書一冊を携ふれば座らにして各種各學科の智識を習得し、座らにして東西古今の事蹟情況を知悉するを得べく常に生存競爭の先頭に立ちて社會の原動力たり得べし。

○**理想的特賣** 解説説明に現今碩學の知識を網羅し、繪畫に彫刻に本邦美術の精華を發揚したる本書全部の價僅に貳圓八拾錢は**破天荒の廉價**也。是畢竟弊社が理想とせる**國民教育の普及**を**現實**にせんとする微意に外ならず。眞に此の如き無限なる知識の寶庫か、此の如き些少なる金額の支出によりて得らるべき機會は僅に五十日間のみ。

○**五十日間實費特賣** **特價金貳圓八拾錢**（正價參圓七拾錢）送料内地十六錢

○四六判裝釘極美千六百頁全一冊 十一月中旬ヨリ申込着金順送本

○**見本進呈** 往復葉書ニテ御申越次第挿畫入冊子見本送呈

發行所 東京神田 合資會社 **冨山房** 振替貯金口座五〇一番 電話本局一〇三六

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

市内は御一報次第直に御一覧に供し可申ハ地方の御注文は直ちに發送する手筈整ひ居候



内地小包料は代金引替手數料共金貳拾錢臺灣樺太滿韓送料は金卅五錢

弊店主任高橋彌四郎儀は舊トモエヤ支店長として廿有餘年間勤務せし處曩に同店を辭し右の場所に合資會社アヲキ商店を組織し多年練磨研究の功を實地に應用し各位をして後顧の憂なく且流行に遲れざる品物を確實廉價に販賣仕候間何卒御引立之程奉希上候敬具

市内ハ電話又ハ御一報次第早速店員御用伺ニ參堂可仕候

安心の出來る
クツとカバンは

アヲキ商店

京橋區南傳馬町二丁目東側

電話本局一七四三番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



銀製洋盃及木盃

紀念御贈與品若くは御懸賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達を致し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認遊ばさせられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一金七圓五拾錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味五十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀製徑二寸五分丸臺三ッ組無地盃　上等桐箱及袱紗付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也　同徑四寸丸　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸　同目正味二百卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一文字彫刻　一字　金拾錢
一大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻類返速製作貴命に應じ可申候

貴金屬美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商玉寶堂

（電話下谷特九六五・一二四四）

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

●當會社の約欵に從て保險契約を爲す者は最も多くの便宜を得べし
●當會社にて引受くる一人の保險金最高額は壹萬圓なり
●當會社の保險は凡べて嶄新にして且つ公平なる方法に依り計算したる利益附なり
●當會社は掛金割增(年增契約)の代りに保險金控除(或ル年限內ニ死亡セバ)の新法を用ゆ
●當會社は本願寺保護の下に全國に涉り有力なる眞宗信徒の組織せしものなり
●當會社は啻に眞宗信徒に限らず何宗旨の人にても保險契約を爲すに取扱上彼是の別なし
●當會社は短期掛金拂込の便法あり又保險證劵を擔保に貸金の便法もあり

眞宗信徒生命保險株式會社

京都市下京區油小路御前通角 (電話　七貳貳番) 京都本店

東京市京橋區南槇町壹番地 (電話本局五壹八番) 東京支店

大阪市東區大川町御靈筋角 (電話東壹貳五參番) 大阪出張所

長崎市榎津町六十五番地 (電話　七貳六番) 長崎出張所

廣島市紙屋町(秦　忠兵衛方) (電話　六〇八番) 廣島出張所

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

新學期開始校外生募集

早稻田大學講義錄

政治經濟科

法律科

文學科

各科共第壹號十月初旬發行

本大學は最も校外生の指導に意を注ぎ講義の平易明快を期し懇切に質問に答へ又特に講習會を本校講堂に開きて無料聽講の便を與ふ

各學課表及內容見本付詳細規則申込次第送呈

中學講義

商業講義

高等國民教育

本年四月開始目下第十三號發行何時にても第壹號より取揃へ配付す

詳細規則申込次第送呈

東京牛込早稻田
振替口座一一二三
電話番町三七四

早稻田大學出版部

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

豫約出版廣告

豫約締切 十二月二十日

見本 申込次第送呈

注意 官廳諸學校は申込前金を要せず但乙種價格に依る

菊版 背皮上製
全 三 冊
紙數二千三百餘頁
コロタイプ數葉入
正價金六圓五拾錢

日本近世時代史

分擔著者	
徳川史	……池田晃淵
幕末史	……小林庄次郎
維新史	……本多辰次郎

豫約方法	
豫約價	甲種一回即納、金五圓と小包料 乙種金五圓半（申込の際一圓と小包料を一二三ヶ月に各壹圓半宛を）
小包料	東京市内拾貳錢 内地卅六錢 清韓臺灣壹圓五錢
送本	一月より毎月一冊宛、但し乙種は第二回拂込の後より送本す

嚮に公にせる大日本時代史は專攻史家の研鑽に成りて新見卓説は隨處の紙上に溢れ近時稀覯の快著として一世の耳目を聳動し忽にして缺本となりたるに拘らず其配本を熱望し來るもの今尚陸續たりと雖も其卷帙浩瀚にして再刊の至難なるが爲に心ならずも悉く之を謝絶し來れり然るに時代史の續篇として豫て起稿を懸囑せる日本維新史は今や全く脱稿して太古より現代に至る本邦時代史の全部完成を告げたるを以て江湖渇望の萬一を醫せんが爲に諸彥の最も熱望せる既刊徳川幕府時代史、幕末史の二書を訂正して再刊に附し以て一部三卷の日本近世時代史と爲し豫約方法に依て之を頒たんとす徳川幕府の治世、幕末の多事、維新回天の偉業を詳にせんとする者は此期を逸せずして加盟せられんことを切望す

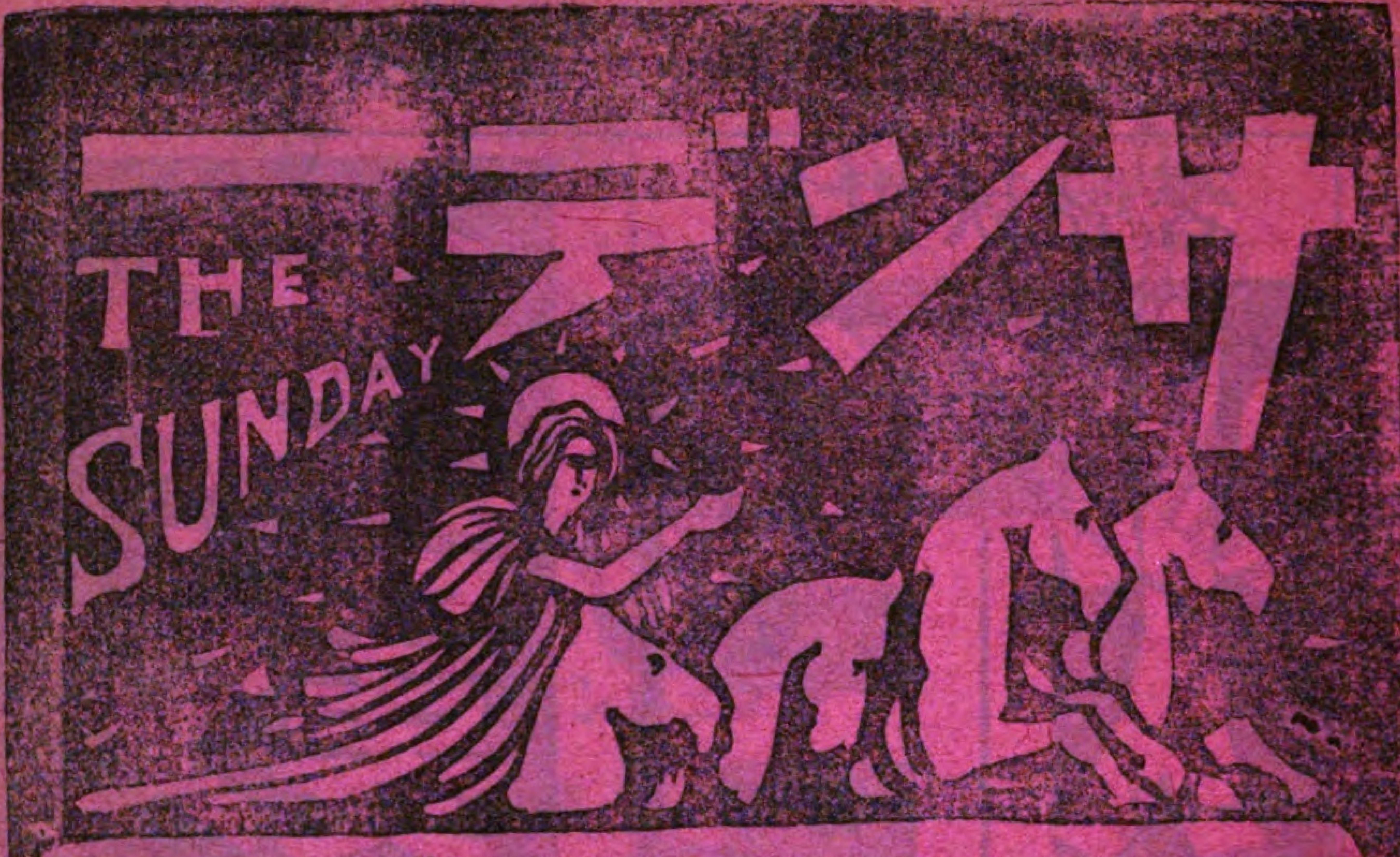
伯林大學敎授
フォン、リスト原著

獨逸刑法論 總則 各論

（特價發賣）全二冊千六百頁（詳細見本あり）
特價三圓八十錢（申込次第送呈）

豫約申込所 東京牛込早稻田 早稻田大學出版部 ◉ 取次所 全國著名大書肆

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



見よ神武以來

日本唯一の週刊新聞

十一月廿二日創刊（毎日曜日發行）

サンデーは毎日曜日に發行する日本唯一の週刊新聞なり日刊新聞經營の資金勞力を以て最も進歩したる編輯法と最も發達したる印刷法とに依りて社會百般の事象を評論報道す本紙は日刊新聞に優る左の特色を有す曰く

一、紙面の美術的　二、記事の詳細
三、内容の豐富　四、趣味の饒多
五、事實の正確

新聞界の新現象

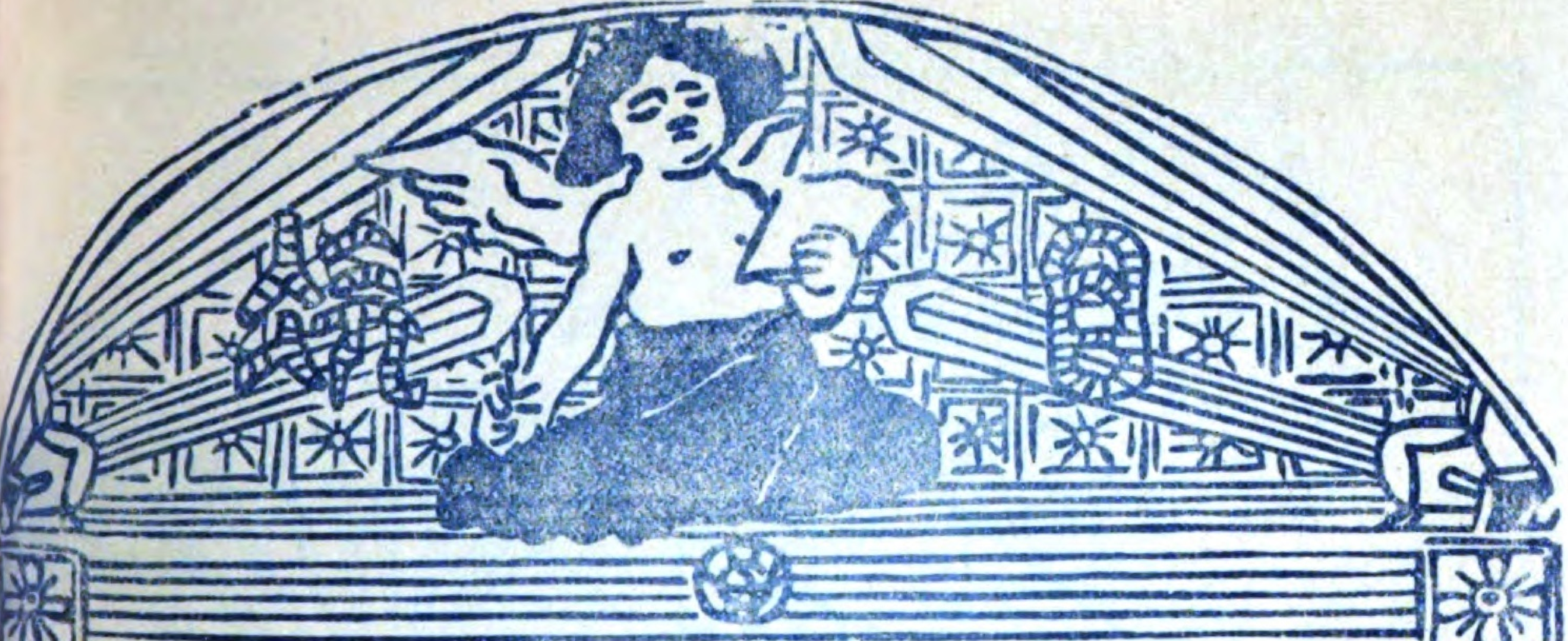
而して新聞紙的特色と雜誌的特色とを發揮す故に其生命永久的なり若し夫れ本紙の價値如何は乞ふ之を初號發刊に徵せられよ

（體裁）四六判四倍形、色刷二十八頁、挿畫及寫眞百餘枚、石版、銅版、三色版ジンク版挿入

（定價）壹部金拾貳錢、十部金壹圓、三十部金貳圓八十錢、五十部金四圓五十錢

東京市京橋區元數寄屋町三　太平洋通信社　電話新橋三五五〇 四五九九

（振替貯金口座一七五三番）



中央公論第二十三年第十一號目次



暹羅の俳優



第二十三年
第十一號
（第二百卅六號）

黒岩周六論

（一）

一部の學生社會に仰視せられ、一部の凡俗社會に惡漢視せられ、而して多くの方面に疑問とせらるゝ黒岩周六氏は、今や多年同棲したりし其の細君（敢て細君といふ、夫人といはず、黒岩氏を卑みてには非ず、實に夫人と稱すべき資格なきが故のみ）を離縁し、而して其の次第を公々然新聞紙に廣告したるに由て、幾んど世に忘れられんとしたるに拘らず、今や頗ぶる世上の注意を惹くに至り、現に喋々と彼れの新舊の經歷を叙記し批評する雜誌さへあり、吾人は今茲に少しく彼れの人物に就て批評を試みんと欲す、蓋し世に誤解せらるゝと未だ彼れの如く甚だしきものあらざれば也。

（二）

彼れが曾て荒縞の丹然(褞袍)を羽織り、大趺坐をかきて、金縁眼鏡に金煙管を咬えて料理屋の主人女將又は力士其の他の藝人を相手に花札を弄したりし時より、万朝報に於て大膽なる筆を揮ひ、縱横に攻擊し四角八面に薙ぎ立てゝ觸るゝ處悉く粉碎したりし態度に徴し、且つ朝報社員を逐ふに果決敢行、霹靂一下して鐵壁兩斷せらるゝ如き風采を想望するものは、彼れを以て豪膽絶倫の猛者と信ずるなるべし。

彼れの爛々たる巨眼と、引締りたる口と、幾んど直角的なる其の顋とを視たるものは、又彼れを以て冷酷にして極めて獰猛なる闘士と信ずるなるべし。

然れども是れ皮相の見のみ、彼れは一個の怯者(卑怯漢といふに非ず)のみ、極めて細心小膽なる者のみ

(三)

彼れは一種のハイカラ也、彼れの父曾て六合に周きの義に執て彼れに周六と名く、然れども彼れは其の名の甚だ凡俗らしきを嫌ひ、自から『大』と通稱したるとありき、自由民權論の熾盛なりし時代に於て、彼れは嚶鳴社又は輿論社の諸同人と屢々萬八樓又は井生村樓に於て政談演説を爲したりき。當時彼れはクワケンブスの雄辯美辭法を飜譯(輿論社出版)したりしが、其の演壇に立つや、手を振り體を動かし、音聲を抑揚する等、總て其の飜譯したる所に違はざらんと欲し、甚だしきは其の頭髮の分け方をまて原著者に模せんとしたりき、今日若し斯の如き體度を以て演壇に立たば、聽衆は其の氣障に辟易し、贈るに望小太君平と一例の綽名を以てしたりしなるべし

之を聞く、彼れの成立學舍に學ぶや、敎師(當時は大學生)三崎龜之助氏の風采と辯論とに傾倒し、總てを氏の如くせんとを期したりしといへり、三崎氏も亦一個のハイカラなりき、之に心醉せし彼れのハイカラなる、何ぞ多言を要せんや

彼れは今も尙ほ衒學の習氣あり、學者社會に在ては既に陳腐に屬する程の學說にても、彼れは極めて嶄新なるものゝ如く思ひ做し。得々として之を万朝報に掲げて、學者間に嗤笑せらるゝ事を知らず、曾て某學生の瀑布に投じて死し、人生不可解を咏嘆するや、彼れは堂々たる死生論を拈出して、此の薄志なる一書生の自死を誇揚し、多く識者を噴飯せしめたりき、而して是れも亦彼れが一種のハイカラたる例證ならずんばあらず

試みに彼れの寫眞に就て視一視せよ、其の撫肩にゾロリと黒紋附の羽織を着し、胸高に白紐を結び、角帶に袴を穿ちたる風采は、如何なる黒岩崇拜者と雖も、竟に其のエキセレンシーなるを信ず可らず彼れが此の不似合なる服裝を以て得々たる、亦一種のハイカラたるを自證するもの也

ハイカラにして豪膽なるもの豈之あらんや、例令是れあるも千万人中一人のみ、彼れは其の一人たる能はず、彼れの容貌の嚴厲なるに拘らず、其の頭髮の多く拔けて頂邊の禿せるを視よ、彼れの性格は彼れの骨相之を語るにあらずや

（四）

日露講和の成るや、万朝報は最も詭激なる議論を以て多く政府者の忌諱に觸れたりしが如く、屢々發

賣を禁止せられ、竟に發行を停止せられたりき、彼れ即時編輯局に掲示して、特に招集するまで出社を要せずといひ、以て一時局員に總解雇を行ひ、社員をして愕然色を變ぜしめたりしが、數日にして解停の命に接するや、彼れは倉皇八方に電報を飛ばして悉く社員を出勤せしめたりしといふ、彼れ後に人に語て曰く『政府の怒に觸るゝと深きが故に、停止は少くも三十日より短きとなかるべし、此の新聞競爭の激しき時代に於て卅日間停止に逢はゞ、讀者は悉く他社に吸集せられて万朝報滅亡せん、故に衆社員を悉く罷めて、唯だ山本秀樹、小林天龍と余と三人にて、再び万朝報の創業に取掛る覺悟なりき』と、彼の細心小膽なると想ふべし

彼れが新聞社以外、公人としての唯一の事業は理想團なり、彼れ其の發起の趣意を述べて曰く『今の世は總て協同を要す、一人善を爲すよりも、數人數十人數百人相扶けて共に善を爲すに如かず』と、夫れ義のある所は千萬人と雖も吾れ之かん、正義のためには刀鋸鼎鑊甘きと飴の如し、また何ぞ孤身煢然たるを懼れんや、抑もまた衆を恃むの要あらんや、眞の勇者の正義を行ふ斯の如し、而して彼れや衆と共にするにあらざれば善を行ふに難んず、勇者にあらざるや明か也、彼れ必らずしも衆と共に、若くば衆を率ひて之を善に導かんがため然かく曰へるに非ず、彼れの勇者ならざる本性茲に端なく露出せられしのみ

一昨秋電車燒打の說盛にして、毎夜投石あり、電車の運轉全く休止するや、彼れ嚴に社員を戒飭して此の暴行を非難することと莫からしめたりしが、更に警保局より、暴民を煽動せば、斷乎たる處分に及ぶ

べしと內訓せらるゝに及びて、また頓に其の筆法を改めたりしといふ、一世の俗論に抵抗し、眞に理義を標榜して以て濁世を導くが如き眞骨頭は、到底彼れに期す可らず、彼れは寧ろ俗に媚びて巧みに俗情を迎ゆる者のみ、萬朝報が常に政府を罵詈して毒言到らざるなきは、是れ彼れが勇者なるが爲めに非ず、蓋し新聞紙として政府の恐るべき所以は一もあらざれば也、近時の狀勢に於て如何なる政府と雖も、新聞紙の發行を停止するとも一週日以上なるを得ざれば也、政府を罵詈して毒言惡語を極むるも、其の損する所極小にして、而して却つて强者硬者の如く俗に迎へらるれば也、萬朝報が常に政府に對する態度は偶々以て彼れの勇者ならざる反證のみ、知らずや、怯なる者程常に衒ふて强がるとを

聞說、彼れ最も壯士を怖ると、壯士は名譽を重んぜざるもの也、牢獄を恐れざるもの也、彼れの之を恐るゝ洵に理あり、而して彼れの性格以て窺ひ知るべきにあらずや

（五）

世或は彼れを以て、總てに徹底するに非ざれば止まざる氣魄ありと做すものあり、人を殺さば血を視るべし、彼れ果して斯の如き人物なる乎

彼れは相撲を觀るとを好めり、而して視巧者なると彼れの如きは尠し、彼れビリヤードに於ては名手と稱せられ、聯珠碁（五目並べ）に於ては海內に三人となき名人と稱せらる、果して總て徹底するに非ざれば止まざる乎、是れも亦頗ぶる違へり

彼れは俗に謂ふ凝り性なるべし、然れども熱し易くして冷め易し、彼れを熟知するもの丶說によれば、

彼れ萬朝報改革の志を立て、屢々諸種の方法を設けて以て社員を督勵せり、然かも一として永續し徹底したるものあらず、彼れ曾て社員優遇の途を立て、幾年以上勤續し、及び殊功あるものは株主として待遇する方法を定め、憲章頗ぶる秩然として大に社員を悅服せしめたりき、然れども未だ三年ならずして悉く之を廢したりき、後小林天龍、天城安政、生島一、山本秀樹、三木貞一の諸人を元老とし、每期萬朝報の發兌部數を檢閱せしめ、其の多少によりて以て利益を配當することしたりき、然れども亦忽ちにして之を廢止し、唯だ隔月少許の手當金を與ふるに過ぎざりき、彼れ又編輯員を會合して日々會議を開き、以て紙面改良に鋭意せしめ、彼れ自から議長たりき、然れども未だ二ヶ月ならずして亦之を廢絕したりきといふ

彼れの得意とする五目並べは、世を擧げて未だ研究を盡さゞるもの也、之に名人たるも未だ奇とするには足らず、況んや相撲の覗巧者といふ如きをや、相撲の如き簡單なるものを覗るに、何人か彼れに及ばずとする者ぞ、球突きに至ては、彼れ山縣螽湖氏にすら及ばずと聞く、今の斯道の撰手は、彼れを覗ると小兒の如きのみ

彼れ曾て發奮して哲學書を讀めり、其の結果は彼の『天人論』となれり、彼れはプラトー、アリストートルよりゲーテ、スピノザまでの歷世の哲學書を耽讀して、其の讀書力の快速なるに人を驚ろかしめたりき、然れども竟に井上哲次郎博士とは比す可くもあらず、且つ今や乃ち如何の狀ぞ、彼れは一時唯だ哲學に熱せしのみ、今や則ち冷めたり、然かも竟に要領に徹底したりしに非ず

彼れ近時一切の事を廢し、田村保壽に師事して圍碁を研究すると一年餘、然かも尚ほ初段に數目の手合なりといふ、此の點に於て彼れは寧ろ鈍根の士也、彼れを以て天成の才人とし、若くば精力絶倫の人と做すと恐らくば至評ならざらん

（六）

斯く評し來れば、彼れは殆んど全く取柄なき人物なるが如し、然れども誤解すると勿れ、是れ唯だ彼れの欠點のみを拾ひ擧げたる也、凡そ如何なる人物と雖も、欠點なきものは之あらず、欠點なきものは聖人也、神佛也、彼れと雖も凡人たり、如何ぞ多くの欠點なからんや、吾人は唯だ世人の多くが彼れの欠點を看破すると能はず、却つて之を反對にヱラク視たりしを笑止に堪えずとして、玆に呶々したるのみ、依て更らに轉じて彼れの美點を窺はんと欲す、思ふに是れも亦吾人が多く世と見解を異にする所にして、而して彼れの誤解せられたりと做す所以亦多くは玆に存す

彼れは細心小膽也、然るが故に斷じて惡人たると能はず、惡人たる度量なきのみ、膽力なきのみ、思ふに彼れは大なる善人たると能はざるべしと雖も、然かも欠點なき人物也、素より積極的善人に非ざらんも、消極的には申分なき善人也

萬朝報の成功するや、三菱家は之を奇として彼れに交渉すらく「丸之内の我が所有地に於て、足下は足下の理想通りの新聞社を建築せよ、一切の建築費、印刷器械費、其の他總ての設備に要する費用は我が一家總て之を負擔すべし、足下は此の出資に對して最も低利に、且つ永年賦を以て償却して可也、其

の條件の如きは、擧げて足下の欲するがまゝにすべし」と、彼れや之を聞きて食指大に動かざるを得ざりき、彼れの左右幕僚に至ては、幾んど雀躍して大に成すべきを悦び、諸種の注文を持出すあり、氣の利きたるものに至ては密かに新築の設計をすら立てたりき、然れども彼れは沈思默考すること十餘日の後に及びて曰く「三菱家の好意は深く謝す、然れども其の交渉には應ずる能はず」と、左右愕然たり、彼れ徐ろに慰さめて曰く『若し我が理想通りの新聞社を丸之内に建てゝ盛んに營業する時に至つて、三菱家突如新聞社に對する注文を提出し、聽かざれば則ち退去せよと迫らば如何、我が萬朝報は自から滅亡するに非ざれば三菱の奴隷たる外なからんとす、是れ豈忍ぶ可けんや』と、彼れの細心小膽なる君子人たることは玆に至て益々明瞭也

世には未だ曾て家賃を仕拂はざる辯護士あり、高利貸に一文の元利だも仕拂はざる文士あり、若し彼れにして此の辯護士と文士との惡黨的度胸あらば、先づ三菱の申込に應じて思ふ通りの新聞社を建設し而して三菱諸種の注文を出すも應ぜず、反つて逆まに彼れより諸種の强請を爲すべし、彼れや此の辛辣なる手段に出づる能はず、惴々焉として三菱の注文を拒否し能はざるを怖る、細心小膽に非ずして何ぞや、彼れは實に斯くして三菱の交渉に應ぜず、以て自から全くすることを愆らざりき、自知の明あり、由て以て善人たるを得たりしと謂はざる可らず

（七）

彼れの朝報社に在るや、恰かも富岳が獨り玲瓏たる白雪を戴きて群巒の中心に屹立するが如し、彼れ

の左右には紳士として醇の醇なるものあり、彼れに傾倒して彼れのため勞を惜まざるものあり、一身を犧牲として其の職分に殉せんとするものあり、而して一部世上の傳說する所によれば、華族の家庭を訐きて、黃白のため其の筆を左右したりしものあり、常に黃白のため其の記事を伸縮し卷舒するものあり、甚だしきは或る會社、或る富豪より給與を仰ぎつゝあるものもありといふ、吾人は素より之を事實として裏書する自信を有せず、而して又之を否認すべき反證をも有することなし、唯だ萬朝報が久しく惡德新聞の開祖に數へられ、其の過去現在を通じて未だ全く淸淨の名を得るに至らざるを奈何ともしがたきのみ、然れども彼れ自身に至ては、曾て微毫だも其の手を汚したることなく、又汚されたることなし、世或は彼れ自から淸きも左右の濁れるを默認したらんといへり、然れども之を聞く、彼れ曾て全社員を精養軒に招集して晚餐を饗し、堂々乎として聲明して曰く『余は一個の紳士として茲に最も明白に斷言す、我が萬朝報は創立以來多くの困苦窮乏と戰ひ、幸ひに今日あるに至りしと雖も、此の間一錢たりとも汚れたる金を手にしたることなし、世間或は朝報を脅喝其の他によりて黃白を貪ぼれるが如くいふも、余は再び明言す、余は斯る誣妄の言に對しては、何人の前に於ても其の誣妄なることを證言し辨明し得ることを』と、果して然らば彼れは其の左右の濁れるをすら否認する也、彼れ自身の潔白なる知るべきのみ、蓋し彼れは彼れ自身を以て他を忖度するもの也、聊か迂なるを免かれずと雖も、彼れが淸廉なる君士人たることは、此の一事に徵して益々明白也、過を視て茲に仁を知る、豈其れ彼れの謂ならずや

或は彼れを以て甚だしき皮肉家と爲すものあり、彼れの文章を視るに、紆餘曲折の妙を極めて、敵をして怒らんと欲するも怒る能はざらしむるに至る、然かも其の內一種寸鐵人を刺すが如きを藏す、茲に於て或は彼れを呼んで『蝮の周六』と做す者あり

二六新報社長秋山定輔氏が露探の嫌疑を受くるや、心あるものは其の餘りに非常識的なるに噴飯したりき、然れども其の一度議會の問題ともなりしがため、瞶々者流は頗ぶる之を迷疑したりしが如し、當時彼れは秋山に自決を促がす一文を作りて之を萬朝報に掲げたりき、其の文章婉曲、殆んど妙を究極せり、識者或は以爲らく、彼れ斯の如き捕捉す可らずして然かも人を刺すが如き名文を以て、其の所謂商賣敵として相下らず、動もすれば彼れを凌駕せんとする秋山に一撃を與へ以て再び起つ能はざらしめんとしたりしのみと、然れども是れまた誤解のみ

彼れは當時心よりして秋山を疑へり、之を以て其の秋山を難ずるや、當さに堂々乎として之を擊つ可かりき、然かも細心小膽なる彼れは萬一其の疑ひの中らざらんとを怖れしのみならず、秋山の部下に慓悍なる死士あるを畏憚すると甚だしきがために、頭を憚かり尾を怖れ、言はんとして言はず、斷ぜんとして斷ぜず、竟に紆餘婉曲斯の如き一種の妙文を作り上げたりしのみ

彼れの皮肉なるが如きは、亦是れ細心小膽にして他を恐るゝと甚だしき結果のみ、彼れ若し惡人ならば傲然として長脇差的啖呵を切らん、何ぞ婉曲に皮肉を謂ふ可けんや

彼れの萬朝報を經營するや、多くの名士を網羅し得たりき、然かも彼れ能く悉く之を用ゆると能はざりしは何ぞや

彼れの社に天城安政なるものありき、高等商業學校の出身にして、其の成績實に優良なりき、卒業後大倉組に聘せられて神戸及び函館の支店長に歴任したりしが、才に任せ智を恣にして竟に若干の店資を私消したりしがため、去つて後に朝報社に入れる也、爾來深く慚ぢて自から韜晦したりしも、其の奇材逸足は屢々鋒芒を顯はし、一度は大阪取引所の問題を提げて農商務大臣伊東巳代治氏を彈劾し、竟に之をして辭職の餘儀なきに至らしめたりき、當時天城の筆端幾んど電光の迸發するが如く、視るもの皆眩迷して驚魄したりき、天城が編輯局の經濟部に主たる間は、萬朝報には奇慧俊峭、驚異すべき記事を絕たず、隱然として一敵國の觀ありき、天城歿してまた昔日の片鱗だも看取す可らず

彼れは天城の高才逸足たるを知悉したりしならん、然かも善く之を用いて十分に其の驥足を伸ばしめざりしは何ぞや、揣るに、是れ細心小膽なる彼れに於て、此の駿材を容るゝ能はざりし乎、天城の死するや、彼れは殊に一弔詞を紙上に公載して悼惜の意を表したりき、就て看るに、彼れも亦能く天城を認識したりし也、而して竟に之を用ゆるに至らざりしは、天城果して彼れに心服せざりし乎、天城能く朝報社員等の情僞を看破し、常に冷笑的輕侮的態度を以て編輯局の一隅に眈視し、殊に彼れの理想團を始め、彼れの一擧手、一投足に就て、多く其の寸鐵殺人的罵評を浴せたりしといふ、彼れが之を用ゐざりしは豈此のため乎、吾人は玆に於ても亦彼れの善人にして而して小膽細心なるを視る、清濁併せ呑むが

如き悪黨的度胸あるを見る能はざる也、彼れが内藤湖南を逐ひ、幸徳秋水を去り、堺枯川を容るゝ能はざりしも亦た此れのみ

(十)

彼れの細君を去るや、毀謗紛々として到り、或は母子併姦といふが如き醜文字を用ゆる者さへあり、吾人は士人の作法として敢て斯の如きを避く、唯だ一言にして悉さん、彼れは斯の如き醜事を敢てする膽力なきもの也、假令偶然に之を犯したりしとするも、懊惱して安んぜず、竟に自から死するもの也、而して竟に其の事なし、是れ彼れが純潔なる明證也、且つ彼れの親近する門下生等が、細君の去らざる可らざるを切言するや、彼れは低徊顧望して斷ずる能はず、門下生等が苦諫し強請するに至て、始めて之を斷じたりしといへり、彼れが情に弱き士君子にして、且つ細心小膽なる、茲にも之を徴するを得

彼れが細君と家庭の味ひを味ふと能はざるに方つて、彼れは持戒嚴密なる高僧の如く、曾て一度も婦人に汚されざりき、彼れは小心翼々として當世の紳士を學ぶと能はざりしのみ、唯だ此の一事を以てするも、彼れは得易からざる紳士として傳ふるに足る、素より細心小膽を問ふに遑なき也

彼れが多く世に誤解されたりしと斯の如し、彼れや赤手空拳を揮つて異數の成功を爲したりしとし、先づ一部に仰視せらるゝと雖も、是れ已に一の誤解也、彼れと同じく赤手空拳より崛起して成業したりしもの、西に村山龍平あり、東に大橋新太郎あり、此の二人者の成功は、彼れに數倍し十數倍す、彼れは僅かに増田義一と追随するに足るのみ、彼れを以て怪傑とするは、する者の迷信也、彼れは畢竟する

に細心小膽なる一善人に外ならず、彼れ常に自から稱して『平凡なる小人』といふと聞く、彼れは恐らくば之を以てハイカラ的に氣取る積りなるべし、然れども是れ實に彼れ自から適切に自個を許し得て謬らざるもの也、彼れは最も同情さるべき細心小膽なる君子人也、決して忌まれ、畏れられ、疑はるべき怪人物にはあらず

若し夫れ賢愚を標準としていはん乎、彼れは愚人に非ずして賢人也、昧者に非ずして智者也、聰明也、常識に富めり、讀書人也、本來感情に激しきも力めて自から理性の人たらんことを期せり、彼れの文章に至ては簡潔明透、當世能く及ぶものなし、是れ彼れが今日あるを得たる所以也、故に彼れは技巧の人にして品性の人に非ず

東京市の拙劣なるコメヂイ

我が東京市は、二百年以前其の江戸と稱せし時代に於て、實に世界第一の大都市なりき、當時伯林は實に一村邑なりしのみ、倫敦は未だ小なりき、巴里は稍々大なりしも尚ほ人口百萬に達する能はざりき、況んや紐育、シカゴをや、西隣の北京と南京とは、頗ぶる雄大なりしと雖も、然かも竟に三百諸侯の妻孥と臣從と、及び之に供給すべき一切の諸機關を具へて、百萬以上の人口を有したりし我が江戸とは比較する能はざりき

此の世界第一の都市なりし我が大江戸は、東京となりて人口一百五十萬以上を有し、倫敦、紐育、巴里、伯林に亞ぎて世界屈指の大都市たる地位を失はざるも、其の市政に於て世界の大都市に於て未だ看る能はざる喜劇を演出して、常に人をして噴飯せしむ、否其の劇の拙惡なる、往々人をして嘔吐三斗ならしむるものあり

辛ふじて七朱の配當を爲すに過ぎず、甚だしきは其れすら虛僞の遣繰算段に出づとまで稱せらるゝ電車を捉へて、極めて豐富なる財源と稱し、之を市有經營と爲さんと欲して、珍無類の計算を立て、政府に迫つて之を認可せしめんとしたるも、竟に其の志を遂せざるや、東京市の參事會員等は、其の責任を負ふと稱して先づ一併に辭職し、次て再選又は新選せられて兎にも角にも茲に新たなる市參事會を成立せしめたりき

然るに參事會員と同じく辭表を提出したりし市長は、飽まで辭意を固執すべしと思ひの外、頻りに再選運動に鋭意したり、以爲らく、以て我が市民に對する信認を問ふのみと、市長にして自から市民の信認を問ふ、既に甚だ奇とするに足る、東京市長は英國の國務大臣にあらざれば也、吾人は此の一事を以て先づ東京市長其の人の抱負の絕大なるに驚嘆せざる能はざりき

吾人は思へらく、市長にして眞に市民の信認を問はんとするも、市長を選擧するものは市民にあらずして市會議員也、而して此の市會議員なるものは、決して正當に市民の意思を代表することなし、代表者ならざるものに信認の有無を表白せしむ、是れ眞の信認にあらざる也、然かも自から傲然として信認を

問ふと稱す、奇といはずして何とか曰はん

且つ自から信認を問ふ以上、拱默して市民否市會議員の選擧に一任するを當然とす、自から運動し、周旋し、叩頭し、懇請して再選を圖る如きは、寧ろ醜也、陋也

更らに奇なるは、之を選擧すべき市會議員の行事也、彼等の或るものは、自家の勢威を示すがために極力市長を再選せんとしたりき、其の必らずしも市長を信認するに非ざるや明白なりき、而して或るものは他の人を擧げて市長を變更せんとし、極力運動したりしも、適當なる候補者を得ず、之を得るも其の人の認諾を得ざるがために、竟に市長の任期を制限して以て僅かに再選に同意せんとしたりき、而して自家の威力を示すがために再撰せんと欲するものは、任期制限を以て市長其の人を侮辱するものなりと稱し、極力之を排斥したりしも、結局條件を容れて、市長の任期を制限し、兎にも角にも市會議員の一致を以て再撰するに決したりき

而して市長其の人も、始めは任期制限の條件を以て自家を侮辱するものなりとし、毅然として之を峻拒したりしも、何時の間にか其の條件に屈服するを肯てしたりき、斯くて其の內約全く成立して、彌よ撰擧當日の議場に臨むや、條件主張派は、內約の巨細を知り拔きながら、任期の長短を市長に問へり、而して市長は昂々然として曰く「我が市長として任期滿了に至るまで盡瘁するや否やは、今より豫言す可らず、盡瘁し得る間は則ち依然として盡瘁すべし」と、條件主張は玆に於て啞然自失せざらんと欲するも得可らず、條件の內約なるものも亦竟に有耶無耶にして判す可らざるに至る、

嗚呼是れ最も驚異すべき喜劇にあらずや、一切の事悉く無意味に陷れり、一切の事總て條理に反し、矛盾、茫漠、殆んど捕捉す可らず、滑稽の極也、而して實に醜陋の極也、殊に記せよ、此の劇中の大立者たる東京市長は、前國務大臣にして、清廉高節の君子人たる評判喧しき尾崎行雄氏其の人なることを、玆に至て喜劇の骨頂也

助役の撰擧も亦然り、一方は田川太吉郎、原田十衞の二氏を擧げんとし、一方は宮川鐵次郎氏と他の一人とを擧げんとし、兩々相爭ふて屈せず、然かも此の三氏の材幹伎倆の助役に適任たるがためにあらず、唯だ互ひに勢力を張りて、其の顏を潰さゞらんとするのみ、玆に於て最も怜悧なる策士は、双方の顏を立つるがため、助役の員數を三人に增し、三氏をして悉く當撰せしむるの案を工夫し出したりき、或は人のために役を設くるを誹れるものありしも、斯る理論は、到底行はるべきに非ず、各々其の名案なるを悅びて竟に三氏を擧げて芽出度其の幕を終りき

宮川氏が曾て都新聞に筆を揮つて、星亨氏を攻擊したりしがため、市會議員の一部は、氏をして助役たる御禮として、星氏の墓に詣して以て前年の罪を謝せしめたりき、是れも亦滑稽として見るの外、吾**人は評すべき言句を有せざる也**

彼等は、墓參にまで氣の付く程細心なるに拘らず、田川、原田の二氏が衆議院議員にして、果して助役たる職務に忠實なるや否やを問はざる也、否、三氏の助役としての技倆材幹を問はざる也、唯だ擠かんと欲して擠くのみ、曰く『我が顏を立つるなり』と、奇なる哉、而して醜陋なる哉

最も奇なるは東京市民也、彼等は彼等の代表者なる市會議員が斯る喜劇を演ずるを見ながら、曾て聲色だも動さかず、其の劇の拙惡なるを見ても眉をも蹙めざる也、僅かに俳優の一失を見ても、尙ほ大向ふより『大根』の掛聲を爲さゞるなき我が東京市民が、獨り此の最も拙惡なる喜劇を見て平氣なるは、盲乎、將た無神經乎、吾人は更に是を以て喜劇以上の奇蹟なりと稱せざるを得ざるのみ

(以上二篇十月十日稿)





上野の展覽會を見て日本畫の將來を思ふ

文學博士　藤岡東圃

幕は落ちたり、上野は秋の錦を飾る、公設展覽會の一部と二部と玉成會の展覽會と鼎立して、天下を三分せんとす、盛んなるかな。

彫刻は振はず、見るべきは繪畫にあり。西洋畫最も世人の耳目を牽き、往き來るさの毀譽褒貶、後れて至るは觀もやられず。公設の日本畫これに次ぎ、玉成會はガランとしたる場中、監視の女も睡げなり。必ずしも畫の質に甲乙あるがため然るにあらず、勢なり。

西洋畫はしばらく措く。日本畫には公設と玉成會とを併せて三絕を得たり、竹內栖鳳、山元春擧、下村觀山三氏の作是なり、安田靫彥氏またこれと頡頏して、嶄然頭角を現はせり。

竹內氏の「飼はれたる猿と兎」は公設展覽會にあり。二曲屏風一雙、右は鎖に繫がれて臺板の上にある三疋の猿、左は葭簀に圍まれたる中にある八疋の兎。彼此ともに竿竹なり棒杭なりを、縱に樹て、橫に渡して、幾何學的の直線の經緯は一見殺風景の感なきにあらず、再見再三見して其工夫に驚く。まして動物活躍の妙に至りては、正に天下の一品、狙仙も何かせん。精錬の筆は意の行くに任せ、指頭細かに刻んで纖毛ゆるく風にゆらめき、もしくは筆尖一回骨肉忽ち動く。猿は狙仙一流の柔媚の態に似ず、きたなき所はあくまできたなく、瘂見の面のやうなつら付も、從來に見ざる所なり。眞中の一疋は三佛の中尊、一身の注意を突くが如き眼と怒れる鼻とに集めて、正面を見つめたり。來る

者は何ぞ、好餌を貪らすか、痛棒を加ふるか、敵か、味方か、或は吾を顧みざる者か。黒雲慘澹、迅雷將に至らんとして未だ至らず、手足の或は垂れ或は曲げたるもの、一時力を潜めて、頃刻の後を待つ。機一髮風雨殺到、來らんとする叫びと騷ぎとは、ありくと見ゆるが如し。右の一疋は鐵鎖をがらめかし、臺板のめぐりに翻筋斗うつて狂へり。奮闘の様、痛苦の影、かなたの柿をねらへるか、桎梏の惱みを訴ふるか。夕立霽れて天更に青く、動極まつて靜の姿を右の一疋に見る。遙かに天の一方を望み、左手鎖を執つてしかも鎖を知らず、蒼空高く過ぐるは雲か、渡り鳥か、恍然として想ひは亂山深壑の間にあり。三個對照して、一面人生の鏡とも見るべからずや。

雪花菜は喰ひ盡されて、空しき笊は斜めに葭簀にもたれたり。兎は食に飽きて五疋六疋、陳々相よりて半睡半醒の境にさまよひ、遠くのそとに聞ゆる蠅蜻蛉の羽音にも動くなるもちまへの長耳も折れかがみて、何を思ふともなし。その中の一疋は獨り頭を塒の竹にもたせて、野菊の匂を嗅ぐやうながら、故郷戀しき想ひを運らすには、身も魂も餘りに懶げなり。前に一疋群を離れて、食後の裝ひ急がしく、頻りに一本の後脚を投げ出してこれを舐る。姿態生動、楚々たる落筆の間に動物の精神は潑剌せり。側にまた一疋、尻を此方に、後脚高くノソノソと歩み去らんとすれども、心はなほ行歩にあらず。この二疋のみや、靜中の動、一鳥聲ありて山更に幽なるが如し。兎は穩、猿は躁、此は痴、彼は狡、此は安住、彼は煩悶、二様の意義を二種の獸に寫して、しかも同種の個々おのく特殊の態あり。昨年の「雨霽」と共に、動物の描寫に入神の技を示す。觀察の鋭、感受の敏、相待ち相援け、刹那の影を捕へて永遠の鏡に留めたり。

更に余輩はこの畫を昨年の下村氏の「木間の秋」と對照するの甚だ興味あるを思ふ。彼は、蒼々とたちたる木々の直線がちなれど、上には蔦葛を或は弓なりに、或は斜に這はせ、下には薄を靡かせて、和らかなる曲線を配合せり。此は、鉛垂と水平との直線の交叉のみ

にして、僅かに猿の方に餌を載せたる板を斜に渡せるを見る。彼れは鬱葱たり幽寂たる山中の趣、此は板と杭と竹と簀との外には物もなき索莫たる景、彼は植物をのみ寫し、此は主として動物を描く、彼は飽くまで樹と草とを茂らせて、深山の香を傳へんとし、此は殆ど草木なくして、しかも纔かに自然の片影を現はせり。即ち猿の畫には右の肩に一寸藤蔓を覗かせ、地上また數片の落葉に一顆の柹、兎の畫には葭簀の合せ目を漏るゝ野菊の花一ッ二ッ、葭簀を拔いて蚊屋釣草の穗の三ッ二ッ、唯これのみ。有つて無きが如く、無きが如くにして千鈞の値あり。輕く筆をつけたるゆかりの色に、曠漠たる山野の秋を偲ばしむ。配合布局思を潛めて、構成の妙を盡せるもの、余輩この畫に於てこれを見る。

山元氏の「雪松圖」また公設展覽會にあり。四隻の屏風を列ねて、老少四種の松に雪のかゝりたる姿を寫す。夕の雪の左の方より霽れ行きて、朝日影キラ〳〵と一杯に映し渡れるが、右の方にはなほ雪氣の殘れるにや、絹を隔てゝ見るより薄き松影あり。かくの如き朧の影はあらずもがなと思へど、余輩は今その瑕疵を摘むが如き暇あらず。左の稚松は撓み埋もれて、重さの堪へ難げなる樣、はかなき少女の浮世の浪に惱めるに似たり。次は丈餘の樹が枝を張りて立てる姿の、衣を肘にして悲歌慷慨する青年の如しと思ふはいかに。その次は此方に受け、彼方に外して、分別盛りの男の世を渡るが如し。表は雪に冷くして、なほ暖かなる肚の裏を見せたるは、稚松の無邪氣と相對して、尤も伎倆の非凡なるを現はす。果の右には數本の幹高く聳えて、世の風雪も知らず顏なるは、惑はざる老年の姿ならずや——こは言ひ過しぬ。かくの如き比喩は小理窟なり、鑑賞の途をそれたる批評の邪道なり。余輩は唯雪松の逼眞に驚いて恍然たりといへば、則ち足る。近づいて見れば、亂暴なる枝の振、ヨロ〳〵としたる葉の形、こんなものがと思はるゝを、二歩三歩退いて見れば、かきもかいたり。更に數歩退いて、見るともなく、思ふともなくして立てば、百里は咫尺、身は忽ち渡月橋

畔の雪に立てるが如し。雪の松は從來この作家が得意とするところなるが、わけてこの度は能くその覇氣を收めたるを以て、一層の進境を示す。蘆雪は應擧に近づけり。古來書松に巧みなるもの、獨り應擧を推す、されどこの古書伯も、松においては遂に今の「雪松」に及ぶこと能はず、世も進めるかな。斯くの如き特技ならば、終生松をのみ書くもまた足れり。

下村氏の「大原御幸繪卷」は玉成會展覽會に出づ。すべて六段、一段は草稿のまゝにして、終の一段は余の觀し時、未だ陳列せられず、外に見返しの料なるべし、蓮座の上に龍の蟠れるを書けるは、入水の幼帝に、因める水天宮ならんか。まづ一段、つと眞中に立ちて、秋の紅葉もかくやとばかり、赤き若葉を茂らせて、其間に白くはかなき花を着けたるは、遲山櫻今し夏にかゝりて散り殘れるなり。櫻の下に小さき塔婆の一群、幾代の人の記念にや、年々歳々春は來去すれども、一たび逝きたる人は復還らず、たゞ落花白く地に布きたり。山中纔かに轍の跡を留むれども、二頭の鼯鼠の途上に戲るゝを見て、行人のとだえたるを知る。來し方を顧みれば、補陀落寺の鐘は霞に籠りて聞えず、都は何處、指さす方も朧なり。初夏の情景たゞ寂寥、滿幅一人を着けずして、まづ山中幽邃の趣を覺らしむ。次の一段、正面一帶の崖、崖には細き瀧落ちて、下陰の谷川に入る。谷川に沿うたる細徑に立ちて、崖の上を眺むる田舍者夫婦あり。夫は兩手を後ろに臂の上に重ねて、一心に見入り、辭もなくして、鼻の赤さぞ目に立ちたる。嬶は招き、髫童は走る。眺むるものは何ぞ。崖の上に路あり、木の間をちらつきて、美はしき色の漏るゝは、院の御幸とやらん。かくして主なる人物は片田舍の三人にて、左の肩に見する程もなく鹵簿の影を見せ、人をして隔靴の感に堪へざらしむ。

第三段は御幸の鹵簿を名殘なく見せたり。名殘なしとはいへ、木々の間を縫ひ行くにて、人よりも景おのづから主なり。木々の色は此一段最も濃くして、松檜茂り合ひ、青葉の蔦のいやが上に纏ひたるもあれば、藤の花のまばらに懸りたるあり。木蔭に隱れて姿はと

められねど、山郭公の一聲は御輿のうちに落ち來る。手法正に昨秋の「木間の秋」を偲ばしめ、彼は此の一部を取りて廓大したるもの、此は彼を一局に收めて全景を描花たるものなり。次の一段は山の上にて、岩躑躅花今を盛りとその色を誇る。草を分け露にそぼちて、二人の尼御前立ちたり。貴にいた〳〵しげなるが、石楠花折り摘みたる花筐臂にかけて、見かへり給ふは、女院にて渡らせ給ふ。老尼が妻木をかいこみて、岨の下見おろしたるは、見なれぬ鹵簿の練り來るを、何事のありてかと訝るなるべし、これぞ先帝の御乳母、大納言の佐の局なる。更に一段を進めて、庵室の樣を示す。庵室と前庭と共におのづから二部に分れたり。一間に院と門院と御對顏あり、院の御姿は半ば蔀に隱れたり、女院の後ろには佐の局畏る。持佛には來迎の三尊、閼伽棚も緣に並びてその構へあり。庭上に御輿を据ゑて、緣の上なるは花山院の卿か、下なるは北面の某にや。小柴垣の下には隨身數人、眉毛の白きは片手に鼻を支へて、睡氣なる色に行步の疲れを現はす。池の汀には山吹、若葦、い笹を笹に杉菜さへ生へ布きて、葎の蔓は緣の上まで延びかゝれり。此方の部室は臺盤所、折敷、半挿など徒らに二十年榮華の名殘を止めて、缺け禿げたるぞ哀れなる。庭は畠に作りなして、蔬菜を種ゑたり。間遠に結へるませ垣につかまりて、物珍らしげに覗き居るは、ひすましめく賤の女、賤しき衣裝も色に變化あり、女院主從と同じ出家姿を避けたるは、尤もの事なるべし。かくて一段々々と見行く程、引き入れらるゝ樣にて、文治の昔、大原の奥に分け入りたりとばかり心地は惑ふ。細やかなる筆、鮮かなる色、優麗精緻の技を極めて、譬ふるに物なし。宛もこれ古繪卷の趣を行るに、自家の手法を以てし、寫眞を離れて油然たる詩味を傳へんとするものなり。

安田氏の「守屋大連」もまた玉成會の方にあり。中幅は聖德太子、左右は馬子、守屋の三幅對の一なりとか聞けど、今は他の二幅を見ざれば、此一幅をしも單獨のものとして見るべし。此畫の價値は專ら守屋の顏面の表情にあり。但し昨年の豐公に類似したるが如きは、

聊か千篇一律の嫌なきにあらねど、其意義の深きは更に昨年より一歩を進め、衣袴の描寫もまた進境を示す。顰みたる眉、こけたる頬、幾十年の辛酸にか鍛へたる。横を睨みたるが如き眼ざしは、やゝ首傾けらるれど、狡猾にしてしかも傲慢なる性を現はせりと思へば、これもまた可し。緑の袴のやゝ現はれたる外は、滿身白色の袍、これを横ぎれる縹の帶も水際立ちてよければ、繞みて袍の前を渡れる倭文織の太刀の緒は、さまで濃からずして、なほ目覺むるばかり鮮かなり。頭の廻りに赤き襟のほの見えたるも首肯かる。色彩の配合くどからずして、しかも十分なる効驗あり。但右の手にて太刀を杖きたれば、此手に力は入りたらんと思はるゝに、右の足の左よりも少し前に出てたれば、右の手は輕く浮びて、其力は現はれず。また太刀の緒を執りたる左の手に、力は入り過ぎたるにあらずや、この方はむしろ物持つとも持たぬとも感覺なきやうに、手輕く垂れさせたし。側に立ちたる若人もさして惡しからず、脚結などは未成のまゝなるにや。今一人後ろに兜を着、鉾を立てたる男は、別手になりたるが如き庸劣なるもの、一幅の値を下すこと夥し。尤も見るべきは守屋一人にして、人物畫としては昨年と同じく單純なるものながら、其表情に於て本年第一の成功作なり。あはれ斯くの如くにして、また複雜なる畫題をもこなし得たらましかば、日本畫の前途もまた頗る有望ならんを。

飜つて思ふに、竹内氏の猿と兎といひ、山元氏の雪松といひ、動植を寫して其三昧に到れるもの、古今東西に蓋し類稀なり。こは固より二氏の天禀にして、他の企及して成り難きものありといへども、此好結果は猶熱心なる觀察を經て、實物の髓を拔き精を嚼ひたるもの、而して筆致と題目との出づるところは、圓山、四條の流にして、其傳統を泝れば、門を開けるもの未た應擧ならずんばあらず。渾成の妙はあり、獨得の技はあり、されど筆致と畫題と共に、ことさらに嶄新を以て稱すべきものにあらず。竹内氏の畫はまた抑揚照應等に注意すること、漢學者の文格を論ずるが如きものあり。山元氏は一部々々の美を描き分けて、彼我對

比せしめたるもの、剖析拔萃、未だ其儘の自然を攫んで絹上に拋出せる趣はあらず。要するに二氏共に近世傳來の流派に自己の創意を加へるものにして、其經營に於ておのづからまた古典的趣味の流露せるを見る。下村氏の纎麗なる筆は、鎌倉時代の繪卷の輕雋なると類を異にする所あり、其意匠に於てもまた慘たる工夫の存するを覺ゆと雖も、全體の趣致に至りては、宛として古繪卷の概あり。氏曩に「木間の秋」に於て光悅、宗達等の風格を換骨奪胎し、今また更に泝りて遠く跡を鎌倉の先哲に繼がんとす。美術院派第一の驍將、革新派の頭領はかくして古典的畫風に歸着せんとするか。

猿と兎といひ、雪松といひ、一は淡彩瀟洒、一は水墨金泥、共に筆墨の烹錬を見るべきもの、これをしも京都派の特技とのみいはず、肯て世界に誇るべき日本畫の特色を發揮せるものといふべし。大原御幸は尙古の風に於て維新前の冷泉爲恭に似たるところあり、即ち國粹保存の精神の表現なるなからんや。こゝに於て

か思ふ、今日の日本畫の所謂舊派は時代の潮流の外に出でんとして、大勢は漸くこれを顧みず、所謂新派こそ即ち守舊の精神を傳ふるものなることを。然らば眞の新派は何處にかある、西洋畫是なり。敢て問ふ、西洋畫はおのづから西洋畫なり、これをしも日本畫の新派といふべきか。然り。西洋より傳へたるよりいへば、則ち西洋畫なり、繪の具の同じきよりいへば、則ち西洋畫なり。然れども日本人の畫くに至りては、既に日本畫なり、日本人の思想を發表するに至りては、既に日本畫なり。但模倣の域を脫せざる域に於ては、未だ日本畫と成り了らざるのみ、鎔化陶冶、敵の銃砲を奪ひてわが有と爲せば、是れ元來の己が武器に同じ。繪の具の如きは萬國通有のもの、文學に於ける國語の墻壁と選を異にす、敢て區々としてその異同に拘泥する勿れ、況や傳統の内外を論らふが如き死兒の齡を數ふることをや。

斯くいへばとて、余輩は今のわが國の所謂日本畫と所謂西洋畫との技術を軒輊せんとするにはあらず、ま

たゞわが西洋畫の高慢氣に世界に誇るに足るべきものなりとも思はず、たゞ現代の思想を表はすに於て、自在の色彩を出すに於て、その新派と稱すべきを謂へるのみ。果して然らば、在來の日本畫の新派が試みしところは如何。玉成會派の多數が試みんとする、複雜なる人事は、わが國風に寫して、果して如何程成功すべきか。これは結果の上に於ては未知數なり、余輩が假に臆說を構ふとも、また沙上の樓閣に過ぎじ。安田氏の畫は闇中一點の燈明、聊か斯道に希望を齎らせるものか。「辻說法」の人體研究に志せるが如きは、また今年に見ること能はず。都路氏が昨年の「石淸水」は墨筆の行く跡を明かにして、淡々たる色彩に頗る淸爽の感ありしに、今年の「諸神歡呼」が、東京派の所爲を擬してか、背景をも十分に書きたるは、甚だ厭ふべし。今年の「勝乎敗乎」の武士は昨年の「時雨」の鹿に比べて、同じ木島氏の筆としも覺えず。こは必ずしも京都派が人物畫に失敗せるものとのみいふべからず、玉成會における今年の「加茂競馬」を見よ、また「繪踏」を見よ、何れも未だ余輩を首肯せしむる能はず。一兩年の結果をのみ見て、將來を判するは非なりといへども、一葉の落つるに天下の秋を知る、畫家諸君にして蹶起奮勵するなくんば、斯道の沈衰を如何。

余輩の見を以てすれば、日本畫の進歩の障碍となり、其人物畫の運命をして悲觀に傾かしむる所以のもの、二あり。一は約束なり。約束とは在來の法格なり、因襲の繩墨なり。何國の畫道にも傳習の法なきはなかるべく、又これなかるべからざる筈なりと雖も、特にわが國の畫は寫意を主とすれば、一見して頗る自然と異なるを覺ゆ。西洋畫の如く寫生より出でたるものは、やゝ運筆の法を學ばゞ、巧拙はさて措いて、とにかく自然を手本として畫き得べし、觀る者もまた自然を手本として評し得べし。然れども寫意になりたるものは、山水といひ人物といひ、共に自然と對比して頗る懸隔あり。この米點を山と寫し、その渦筆を川と知るは、畫家と鑑賞家との間の約束にして、或る練習を經て後得らるべきもの、この約束に熟達して、後始めて筆を

流派といひ、その束縛の甚だ嚴なるは、また以て寫意の結果頗る畫道の約束を重んじたるを證す。而してこの約束の重んぜらるゝは、從來の習慣の持續せらるゝ世ならざるべからず、流派の別を打破して、われ一と新奇を競ふ時に當り、歴史の桎梏の壞れて、襲日の趣味の青年社會に解せられざる時に當りて、古來の約束を保持するは甚だ難し。然るにこの約束なるものは、日本畫の特長の一なりき、今これを壞られんとす、日本畫の生命も從うて危からざるを得ず。約束を去りて日本畫を留めんとするは、皮を棄てゝ髓を殘さんとするもの、庖丁に妙技を待つて始めて成るべきのみ。

次に人物畫の發達を妨ぐるは品格の誤解なり。品格の尙ぶべきは、更めて文人畫家の言を待たざれども、筆を盡し色を盡したるを以て匠氣ありと評して、つとめて筆を省き色を殺すを上品とするは如何。古來和歌の道には一種の歌詞ともいふべきものあり、猪も臥猪の床といへば優しく、春といへば柳櫻、夏には花橘、秋は尾花、冬は時雨などゝ、優美にいひ出でざるべからざる樣に考へられたり。畫もまた同じ理法を以て制限せられ、人物といへば先聖偉人、もしくは公子佳姬、たとひ卑賤のものを畫いても、殊に眉目を秀麗にし、品位を高くせんとし、平生市井の事件を嫌つて、歴史的著名の事實を寫し、なべて時勢粧を俚俗なりと賤む弊あり。猶近松の淨瑠璃が纔かに世話物を餘興的作物として、主力を時代物に致せるが如し。焉んぞ知らん、今日に貴ぶところは、人情綢繆の趣を盡せる世話物にあらんとは。丹青は固より詩と差別なきを得ず、文學は時間の經過を寫して、善く個々の特性を描き、美は美、醜は醜と判別するを得れども、繪畫は刹那の感を寫すに過ぎざれば、勢ひ物の普遍性を描き、永く惡感を止むべき醜惡の事物は避けざるを得ず。さばれ從來の何物をも美はしくせんとする傾向は、餘りに極端に走せたり。土方の喧嘩、床屋の雜談、または今年の西洋畫に見るところの鐵工場、車夫の家族、いづれも好箇の題目にあらずや。淸正や秀吉のやうな人物ならで

は務むるを厭へるは、九代團十郎が活歴の弊なり。畫家覺らず、品格を誤解して、畫題を窮屈にし、筆路を單調ならしむ。抑もこの誤解は日本畫界に於ては未だ拔け難くして、爲におのづから日常人生の觀察を忽諸にす、一歩を西洋畫に後れ、數歩を文學の後へに逡巡する所以なり。

余輩は日本畫發達の障碍を說いて、終に明かにこれを進むる道に及ばず。暫く畫家が實驗の結果を待たんと欲す。要するに從來の日本畫は和歌の如し、これより出でゝ複雜なる思想を寫し、人物畫を成さんとするは、蓋し新體詩の類なり、然らば西洋畫は小說に比すべし。新體詩家は變じて小說家となり、繪の具皿よりもパレットの喜ばるゝこと、今日の趨勢なるが如しと雖も、その中一時的流行に過ぎざるものあらば、その分子はやがて消ゆべし。余輩は東京の日本畫家が奮鬪せるところに對して、同情の念を禁ずること能はず。混亂の巷に立てば、逡巡し、煩悶す、然れども英俊の士が手に睡して名を成すも、またこの時この場所ならずんばあらず。

平田篤胤論

山路愛山

今日は舊佐竹藩の方、其外秋田縣の方が、平田大人、佐藤信淵先生を記念する爲に、此處に御集會を催されまして、私にも何か演說をしろと云ふことでありましたから、平田大人に就て私の平生思つて居ることを申上げて見やうと云ふ御約束をしました。

平田大人は平田大角篤胤と言はれた方でありますが、平田大角篤胤といふ名は、是は秋田縣人として記憶すべきのみならず、又今の縣で言へば、岡山縣人としても記憶すべき方であります。一體平田大人の本姓は、平田とは言はれなかつたのでありまして、大和田淸兵衛といふ方の四男でございます、大和田正吉實名胤行と言はれた人であります。秋田縣人として記憶すべき名は、平田篤胤といふ名よりも、寧ろ大和田正吉

胤行といふ名であります。それで平田といふ姓は何處の姓であると云ふと、有名なる政治家で米澤の人に平田といふ内務大臣があるから、やはり彼方の者だらうと想像する方もありませうが、さうではない、此平田は備中國松山藩の武藝の師匠の平田藤兵衛平篤穩といふ人の家を嗣がれたに依て、平田大角篤胤と言はれたのであります。

それ故若し平田といふ姓を記念すべくんば、是は岡山縣人として記念しても一向不都合のないお名前であります。マア何方でも宜い。日本全國の記念すべき人物でありますから、お名前に關係はございませぬが、平田といふ姓は是は岡山縣人の姓であります。其處へ養子に行かれて、それで平田篤胤と言はれたのであります。さりながら昔を釋ねると、兩方ながら關東平氏の隨一であつた千葉氏から出た家でありますから、昔を尋ねれば孰れ日本の名家の後であります、日本人として皆記念すべき名前であります。

そこで今日に於ては國學とか古學とか云ふことを申しますと、誰でも皆本居平田と斯う言ふたものです。小學校の先生に行つて聽て見ても、本居平田と並べ稱する、中學校の先生に行つて聽いて見ても、本居平田と並べ稱する、國學とか古學とか言へば本居平田といふことになつて居つて、恰度日月を並べ懸けて乾坤を照すと言つたやうな工合に、平田と本居といふ二つの苗字は、國學古學では二つ並んで、他に權威を爭ふことの出來ない光のやうになつて居ります、併し專門家に問たらいろ〳〵議論があるだらうと思ふ。專門家に向つてどうだらう、本居平田と並べて見べきものかと言つたら、なか〳〵議論のあることであらうと思ひます。今日の專門家には並べてさゝ支ないと云議論が或はあるかも知れませぬが、平田大人が世にお出の時にはなか〳〵さう云ふやうな譯ではなくて、隨分大人に對して澤山の異論があつたものであります。其異論は國學者の中に隨分あつたのであります。其時分どう云ふ事を平田大人に對して言つた、所謂平田大人に對するオブゼクションといふものはどう云ふものであつた

かと云ふと、まづ第一に平田は山師であるといふ論が其時分にありました。何でもあの男は一體本居先生の弟子ではない、直の弟子ではないのに、夢中に本居大人に會つて弟子になつた抔といふやうな馬鹿な事を言つて居る、あれは山師である、山氣ある人物であると言つた人もあるのです。それから篤胤といふ山師は吉田殿を拵へて、吉田殿の學師になつたといふ事を書いた人もあります。それから唯山師といふばかりでなく、もう少し品の善いやゝ公平な批評家はあれは山師ではないけれども獨斷家で變な奇論を好む人であると言つて居ります。殿村安守といふ人の言うたのに、平田はけや〳〵しき奇説異論に落つる人である、どうも彼は國學の中の虎のやうな人である、恐しいえらい事を言ふ人である、隨分恐るべきものである、覇氣滿々たる人であると云つて居る。此樣に見て居た人がある、是が其時代の國學者の中で公平と謂はれた人の批評であります。又或人は平田といふ者は法螺吹だと斯う思つて居た。

たとへば平田先生が靈能眞柱といふ書物を書いた、是は服部中庸といふ人の三代考といふ書物に據つて書かれたのであります。文化九年平田先生が三十七の時に版になつたものでありますからもつと前に書かれたのでありませう。其の靈能眞柱、(今でも書肆に行けば賣つて居りますが)あの書物を書かれた時に石川雅望六樹園と云つた人、是は町人ですが、此人がそれを讀んで

うつ音に驚く人のおろかさよ
から鐵砲のたまの眞柱

といふ惡口の狂歌を詠んだことがあります。恰度福澤先生が明治の始に「法螺をふく澤うそをいふ吉」と言はれたやうな工合に、どうも其時代の人はなか〳〵先生に異論があつたやうに見えますです。それから又平田大人は弖爾乎波を知らないと云ふ論もありました。當時は弖爾乎波家といふ者が澤山あつて、假名遣ひのやかましい時代でありましたが平田大人は弖爾乎波を知らぬ者だといふ議論もありました。

それから又もう少し甚い奴は、平田はあれは字が拙いといふ論もありました。拙くても差支ないが、あれは非常な拙い奴であると云ふやうな攻撃もありました。それで其時代の國學者でも、本居大人と平田大人と、是が恰度日月を並べ懸けたやうな方であると云ふに就ては、殆と全體に異論があつたやうに思はれます。たつた一人其時分から平田先生を信仰して居つた人がある、それは誰であるかと申しますと服部中庸といふ人です。恰度此服部中庸といふ人と平田先生の交際のことを考へて見ると、マルチン、ルーテルとランクトンのやうな工合で、非常に意氣相投じて居たものと見えて、此人ばかりは深く平田大人に傾倒して居りました、此人は斯う言うて居る

大道の議論に及候處辨舌滝の流るゝ如く博覽廣才萬人に勝れ實に故大人の後此の如き人は未だ聞見に及ばず。

言つて居ります。篤胤大人に會つて道の議論をして見た所が、辨舌は瀧の流るゝが如き辨舌であつて、博覽廣才萬人に敵がない、私は御亡くなりになつた本居大人の以後には斯う云ふやうな偉い人は出ないと思ふと、此人のみ言うて居ります。斯樣な譯でたつた一人知己があつたのみで、其他の國學者は平田といふ者は山師だ、山師でなければあれは少し覇氣のある奴だ、虎のやうな奴だ法螺吹だと云ふやうな事を隨分言ふて居つたものであります。然るにさう云ふやうな專門家の議論を超絶して、今日に至るまで吾々が學校の先生に行つて聞けば、古學者は本居平田、歴史を讀めば日本の國學は本居平田と云ふが如き勢になつたのは何故でありませう。是には深い理由が無ければならぬと思ふ。其理由に就て私の思ふことを申上げて見たい。

第一の理由は、平田大人は其時分の專門家の陷るべき弊害に陷つて居らなかつたと云ふことであります。

私の考では――是は本當に一個人の考でありますから、御異論は無論ありませうが、私の考では、日本の國學の絶頂に達したのは本居大人まで、それから先は專門家の陷り易き拔葉の弊害に陷つた時代だと思ひま

すつまり本居大人までが國學古學全體に亘つて觀察を致した時代で、それから先は部分的研究にのみ陷つて、全體として國學の研究に就てはずつと衰へたと思ひます。恰度平田大人の盛んな時分、文化文政天保の初あたり、日本ではどうも學者が皆部分的研究に首を突込んだ時代であります。さうして此小さな發明を非常に手柄にして、其發明を人に取られでもすると、馬鹿に怒つて喧嘩をした時代であります。尾林元雄といふ人が海野幸典といふ人の天語通と云ふ書物の議論を剽窃をしたと云ふので、海野といふ國學者は非常な弖爾乎波家でありましたが大そう怒つて遂に絶交してしまつたといふ事があります。それから此時代に――高田早苗先生などの御親類ださうだが、(乃公の先祖を惡く言うては濟まぬといふ議論があるかも知れませぬ、決して惡く言ふてはない、專門に熱心な所を賞讃する積りで言ふのであります。)松廼屋與淸といふ先生があつた、是れが小說家の山東京傳と、俺の發明を貴樣が奪ふたとか奪はぬとか云ふ事で、或集會で大喧嘩をして、此松廼屋與淸が京傳を罵倒したので、京傳が憤りに堪へず、遂に此憤の爲に死んだといふ事が傳說に殘つて居ります。それから是は平田大人の親友と謂はれた方で、學問に於ては專門家として見れば日本に有數の學者であつた伴信友といふ人がありました。(小濱の藩士でありました)此人が平田大人の古史徵といふものを見ると、何時か俺が平田に話した、俺のまだ未定稿になつて居る考を、平田が默つて古史徵の中に盜んだと云つて、非常に怒つて絶交した。斯う云ふやうに小い發明を――當人は小いと思つて居ないのでせうが、小い發明を非常に重んじて、此發明を人に取らるれば十年の交も絶つてしまふと云ふやうな風儀が學者の間に行はれました時勢でありまして、銘々此專門の方へギユーと首を突込んで、此專門の爲にならば喧嘩でもしよう、絶交でもしようと云ふ風が此時代の特徵でありました。でありますから貴所方が其時代の書を讀んで御覧なさると能く分るが、何々考といふものが澤山ある、或は多摩川の考とか何とか細かい事の研究が

澤山出て居る、打棄つて置いたらさつま諸考ても何ても出來るかも知れぬ位、非常に專門の方に傾いて居りました。私は專門が惡いと云ふのではありませぬ、專門家が決して尊敬すべきものでないとは言ひませぬ。さりながら木を數へて林を見ずといふことがある、一本の木ばかり見て居て、林がどんな恰好だか更に知らぬと云ふやうな事があります。孔子泰山に登つて天下を小とすといふ事がある、どんな廣い處でも段々高い山に登つて見るとずつと地形の有樣がすつかり分つて、そこて物の方針も立ちます。所か自分の專門の事ばかり非常に首を突込んて、さうして一本の木をギユッと睨めて居ると、他の事は更に分らなくなつてしまつて、遂に心の權衡を失ふと云ふやうな事が始つて來ます。世の中に專門家も入用てありますが、併なから遠くの方に離れてさうして全體を見ると云ふ全體に就て觀察する人が矢張り入用てあります。此國學の事に就て、全體に就て觀察すると云ふことは本居大人の時て盡きて、其後は專門家の世の中になつた時に、平田大人のみは專門家の弊害に陷らずして、心を思想界の全體に配つて居られました。平田大人の議論といふものは人間思想全體に亘つて居ります。佛教を議論したのには出定笑語といふ書物があり、それから印度藏志といふ書物がある。儒教を議論したのには西籍概論といふ書物があります、(此書物はあまり良い書物でないけれども兎に角あります)。それから神道を論じたのには俗神道大意といふ書物がある。歌の事でも醫者の事でも、何でも先生の議論せざる所なく、風波を起さゞる所なしと云ふ風に、思想界の全體に亘つて居る。是は恰度多くの專門家が、部分を知つて全體を知らず、一木を見て林の形狀を知らぬ世の中に、高い處に立つてさうして大きな處から眼を付け大鉈を振つて大割したのてありますから、專門家の爲めに些細の問題に疲勞した天下是に於て始めて息をついたのてす。マア國學者といふ者はつまらぬ事ばかり研究して居るもので、面倒な事ばかり言つてる者だと思つたが、成程是は面白いといふことになつて天下始めてホツト息をつ

いたのであります。是が平田先生の人望を得た一の主なる理由であります。小刀細工といふことを能く申しますが學問にも實は小刀細工といふものはある、或はちつぽけな事を頻にやつて居つて立派に出來る。さりながら人生は短いもので、此思想界の廣さは大きいものです、そこで小刀細工ばかりやつて居る人のみであつたら、物の大體が分らなくなつてしまふ。故に大きな鉈でもつて、ドシ〳〵大切りに切つて行く人が入用てありまして、それが即ち平田大人の爲された一の仕事であります。恰度漢學の世界に於て、賴山陽の如き大鉈のやつが出て、あまり精細な學問の盛んな時分に大鉈で切つて廻つて、漢學者が息をついたと同じく、平田先生は大鉈でもつて大分人間に息をつかしたのであります。さうして本居先生の時代のやうに、全體の事を全體に考へると云ふ風に、世の中の人間の心を引返すと云ふことに就て大きな功のあつた方てあります。平田大人の心は自分で湧く、湧く泉の樣な獨創の點はない、けれども百千の大きな川を皆呑込んで、それを又ドーッと外へ出す所の、所謂百川を吐呑する所の氣慨があつた。是が其時分の思想界に非常な新鮮の空氣を與へた。ア、どうも國學といふものは面白いもの、古學といふものは實に愉快なものだと思はした一の原因であります。

もう一つの平田大人の偉い所といふべきは學問を専門家的の書齋のもの、専門家同志のものとしないで、之を世俗の學問にし、學者の棚から學問を人民の間に學問おろしたと云ふ事が平田大人の偉い所であります。平田大人は専門家同志の角突合ひ、天狗糶合ひ、互に小さな威張り合ひ乃公が偉い、乃公は斯う云ふ事を發明した、乃公は斯う云ふ事を研究したと云ふ小い角突合ひに就ては全く無關係でありまして。人からは絶交されたことはありますけれとも、大人から絶交したことはない。大人は決してさう云ふ小さな爭論に就て關係せん、學者同志の角突合に就ては殆と無關係であつたやうに見えます。而已ならず是は甚だ失禮な言ひ分でありますが若し専門家として見れば、平田大人はあ

まり長所は無かつたやうに思ひます。御門人の中には偉いといふ方かあるかも知れませぬ、それは我が佛尊しと云ふことてあつて、御自由に御信仰なさつて然るべきてありますが、吾輩の考に依ると此オリジナリチーといふことに就ては、大人はあまり他の人に誇るべき澤山の御技倆は有つてお出てた方のやうてないやうに思ひます。平田大人の最も骨を折られたのは古史成文、古史徴といふやうなのてありませうが、私も少し用があつて古史徴は讀みましたが、別段それが非常なオリジナルのある方の書いたものとは考へませぬ、やはり本居先生の古事記傳の方がズンと勝れたオリジナリテーを有つた書物てあると云ふことは、誰が見ても言ふ迄もない事と思ふ。さりながらオリジナリテーといふことは大人の天職てはなかつた、大人は決して自分て考へると云ふ事に於て特長は有つてお出てなかつた。大人の出定笑語といふ書物は釋迦の傳を書いてそれから佛敎を批評した書物てなか〱面白い書物てありますが、大人は自ら云ふて居る、是は俺が考へたものてはない、是は出定後語といふ書物が昔ある、それから赤裸々といふ書物がある、さう云ふ書物を本にして俺は書いたのだと云はれて居る。靈能眞柱は前の服部の書物を取られた。大概大人の議論といふものは御自分て考へたよりは、多くの良い思想の中から善いものを拔いて、世の中に紹介するといふ分に止つて居られたやうに思はれます。恰度學者が專門的に研究して得た其結果を大體取纏めて全體に組織して、國民の理解する言葉でもつて、國民全體に此學問を擴められた方てあつて、謂はゞ學問の世界の大きな仲買人てあると云つて宜しい。總ての學者が研究した其研究の結果を皆一つの處に集めて立つた、唯だ一個の大きな學問の仲買人てあると云つて宜からうと思はれます。大人まての古學國學は學者同志の研究、書齋の研究てありましたのを大人は其の學問を人民に分るやうな語て一般に紹介して、成程古學といふものは有難いもの成程國學といふものは面白いものだと云ふことを知らせた方てありまして、是れが大人の働きてあります、是は全く

他の人の殆ど及ばない所でありました。是は私の一家言てはない、平田大人と同時に生れて、始終平田大人の賞讃者であつた、前に申しました服部中庸といふ人も此事を言つて居ります。服部中庸といふ人の言ふに「學者は物を能く覺え候ばかりにては何の役に相立ち不申候、其學を天下に弘め不申候はて實に水中――(是は甚だ可笑い語だが）水中の屁こき學者と可申候」と書いてあります。水の中で何かするやうなもので、唯一人で合點して誰も知らない、さう云ふやうな學者ではつまらない、學者も其學問を以て天下に弘めるやうでなければ大きなものではないと服部が言うて居りますが、此平田先生は總ての國學者の研究した其結果を人民の分るやうな語で此世界の總てに弘めたと云ふことに於て、殆ど非凡の卓越の功を有つて居られます。是がやはり平田大人の人望を得た所であります。マア仲買人といふと甚だ失禮の語でありますが仲買人が必用であります。皆物を造つて藏つて置く先生ばかりでは仕方がない、そこで皆それを按排して、よく國民の理解するやうにして此世の中に弘めたと云ふことは、唯平田大人が獨り爲された仕事と謂つて宜しい。是で皆が國學といふものは面白い今迄國學といふもの丶有難いことを知らなかつたが、始めて平田大人に依つて知ることが出來たと云ふやうになつて、天下悉く平田大人の風を仰いでそれに集るやうになつたのであります。是は致方のないことであります、平田大人に人望の歸したのは已を得ないことであります。

そこで學者の方から種々の異論があり、伴信友は絶交してしまつた、或は彼は法螺吹だ、彼は噓つきだ、彼は泥棒だと、いろ／＼な事を言ふが、人民――學者と關係のない階級、即ち吾々如き階級は、ア、あれで以て助かつた、あれでもつて國學が分つた、あれでもつて本居大人の苦學も分つた、あれて眞淵大人の働きも分つた、あれて契仲阿闍利以來の國學者の苦心の有樣も漸う合點が出來たと云つて、皆平田大人を代表者にして、大店にして、其處へ行つて皆國學を買ふやうになつたから、平田大人の名は殆ど天下の視聽を集め

るやうになつたのであります、是は致方のない事であります、そこでいろ／＼專門家は惡く言つたが、又攻擊したが、とう／＼平田大人は生きてござる間に、殆ど日本の人心に就ては一の王國を建いた勢になつたと言つても宜しいと思ふ。何故なれば其證據を一つ擧げますと、一體平田大人は吉田官と云つて昔は京都の公卿さんの吉田の處へ方々の神主が行つて官位を貰つて來る、例の正一位稻荷大明神の正一位のやうなものは吉田が呉れる。それでマア吉田といふ家は神主の總本家のやうなもので、又白河家などゝ云ふものもあつたけれども、吉田の方が俗に流行つた、所が此吉田といふ者の勢力範圍は關東か關西か、東か西かと云ふと東の方が多い。東の方には實に吉田の支配を受ける神主が澤山あるのです。所が平田先生は、其吉田を罵つて、あれば托鉢坊主同然の俗神道だと惡く言つた。吉田家を木葉微盡に攻擊されたのてあります。所でどうなつたかと云ふと、吉田の方では初は憎い奴だと思つたてせう、けれども段々平田先生の勢力が盛んてあつたから是は平田と喧嘩したら關東の己の勢力範圍が減ずると思つたから、向ふが利口で喧嘩をしない、喧嘩を止めて、後に又吉田の息子が大人の門人になつてしまつた。此一事といふものは、平田大人が御存生中に關東の神主總體にどれ程の勢力があつたかと云ふことを證明するものであります。即ち先生は專門家の反對に拘らず、いろ／＼な議論があつたに拘らず專門家以外に於ては御存生中にもう殆と一の精神的王國を建てられたと云つても宜しいです。斯う云ふやうな事。其他まだ澤山ありませうが、斯う云ふやうな事が先生をして一代に名を成さしめ、今日まで本居平田と呼ばしめた主な原因てなくとも少くとも一の原因てあらうと思ひますから、此事だけ申上げて、是で私は御免を蒙ります。

儒教の復興を論ず

法學博士　浮田和民

近來儒教復興の議頻に起る、その要を聞へば物質的

文明の進歩に伴ひ、德教のそれは却つて逆比を爲し、風紀次第に弛廢して人々皆人格の重んずべきを忘れんとするが如き態あり、儒教を復興せしめて之を救はざるべからずと、丁酉倫理會に於ける横井時雄氏を始め、其他諸家の說ありと雖も、歸するところ略ぼ右に存するが如し、予は此大體の意見に對して固より贊意を表するを憚らず、されど右の方法に就いては亦聊か說あり、以下少しく之を述べんか。

予は眞面目に儒教の復興を直に必要とするものにあらず、されど今の道德はと顧れば習慣の外、十分なる基礎なきにあらずや、傳說の外、鞏固なる根本なきにあらずや、敎育勅語は人民が國家に對する觀念を强固にするには十分なれど凡ての人事に當りて直に理想的人格をかゝげ德行の儀表となしたる者にあらず。明かに言へば國家の命令を以て善惡の標準、道德の基本とはなし難し。吾人が德行を磨かん爲め憧憬の對象としては、政治的關係以外に儀表たり得る圓滿の人格を要するなり、而して釋迦や基督や將た孔子や、正に之に當るべき人物として崇敬の價あるものにあらずや。

既に然り、予は必ずしも孔子のみを以て模範的人物とはなさず、而して又儒教のみを以て必ずしも重んずべしとはなさず、今獨り儒教といふものは唯これ方便のみ、其眞意よりして言へば、基督教、佛教、儒教の三者其一を缺くも不可なり、三教名の各々異なるが如く、或る點に於ては互に一致せざるところ存すといへ、その堂奧を極むれば必ずしも爾く背馳するものにはあらず、予は倫理の背後には宗教あらざるを得ず、信仰の大磐石あらざるを得ず、即ち倫理的宗教なるものなかるべからずとは平昔の持論とするところなり。唯だ儒教は餘りに治國平天下を目的として政治に偏する所あり。三教その根本に於ては一なり、異なる所は其の理論若くは修養の方法若くは其他の形式に外ならず。是等は人各々好む所あり、其趣く處に任せて之を攝取するの門戸は自ら亦存在すべき理由あり、三教は斯くして實に並存の必要ありと信ずるなり、されば今儒教を

云々するもの、若し單に儒敎そのものゝ復興を目的とするならば余は其の希望の水泡に終らんことを豫言するを憚らざるなり。然れども儒敎の精神を以て國家及び社會敎育の一端に供するは甚だ時宜に適へりと思ふ者なり。

先づ其一としては儒敎を倫理敎育の基礎として現在に應用する事之なり、即ち今日の普通敎育、中等敎育、更に進んでは高等學校邊にも、單に敎育勅語のみならず、儒敎に根蔕する倫理を其上に說かんことを望むものなり、敎育勅語の中には人倫の道具はれりと雖其其精神は忠君愛國の敎にあり。唯國家の一民として國家を擁護し行くとならば、即ち單に國家に對する愛國心を養はんとならば敎育勅語のみを以ても優に足れりとすべし、されど廣く一箇の人間として世に處せんと計らんには、敎育勅語の敎うる以外に猶ほ要する所無しとせず、即ち倫理の淵源を單に忠孝のみに發見せんとするも今日の時勢に適せざるのみならず、人道の基礎薄弱なるを免かれざればなり。此點を補はんが爲には、更に孔子の人格を基礎として德行を敎うるの必要ありと信ずるなり、蓋し孔子の人格は天に對する敬畏、人に對する博愛を以て其の要素となしたり。彼れは天地の心を仁と意識したり。而して此敎を普及せしめん方法は、帝國諸大學若くは高等師範といふが如き、他日世に出てゝ人の師傅たらんものを養成するところに於て、啻に學問としてのみならず、別に實踐躬行の道德敎として研究修養せんことを要す、即ち研究するのみにては足らず、一面に研究すると同時に他面に於て之を心に得身に體し行くの人を作るを要す、約言すれば兎に角昨今武士道などと稱し居れど、その武士道以上の倫理敎、武士道以上の一種の德敎を迎ふる必要今日に存するが故に、儒敎再興說の大體の傾向には賛同を惜まざるもの、而してさる人物の養成には先づ右の如きの術策に據らんと欲するものなり。

方法の他の一としては實際上の機關を要する事之なり。

前述の如く儒敎を敎育に應用するは甚だ可なり、而

して官私立大學、高等師範等に儒學者を養成すること、これ亦可なり、されど只養成するのみにて更に養成せられたるもの丶立脚地を作らずんば事實に於て奏効あるべからず、予は此見よりして全國の教育制度に十分儒學者を用ふるの位置を設くべしとなす、即ち倫理教師となるには單に倫理學教育學の修得のみにて足れりとすべからず、別に儒教の素養あるを要し、斯る人物をして專ら其職に任ぜしむる事となすこと、先づその一着手たるべし。而して次には唯學校教育に止めず、更に社會教育の方面にも十分活動せしむるを可なりとす、即ち耶蘇教的に、普く全國に於て日曜若くは大祭日等、一般の休日を利用して村民を集め、通俗に且つ實際問題に接觸せしめて儒教の眞理を說かしむるなり、換言すれば專ら儒教を基礎として布教方法のみ耶蘇教的若しくは佛教的に爲さしむるの制度を要す、此方面の効果を擧げんには、所在の各學校に於て、修身倫理の教師に必ず儒學者を採用すべきことと必具の條件たり、勿論その說くところの儒教なるものは、決して在來の思想にて盛れる古き儒教なるを得べからざれば、十分新學問の素養あり、其餘力にて遺憾なく儒教の根本眞理を活說活用し得る技倆を有する人物を得ざるべからず。

尙ほ考ふるに將來分業の必要上單に社會教育のみに專心從事するものを養成して可なり。即ち各種の製造場なり工場なり、日々休息の時間を窺つて行き、勞働者若くは一般百姓等を集めて、爲に現實に適する齊家修身の法を說くこと、これ又多大の貢献なからずとせざればなり。

唯之を儒教のみに限る可らず、儒教そのものには幾多の缺點あり、而かも今日に於てその教理は既に展發の極度に達し居り、それ以上に餘地を有せず、故に之のみを單に復活せしめんと勉むるが如きは斷じて不可なり、只儒教的精神を以て佛教若くは耶蘇教を學び、斯くて社會の精神に投合する樣なさざるべからず、儒教その者の未來を慮る上よりも、實際此の如くならざれば、保存も復活も到底全うし能はざるところなるべし。

儒教に缺けたる所が耶蘇教に備はれるあり、耶蘇教に缺けたる所が儒教に備はれるあり、之を佛教に就いていふも亦然り、彼此互に照覈して各々その長を採り短を補はざるべからず、儒教に缺くるところにして耶蘇教に備はるものとは何ぞや、個人の人格を重んずるの點之なり、耶蘇教に欠くるところにして儒教に備はるものとは何ぞや、國家的倫理即ち之なり、唯だ儒教は治國平天下の說專なり、故に政治的なり、從つてその教うるところ自ら公共團體の上に存し、博愛と呼び仁と唱ふるも、單に壹個人の人格を尊重して、それに對して非常の同情を社會的に發揮するに至つては、基督教に一籌を輸せざる可からず、此點即ち特に儒者の學ばざるべからざる所なり、即ち儒教の精神を以てバイブルを誦讀せざる可からざる所以こゝに在り。單に譬喩の材料としても將た教育の材料としても、バイブルの方その量に於て大に富めるものなりとす。

只バイブルの說き方には一の缺點あり、バイブルの成れる時代には猶太の思想の自然に奇蹟を重んずるところあり、從つてミラクルはバイブルの隨處に散在するなり、猶ほ他の一の缺點を數ふれば、基督の弟子に一貫せる未來の思想なるものあり、此の如き思想は佛教も大乘に於て明かに一の方便說となすものなるに、基督教に於ては獨り之を實在なりとして信ずるが、こは今日の學術に照して元より否定せらるべきもの、此の如きは敢て拋却して可なり、唯だ倫理的進步の爲めに人は常に現在に滿足するを許さず、必ず將來に進化するを要し、現世にて能はざることは理想として死後永遠を期せざるべからざるのみ。

基督教といふも既に今日に於ては發展の極度に達し、此れ以上に進步すべき餘地を存せず、此事獨り我國に於て言ふべきのみならず、廣く西洋一般の事情よりして見るも亦明かにその然るを信ず、然らば佛教は如何と顧んか、是れ將た同一狀態に屬するものたるを疑はず、此の如くなれば、三教の未來や遂に互に抱合進化せずして能く何をか成すべき、否成し得ざるのみならず、その存立せんことも亦危かるべし、事情此の

如し、此くして三教和合脱體の結果玆に新佛教なるものの成らんか、新佛教の成るは即新基督教の成るなり、新基督教の成るは即新儒教の成るなり、而して新儒教の成るは即新佛教の成るなり、究極するところその外形的名稱は孰れに定まるも可なる事となるべく、而して此の如きに至りてこそ、始めて將來の倫理道德の根底とも成り得べけれ。予の所信は正に此の如し。

古典研究は人心に神秘なる作用を營むといふも、古典は讀んで古典のみ、古き典籍のみ、古き典籍直に人心に非常なる感化を及ぼすとも覺えざれど、既に釋迦なり基督なり孔子なりを追尊して其人格を欽慕し其教説を翫味すとせんか古聖の教説は自ら古典に依らざる可らず、故に古典即崇敬を値すべしとに非ざる乍らも歸する處は然らざる可らざる徑路を有す、古典は聖者の思想を盛る處の器として此處に多大の價値を有し、諸教の精神を發揮するの方便として必要視せられん、儒教復興と古典研究とは正に斯の如きの關係あらんのみ、されば古典の研究を以て直に過去の孔子教をのみ重んずるものとなさんか、そは誤れり、教育倫理、社會倫理は遠く將來を思はざるべからず、然るに儒教は此趨勢に伴はず、偏に頑として過去の孔子教のみに愛着せんか、決して發達を期すべからず、苟も發達を期せんか、自らその城壁を撤して進んで他の二教を抱合せざるべからず、今日のところ三教各々その孰れより進むも妨げず、佛教徒は佛教よりすべし、儒教徒は儒教よりすべし、而して基督教徒も亦基督教よりして別に東洋に新生命を營むべし、三教各々他の長を採るの宏量を有し特に近世科學の方法を採用して革新を圖らんか、究竟は期せずして同一地點に到着すべく、決して永く相背くべきものにあらざるなり。

政治的に坤圓球上の人類相合して一となることは、諸多の事情の伏在ありて仲々に望まるべき事にあらず、左れどそれを外にして或は學術の一致、或は藝術の一致、或は道德的理想の一致等には終に達するの日あるべく、斯くして人類世界の完全發達を見る事あるべしとは予の信ずるところなり、之を今日豫想するこ

となく、或は儒教は基督教に優さる、佛教に優るとの考より、漫然復興を唱ふるが如くんば斷然反對せざるを得ず、佛教は可なり、佛教と調和するは可なり、去れど儒佛兩教は夙緣已に淺からず、支那より我國に入りて頗る能く抱合し居れば、今日の處その最も學ぶべきの點は主として基督教に在り、即ち基督教との抱合が刻下儒教及び佛教復活の爲に最要最急の務たるなり、而して基督教に於ては儒教及び佛教と抱合せんこと其の進化發展の大動機なるべし。

既に人格を尊ぶべしといへるが、人格は理想なり、信仰なり、希望なり、故に倫理の卑賤なるものは兎もあれ、苟もその幽奥の處に進まんか、地盤には常に宗教の力なかるべからず、即ち宗教的信仰の上に築かれざる倫理は立つべからずとは、是れ亦予が宿見なりとす、儒教は力を現實に籠めて說く、基督佛の二教はその根底に入つて說く、說くところ岐を異にすとはいへ、堂奧に迫り入らんか、佛教の所謂慈悲の目的物は何ぞ、基督教の愛の目的物は何ぞ、而して儒教の仁の目的物は何ぞ、等く人間にあらずや、否人間の中に潜在する或る一物のそれならずや、人間の中には實に非常の神秘なる、尊きものの含まるゝなり、儒教にては天をいひ、佛教にては如來をいひ、基督教にては神をいふ、如上の天や如來や、將た神や至竟上述の神秘なる尊ぶべき一物を措いて何ぞ、而して是れ即人格なるものにあらずして何ぞ。

此人格の最も圓滿に完成せられしものを即ち釋迦となす、基督となす、孔子となす、勿論歷史的に現はれたる釋迦基督孔子には頗る不十分なるところ議すべきところも存すべけれど、幾世幾代長き年月の間に理想化せられたる釋迦や基督や孔子や、實に圓滿完全なる、優に吾人の模範とし儀表とし信仰を繫ぐべき一大人格たるを失はず。

三教の調和云々といひたれど、實は徹底して曰はんか、孔子や釋迦や基督や、各々時を異にし處を隔つるものありとはいへ、認むる眞理の一なること恰も天文學に於ける從來見えぬ一星體を圖らずも大陸の學者と

英國の學者とにて等しく發見せしが如き關係あり、眞・理は元と一なり、眞理に調和なるものの要なし、只それを認めてもその修養の方法に至つては萬端ならざる能はず、相互の差異あるは此點なれば調和も亦此點に於て初めて意味あれど、目指す所は眞理のみ、既に互の奉ずる眞理にして究竟一なるを承認するに至らんか、後者の如きは末節のみ、調和必ずしも必要ならず、若し眞理の互に一なるを認むるを以て、假に調和といはんか調和決して難からざるなり、既に儒敎は支那に於て將た日本に於て佛敎と抱合せり、而して佛敎も亦支那に入り日本に入りて自ら儒敎的感化あり儒敎と佛敎とは斯の如くして多くの共通點を有せり、而して佛敎と基督敎とは如何と見るに等しく亞細亞の西部に胚胎したるものとて自ら免れざる共通の點を有す、然らば更に基督敎と儒敎とは如何と顧るに、そは支那日本に於ける儒敎との直接の關涉は考へらるべき因緣を有せすとはいへ、實質に於てミルやスペンサーや、將たハックスレーやの唱ふる倫理的理想は如何、そは全然基督敎たれども而かも彼等は自らクリスチアンを以て居らず、敢て儼然として科學者なりとなす、而して自ら科學者なりと任じて說くところのその思想內容は一面又直に儒敎的たるなり、即ち稱してモダーンカルチユアと呼ばれつゝあるものは究竟儒敎的基督敎たるを失はざるなり。既に然らば此形勢に徵して三敎の調和は望まるべゝして又成さゞる可からざるの事なりとなす、予は此見地を去ることなく、其上に儒敎の復興を說いてこそ、始めて意義あり價値あるの事なりと信ずるなれ。(文責在記者、校閱濟)



現在に於ける海外一切の狀勢殊に我國と緊密の關係ある滿米露等の消息をば最近の新聞雜誌等により若くは彼地の國情に精通する人士の寄稿によりて報導し敢て江湖の參考に供せんと欲す

信仰の色分け

文學博士 姉崎正治

概して言へば佛伊兩國民の宗敎上の信仰は、劃然二つの反對の色別けとなる、一つは盲信で、一つは無信仰である、が英國は餘程それとは違つて居つて、一方には極めて保守的の信仰があるかと思へば、一方にはニヒリスト的のものもある、而かもその中間には色々の段階に立つ信仰があつて、前者の如くに劃然たる色別けは出來ぬ。

佛、伊の信者といへば只一向に敎會の傳習通りに確信して居つて少しも疑はず、それが思想に影響し、支配するでもなければ、又割合に道德の方にも關係が不足である、日常の道德は日常の道德、宗敎は宗敎といつた風である、然らば宗敎は如何程の事をするかといふに他にはない、只寺の儀式である、儀式といへばとて、それも重に懺悔に過ぎぬ、懺悔も一のサクラメントであるからにはそれによつて安心を得られる、宗敎に於ける一の勢力たるには相違ないが、彼等は唯之さへやれば萬事が濟むといふ樣な考で居る、此他に祈禱もある、祈禱にも亦色々あるのだが、之も深き意味の籠るものではなく、無病息災病氣の平癒等から始めて色々樣々のものを何でもかでも持つて行くのである、即ち彼等は傳習の儘を信じて傳習の儘の型を行ひ、懺悔や祈禱に一向ら縋るといふのであるから全然盲從である、そして此盲信の徒がその多數を占めて居るのだ、が無信仰者の側はと見るとニヒリストといふが如き極端なものも居る、社會主義者は皆敎會に反對である、敎會即宗敎といふ事情であるから社會主義者はやがて即宗敎に反對といふ事になる、彼の徒は敎會を棄てゝ極端の現世主義を奉じ、極端の自由平等を尊んで居る、その最も積極的なるものは終に即ちニヒリスト

となつて居る、佛國ではアニテイミリタリスト、ヒユーマンテリアンなるものがあるが、それ等は皆それである、彼の徒は現在の共和政府の組織そのものに迄反對して居る、彼の徒の考では、共和政府といふとも矢張り少數黨の專制である、王政を呪ふの精神は同じく少數黨の專政なる共和政府をも呪ふて居る、現在社會の組織そのものが氣に食はぬといふ點から施いて現在の宗教現在の道德の凡てにまで反對して居るのである、此の如くにして到達すべき點は即ち革命である、彼の徒の主義は即ち革命主義なのである。

一方には盲信一方には無信仰、此の如き兩極端の間に何等その間の階級を形くるものがない、唯此二箇の對象が將來如何に拮頏し行き消長し行き、兩國の運命を如何に動搖すべきかは今後の問題として注意すべきことである。

此の矛盾せる兩思想は明瞭に制度の上にも現れて居る、即ち昨年の一月の事である、佛國に於て分離法案なるものが成立し實施されて、政教の分離を公然と規定してしまつた、從來國家が宗教を保護して來たのだが、今では何等の關係なく、教會は全然國家の手から獨立して自由の行動を取るのである、之に關して國家は知らぬ顏で居るのである、之は即社會の狀態が直に制度の上に現れて居るものである。伊太利にも之に類した狀態があるが、長きに涉るから略して置く。

今後の問題であるべき此兩思想の消長は果して如何であらうか、私見によれば之は多少調和の出來る事と思ふ、それは宗教側にも革新派なるものがあるし、改革派側にも極端說に反對し、アンテイミリタリストを抑えやうとするものもある、兩派の側に既に此の如き態度のものゝ存する以上は、將來四圍の狀勢の必要に迫られて調和することゝ想ふ。

之に反して英國になると甚だ複雜になつて居つて一寸區分し難い有樣である、先づ極めて簡單にいふならば大陸とは違つてカソリック教が新興の勢力がある、それが又盲信ではないのだ、けれども教會には服從して居つて現在のサイエンスなどは顧みない、サイエンスなどは如何でも宜い、つまり世界が如何樣に變つたところで構つたことはない、カソリック教徒はカソリック教の教に從つて行止して宜しとして居るのである、極端の保守派であるが之が段々と勢力を得つゝある、その信者の中には中々の有力者もある。

英國の國教はプロテスタントだと或る人は言ふけれ

ど、左樣ではない依然カソリックである、即ちアングリカンは我國の淨土眞宗の樣なものでカソリックの精神を以て敎會を組織し、その敎義信仰個條儀式等を何處までも保守して行くのである。

然るに英國にはその國敎のハイチャーチの外に更にローチャーチ、ブロードチャーチなるものがある。之になると神學の立脚地からしてキリストのデビニチーを疑ひなどもする。此ハイ、ブロード兩チャーチの外に又メソヂストチャーチがある、之れは自敎のデミプリン(規律)をのみ重んずるので排他的の處がある、更にアーピング派バプテストの如きものもある、それから組合敎會なるものになると餘程自由の方向を取つて居るので、全體ではないが中には我國の海老名氏以上に在來の基督敎とは懸け離れた信仰を持つて居るものがある、又新神學と稱する一派があつて、コングリゲーションのボデーに屬して居るけれども更に自由の解釋を取つて居る。次にはクリスチャンサイインスといふものが之は我國の天理敎に似た樣なものである。

それから以上の數派とは違つたポジチビストなるものがあり、フレデリックハリソン等がその代表者である、更に佛の方面ではソシアリストもある、が之は佛國程の過激なものではないけれど、宗敎を敵視するものがある、純ニヒリストといふが如きものは英國には無い樣だ、然かも無宗敎主義者、即ち宗敎がなくとも信仰が無くとも、唯社會の制規さへ儼存すれば宜いといふものがある。

此の如く英國には極端なる頑固な信徒から極端なる無信仰者、ニヒリストに近きもの迄ある、英國の信仰狀態は實に多種類で複雜で、一見すれば渾沌の狀態とも言へる、此狀態は將來如何樣に推移すべきか、米國も英國と似て居るが、此幾種類のものが將來更に小分裂をなすであらうか、それとも統一が出來るであらうか、或はリベラルなものはリベラルなもの丈で一致するであらうか、前にグラッドストンは國敎とロシヤの國敎との結合を圖つたこともある、成効は兎もあれ、兎に角之から大同團結なるものが試みられることとも思ふ。

伊は佛に類し米は英に類する、が此佛伊と、英米との相異なる信仰狀態は、兩者その孰れを取るべきであらうか、私の考には英國の方が活氣があつて面白い、活氣ある所には思想の自由がある、斯くして君子の爭ひも起る、佛の如くに餘りに懸け離れた極端と極端だ

けては交渉が六かしく、齟齬が多くて軋轢が過激になる。此の如きは各々其歴史が伴ひ國民の事情の異なるところからして已むを得ぬ事てはあるけれど、私には英國の方が宜いと思はれる。が我日本はどちらかといへば佛國の方に似て居る、從つてその點で不幸の狀態に進みつゝあるかと思ふ。

昨年以來米國を經て歐州大陸の視察を終へ十月中旬歸朝されたる博士を訪問して其視察談の一部を筆記し校閲を得たるものなり

海外消息

如楓庵

●摩國問題と獨佛の衝突　前號に於て摩國潜王ムライ、ハフイツド王位承認の件に付き佛西兩國が列國に通牒を發して之を認むる事となりたる由記載致し置き候へしが、是より先き獨逸は他に率先して潜王を正王と認承し他の列國が悉く其使臣を退去せしめたる儘なるにも拘はらず獨はフェッ駐剳の獨逸領事をして再び領事の職務に就かしむる等頗る關係列國を出抜きたるが如き觀あるより、玆に佛西獨の間に容易ならざる物議を起したる譯にて候。

▲獨逸側の聲言する處に依れば潜王の王位承認は摩國秩序回復の最急務にして、一刻も猶豫すべきにあらずと言ふ、されど獨逸獨り他に先じ之れを認むるの必要何處にありやとは他列國の唱ふる處にして殊に最も重大なる關係を有する佛西兩國が之を見て快からざるべきは理の當然に有之候是が爲に一度鎭靜しかゝりたる摩國の形勢は再び危殆ならんとし、巴理及び伯林の株式市場は特に大に動搖せんとするに至り候

▲佛國側の「ル、タン」は之を見て獨逸は歐州の平和を攪亂せんとする者なりと云ひ、關係列國と何等の商議をもなさず、單獨にて無條件王位承認を宣言するが如きは獨逸を孤立せしむる者なり、又佛國は如何に他の列國と意見を異にするも決して其威信を枉ぐるものにあらずと申し候が、獨逸の此擧に出でたるには大に底意なかるべからずとて「スペクテーター」の一投書家は獨逸の專横を極力批難致し候

▲されど佛西兩國は略ぼ相一致したる點に於て王位承認條件なる者を成し、之を列國に通牒し、列國の同意を求められ候、其内容なりと云ふを聞くに、(一)アルゼシラス協約其他前王が行ひたる約束を承認し(二)カサブランカ償金を始め私人に對する摩洛哥政府の負債につき責任を負ひ(三)神聖戰爭を非認し(四)港灣附近及貿易通路の安全を謀らしめんしめんことを提議し、同時に兩國は軍費の賠償被害自國民に附する償金支拂を要求する權利を保留することを附記し、又新王が適當なる禮讓を以て前王アブダル、アジズを待遇せん事を希望したる者にて候が、獨逸は之に對する不同意の回答をなすに先だち、フェッに於ける獨逸領事をして、直にムライ、ハフェッド王を訪問せしめ、公式に即位を承認し、新政を歡迎

すべき旨を奏上せしめたる由に候。

▲佛　承認案に對しては英國は既に之に同意し、獨逸大體に於て之に同意すべき筈に候故摩洛哥問題は之にて一先つ一段落を告げたる事に候も、佛西　間の感情の衝突は直に雲散霧消し得べきにあらず、早晚該問題に於て　、若しくは他の外交問題に於て、打つて出づべき模樣あり、獨逸の斯の如き行動は必ずや將來其國運に關し大打擊たるべき時期の到來を攪知する迄は止まざるべしとて、某老政治家は慨歎致し居り候。

●獨逸陸軍大演習と「アルサス、ロレイーン」洲　曩に英國は北海に其海軍の精銳を集め、一大擬戰を擧行せしが、獨逸は之に對する示威動運の所存にてか、其國境に於て約百万を動かすべき大演習を行ひ、去る十日頃(九月)之を終了致し候、場所が一千八百〇七年に於ける普佛戰爭の古戰場なるだけに、然かも獨逸自ら國境に出てゝ之を指揮し之を講評すべき筈になり居り候事とて、時節柄大に列國の注目を惹き申し候。

▲アルサス、ロレーンの古戰場に於ける演習は遂に侵入軍の敗退に終り獨帝は玆に豫定の如く最も厳重なる講評を爲し、將軍以下各參謀將校等を敬服せしめたるが、帝は其れより佛獨國境のシュルフト山路に臨幸あり、佛國官憲は帝に向て、國境を超え、風景絶佳なる「ホヘネク」の邑に來らんことを希望したるも、帝は厚く謝して之を辭し、自働車にて舊佛國領地たるアルサス州を通過致し候。新獨逸臣民たるアルサス州民は到る處に於て熱心なる歡迎の意を表し、途上に花を撒き、鈴鐘を鳴らして陛下の万歳を祝したる由に候が、帝は「コルマル」市に到り、此處に平和演說をなされ、「アルサス」州民の熱心なる觀迎を嘉みし「同州は幾多の變遷を經過したるも、今や獨逸の國旗の下に保護せられて、何等の紛議をも引き起さず、自ら發達するを得べき運命となるを得たりと申し候

●ウエッテ伯の入閣說　露國政界の暗潮は縱橫に流れて分時も靜止する處あらず、如何なる達觀の士と雖も、寸前暗黑、事件の成行を明示する事を得ざるべき有樣に候が、突如としてウエッテ伯の入閣說は列國政治家の眉をひそめしめ申し候

▲半官報「ブールス、ガセット」は報じて曰く「從來反動派は外相の行動餘り立憲的なるに慊らず、之を倒さんとして運動しつゝあり、昨今外相が土耳古波斯の政變に同情せるを言ひ立てゝ、頻りに之を攻擊し外相の地位爲に危し、後任者として呼聲高きはウエッテ伯なるが、政府は反對なし」と、之れ半官報の言なりと雖も、必ずしも政府の意見を代表致し居る者にては無之、過日來伯は密かに反動派に同情を寄せつゝある形跡あるのみならず、露國の重鎭たるノーヴォエヴレミア紙の主筆メンセイコフ氏が頻に伯の歡心を買ひつゝありとの事なるを以て、單に一時の風說に止まらざるべく、近き將來に於て露國政府の財政問題に關し一大變動あらんとは某消息通の語る處に候が、之れ外相としての入閣說なるも、實は彼をして財政政理の任に當らしめんとする一部政治家の躍起運動に出てたる旨なる由に候

●米國政界大混亂　黃色新聞王ハースト氏、曩に重大の事件を暴

つて西米戦争を引起さしめたる黄色新聞王ハースト氏は、茲に又例の毒筆を揮つて全米國を動顚致さしめ候。民主共和の兩黨が死力を盡して鹿を中原に爭ひつゝある眞最中彼は何思ひけん突如としてス「スタンダード」石油會社理事アーチバルト氏より上院議員フォレカー氏ペレー氏下院議員シブレー氏オクラホマ州知事ハスケル等に送りたる書簡を得たりと稱し、上記諸君名士か公職にあるにも拘らず、トラストと金錢上の關係を有することを表明せる書簡を其配下の新聞紙上に發表し、兩黨の名士十有余名の名譽に大打撃を與へ候

▲然るにフォレカー氏の之に對する辨駁頗る薄弱なるため、本問題の火の手は隆々として燃え上り全米國を燒き盡さんとする迄に到り候。大統領ローゼヴエルト氏は石油會社とフォレカー氏との秘密關係を是認し、フォレカー氏を現政府の敵なりと極力其政論の反覆常なきを痛罵し、共和黨中タフト氏の當選を好まざる者は皆石油會社と關係ある者なりと斷言せる意見書を發表致し候

▲されど右意見書中に引用せるタフト氏の書簡に即ちフォレカー氏と妥協する位ならば、大統領候補たらざるに如かずと云へる氏の書簡は、其後タフト氏がフォレカー氏と和睦せし事實ありしため、大に其効力を減ぜられたる傾向あり、旁々益々事態容易ならざる有樣と相成申し候

▲フォレカー氏攻撃に成功したるハースト氏は更に其鋭鋒を民主黨の會計委員長たるハスケール氏に向けたりしが、ロ氏は又之を是認したるため、茲にブライアン對ローゼヴエルト氏と一大論戰を惹起し米國の政界は益々面白く相成候。ローゼヴエルト氏が自黨のフォレカー氏は有耶無耶の中に葬り去り、敵黨のハスケル氏を腐敗問題の中心となしたる老獪手段に出でたる結果なりとの事なるが、ブライアン氏は烈火の如く怒りて一方に於てはハスケル氏を辭任せしめ、自ら陣前に現はれて名告を擧げられ候は誠に近來目覺しき事と存じ候

▲即ち二十四日の紐育特電は曰く「ローゼヴエルト氏は大統領としての立場より今回の政爭に向て辨明し置かざるべからざる點多きより過日華盛頓に向つて、オイスターベーの自邸を出發し、且つ最も長文の宣言書を發表せり、其宣言書中にハスケル氏が石油會社に關係ありて同社より巨額の金員を收賄せるは事實なる事を明言せり、然るに之を見たるブライアン氏は大に驚き、直に大統領に向て其誤謬を辯じ、又ハスケルと云へる人はオクラハマには一人にあらず必ず別人ならんとの電報を送れり、是に於て大統領ロ氏は會議を開き、昨二十三日午前より種々なる調査を遂げ、其結果愈オクラハマ知事なるハスケル氏が石油會社に關係あること明瞭せるより、同日午後直に叮嚀詳密なる長文の辯駁書をブライアン氏に送れり、餘り長文なる爲め此處には之を省略すべきも、大統領は先づトラスト會社はタフト氏とブライアン氏との何れを大統領にするを望むか、必ずや夫れ貴下を望まん、而して貴下は巧に議論を上下するも今日迄何事も實行せざる人なり、又貴下の信用するハスケル氏は今日迄幾度も不正行爲を發かれたることあるも、一回も辯駁せざるは取も直さず不正を承認したるものなり、此の如き人物が選擧界に公行するは最も恥

づべきことにあらずやと、何時もながら無遠慮に毫も躊躇する所なく思ふ存分に其所信を明言したり、ブライアン氏は必ず之に答ふべきも同時にハスケル氏とは關係を絕つならんと噂せらる云々

▲民主黨會計委員長ハスケル氏は始め其辭任を肯ぜざりしが、ブライアン氏之を賦擬し漸く之を納得せしめたるが、彼は之と同時にタフト氏も又石油會社と關係ある事を極めて確かに暴露し、更にハースト氏と共にローゼヴエルト氏を攻擊致し候。又フオレカー氏はタフト氏に對する復讐手段として、自黨內の腐敗を暴露せる覺書を發表せられ、一方に於て、ハースト氏は更に益々ハスケル攻擊の火の手を高め、續いてヒユーズ氏を其渦中に引込み申し候

▲此間にハースト氏が爲したる運動は實に目覺ましき者にて極力ブライアン氏を傷け民主黨の分裂を希望し、自己の率ゆる獨立黨より紐育府知事の候補者を出し、以てヒユーズ氏に當らしめ、縱橫に米國の政界を攪亂せんと努められ候。猶本問題の成行に就ては次號に詳述致すべく候



現代人物評論（十）

島崎藤村論

△藤村君について

小栗風葉

僕のやうに始終ヅボラにやつて居るものは島崎君のやうな、あゝいふどこまでも眞面目な、用意周到な態度を見る毎に常に自己の態度を省ることを禁じ得ない。作家といふものゝ作品は、單に作品其物の價値ばかりて判ぜられず、作家に一種の妙な人氣といふやうな者があつて、遠く見て何となく眞面目な、君子人のやうに見られると、其人の書いたものまでも價値以上の光が添ふといふ事が爭はれない事實であるとすれば

僕のやうにヅボラにばかりやつて居るものは其點から見ても處世上甚だ不得策であることをシミ〴〵感ずる。藤村君の態度などは實に敬すべく又師表とすべきものと思ふ。然し島崎君は餘り大人し過ぎて、其の爲めに却て反感を買ふやうな事がありはしまいかとも思ふ。だから人格や名聲に煩ひを及ぼさゞる限りは、いふべき事はいひ、爲すべき事は爲した方がよいではないかと思はぬでもない。

又あの人は作品の上にもチト大事を取り過ぎはしまいかと思ふ。繪ていふと、一點一劃にも先づ細心の工夫を凝して筆を着ける、爲めに却て多少の生彩を殺がれる處がありはしまいかと思ふ。といふのは藤村君の「破戒」などには未だいくらか其時の興に乘て筆の走つた處もあるが、其後の作になり、「春」などになると細心過ぎて固くなつて居る處があり、藤村君自身の特色が消えて行くやうに思ふ。其點になると以前の「水彩畫家」「老孃」（昔から今を通じて藤村君の作中僕は最も「老孃」を好む）などには藤村君獨特の情趣もあり又一面には熱もあり、或時には奔放の趣があつた。「破戒」などにも敍情的の處の多いのを批難した人もあつたが、僕はあれがあの人の特長であつて、僕等の讀んで引入られたのは寧ろあゝいふ處にあつた。其の後の作品には藤村君の考も違ひ主義も違つたんだらうが、強てあの特長をなくするといふのは惜むべきである。

△島崎君の不自然

戸川秋骨

島崎藤村君といへば必らず馬場孤蝶君と僕とが御引合に出る。島崎君が小說を書くと二人は繪具につかはれる。藤村論が出ると二人は太鼓敲きを仰せ付けられる。詈めれば勿論、惡く言つても八百長と見られて、畢竟藤村君の提灯持に終る。割の惡い事夥しい。まるて取り卷か幇間のやうである。かるが故に僕は島崎藤村論に付ては、瀧田君までお斷を申入れて置いた。然

るに同君の業であるか或は反省社のであるか、如何にもその督促ぶりが巧妙なので全くそれに敬服して、こゝに一筆染めなければならなくなつたのである。

一言すれば藤村君は技巧偽作の人である。偽の字が悪いと言ふなら技の字に代へても良い。兎に角こしらへる人である。全身これ技作の人である。先づ一つ小説を書くには、第一に原稿用紙をこしらへてかゝる。次に特別なインキを買つて來る。ペンを撰擇する。それから旅行をする。つゞいて下宿をさがす。随分手數の掛つたこしらい方であるが。小説もその通りて甚だ細工に富んだものである。決して自然なものではない。然るに藤村君は自然主義に近寄つて居るが、これは少し間違つて居ると思ふ。君はむしろその天眞爛漫な不自然をその儘出したらば良からうと思ふ。實際藤村君の作には始めから不自然なものゝ方に良いのがある。少くともこしらへたものゝ方に良いのがある。或は不自然をそのまゝ出すのが即ち自然主義であるかも知れぬ。それならばそれても良いが、藤村君のやり方はさうではない。強てその不自然を自然らしく見せやうとして居る。それてあるから非常に骨ばかり折れて結果が面白くない。所謂自然主義は君の名聲には利益を與えて居るかも知れぬが、作には禍を爲して居る。それから不自然即ち技巧といふものは短い範圍に於ては良いが、永くそれを續けて行く事は六づかしい。此れ即ち「破戒」や「春」の拙い所以で（この兩作を巧いといふ人もあるやうてあるが、それは間違てある）また短篇の或るものが面白く讀まれる所以てある。この頃佛蘭西詩人論を人から見せられたので、その一端を讀んだらこんな意味の事があつた。詩といふものは元來長く書けるものではない。感興に依つて書くといふ事が即ち短かゝるべき所以てある。則ち又ミルトンの失樂園の如きが失敗の作たる所以てある。と斯ふいふ風に書てあつた。この說が又直ちに藤村君の作の上に應用されやう。則ち技巧不自然なるものは永くつゞけられるものてない。故に藤村君の作に於ても短篇には秀逸がある。うまくこしらへられたものがある。最近の作「壁」

などもその例である。而してこれまた。その昔の「若菜集」などの成功した所以である。それ故僕は島崎君が自然主義などを難有がらず、不自然主義技巧技作主義を執つて、飽くまでその本領を發揮せられん事を熱望する。

これは藤村君を以て技巧の人不自然の人としての前提から出て來る論であるから、若しその前提が間違つて居たら話の全體が崩れて仕まふ。併し誰れが何と言つても、この前提は間違はぬ。僕が保證する。若し間違つて居るといふ人があるなら、手を擧げたまへ、僕は何時でもその人に敎へて上るから。

一言すると言ひながら大變長く書て仕まつた。愚痴を言ひながら劊の惡い役を務めて仕まつた。島崎君とは二十年來の知己であるから、言はせれば幾何でも言へるが、孰れにしても書て得のゆくことでないからやめる。

△藤村氏

相馬御風

○藤村氏の小說に對する考はまだ纏つて居ないから、今回は近頃私が藤村氏に對して感じた事を一つだけ述べ、御免を蒙る事としやう。

○それは藤村氏が新體詩人から小說家になられた――そのなられ方についてである。從來詩人で通して來た人で小說を書き出したものは此の一二年隨分多い。その中でも藤村氏は最も先きであり、且最も代表的である。無論若い時分は誰れでも少し位は詩人であつたかつたり、又はあつたりするもので、その點から云へは花袋氏の如きも詩人から小說家に變つた人とも云へるであらうし、獨步氏の如きも亦さうであらうが、併し私の特に云ふのはその人の存在の全體が自他共に明白に變遷の跡を認めるやうな人を云ふので、例へば小山內薰氏の如き葉舟氏の如き空穗氏の如きを云ふのである。その例はまだ他に一二三はある。

○さてさう云ふ風に新體詩人又は歌人として從來その存在を自他共に明白に認められして來た者で此一二年小説家と認められるに至つた人々を見るに、多くはまだ年が若い。一寸見てはまだなか〳〵詩的情熱の盛なやうな人々である。かう云ふ人々が既に夙く醒めた心になつて小説を書かねばならぬやうになつたのを見ると、時代と云ふものゝ怖ろしい力を感ぜずには居られない無論始めから小説を書き出した人は別物だが、個人として見れば何人も或時期は詩人であるのが自然のやうに思ふ。强めて云へば青年は詩人であるとも云へる。所が今日はそれが云へさうにもない。云ふまでもなく時代の流行に迷はされて居るものも少なくはないが、併し大體から見て今日の青年は詩人であるべく餘りに醒めて居る者が多い。青年が無理にも老人――此頃の流行語で云へば「中年」――擬らなければならぬのは今の世の有樣である。眞面目と云へば眞面目だが、衰へと云へば衰へである。或意味では進歩だが、或意味では悲痛な現象である。この怖ろしい時代の力が、矢張り狭義の詩人をして小説を書かねばならぬやうにならしめた。青年期にありて中年の心を持たなければならぬやうになつた。最近詩人から小説家に變つた若しくは變らうとしつゝある世の所謂「新進」作家の心にどれ程の矛盾の苦惱があるか知れぬ。文藝家としての經過は別として、個人としては誠に悲痛な事實である。

○所が同じく詩人から小説家に變つた人でありながら、藤村氏だけは全く趣が違ふ。少しも前に云つた人々のやうな苦痛な感が起らない。と云ふのは、藤村氏位青年時代をば詩人として完全に送つた人はない。若き胸に漲る感情を思ふさま吐露し盡し得たのが詩人としての藤村氏のやうに思ふ。同じ時代に生れても故人透谷はそれが出來なんだ。透谷は惑ひ苦しみつゝ死んだ。藤村氏は悶えつゝも歌つて居た。而も青春の血の湧く限り歌ひつづけた。そして歌ひ疲れて默した。默して考へた。而して醒めた。醒めて小説家となつた。私は藤村氏に對して最も羨やましく思ふのは此の態度であ

る。詩人たらば飽くまでも詩人たれ、歌はんと欲せば飽くまで歌へ、而して疲れたらば默せと云つたやうな經路を辿つてナチユラリーに小説家となつた藤村氏の態度は今の青年の最も羨むべきものである。氏はかう云ふ點から見ると純粹の藝術家である。同じ時代に生れても透谷の如きは、藝術と實生活とを一にし得なかつた、云はゞ不純な藝術家であつた。今の青年、小にしては最近詩人から小説家に變つた青年作家と藤村氏との間には、透谷と藤村氏との差に似たものがある。藤村氏の藝術生活位幸福な羨やましいのは少ないと思ふ。

△島崎藤村

白雲子

○小説家としての藤村君を論ずる場合に決して忘るべからざることは、新體詩人としての藤村君である。藤村君の全盛時代に比較すれば、現今の我詩壇は非常な進歩をして居る。殆んど全く別様の傾向を帯びてさへ來た。而し其の爲めに我藤村君の過去の詩壇に於ける功績を全然沒する譯には行かない。少くとも今の處氏は我新らしき詩壇の發達史上に特筆せらるべき位置を占めた人物である。氏の詩が我が詩壇に與へた影響、乃至は氏の作其もの丶價値に對する批判は暫く措くとしたところで、曾つて詩人とし示されたる氏の傾向が如何なる形に於いて小説家としての氏の作物に顯はれて居るか、若しくは如何なる變化を來したかを研究する上から云つて、先づ一應詩人としての氏を研究することが有用であり且つ必要であると信ずる。

○詩人としての藤村君は、殆んど當年に於ける詩壇オーソリテーたる觀があつた。其の成功の華々しかつたことは、寧ろ小説家としての氏の成功に比して、より以上のものが有つたやうに思はれる。否小説家としてて成功も、其の幾分は、僅かに詩壇に於いての既に獲取せる聲望に助けられたと云つても差支へない位である。然してさ許り當代を風靡したる氏の詩風は、果し

て如何なるものであつたらう。無論氏の成功は抒情詩人としてゞあつた。而して其の詩は著しくセンチメンタルの傾向を帶びて居た。往年『抒情詩』を公にせる一派の詩人と其の一面の傾向を同うし、他に他の一面は故北村透谷氏などのそれと似通つた點が無いでもなかつた。兎に角其の主なる題目は戀に限られ、其の措辭は幽艶典雅の妙を極めたものであつた。

◎然り、氏は抒情詩人として、其の作の多くは著しく主觀的傾向を帶びて居た。が、更に一面より觀ると、其にも係らず何處となく客觀的に感じられる點があつた。『抒情詩』のうちに集められたる作の多くと比して、其の題材の上に、將た全體の組立の上に、より多く客觀的であつたし、從つてまた其の詠ずるところが多方面に渉つた居た。更に其の形式上から云へば、幽婉典雅、よく内容と一致してた居たもの丶、此れ將た一方より觀れば、句炮字錬、備さに彫琢を加へたもので、著しく斧鑿の痕、技巧の跡を止めて居たことは爭はれない。現今の詩人に見るが如き、不羈奔放の姿態を望むことは出來なかつた。一面から云へば慥に氏は技巧の詩人であつた。今にして斯る批判を下すとも、必ずしも見當違ひの見解では無いと自分は確信する。只其の内容に於いて、當時の青年の胸奥に鬱勃として居たセンチメンタリズムの琴線に觸れ、而かも比較的自由に、また比較的清新に、其の感想を披瀝し來つたところに、氏の詩のもてた最大の源因は存したのである。氏の詩人としての價値も、此の點に存するのである。

◎かくて一般文壇の傾向につれて、氏は詩を捨て、散文界に突入して、玆に小說家として其の筆を揮ひはじめた。――獨歩君の如き花袋君の如き、曾つて『抒情詩』に集つて居た諸君も、小說界に馳驅して、斯界の先學者、新機運の鼓吹者たる榮冠を獲取したのが、氏も亦等の諸氏と轡を駢べて、新文學の先導者となり、創作界の新傾向を生み出すことに力めた。まだ此の外にも詩壇を辭して小說界に入つた者には、うつ穗君葉舟君などもあるが、此等の諸氏は何故に其の從來採り來た進路を捨て丶、更に新たなる方面に新たなる歩み

を始めたのであらう。此には種々なる源因がある。單に或る皮肉屋の云つたやうに、『新體詩では食へない』と云ふが如き、簡單なる物質上の必要乃至は要求に迫られたる故とのみ解するが如きは、故らに危言奇語を放つて自ら快しとするものか、然もなければ、皮相浮淺思想界に横溢せる大波瀾の起伏に盲なるもの丶言である。

○彼等は皆詩壇の先醒者であつた。其の思想、其の感情、一切の點に於いて淸新の氣を以つて滿され、新たなる眼を以て見、新たなる心を以て感じ、あらゆる古きものに對して、何等の感興をも催さず、むしろ之を嫌惡し排斥し唾棄せんとするに至り、熱情と誠實と活氣とを以つて、新たなる文藝を起さんと蹶起したのである。彼等の手よりして文壇の新生命を注入せんと試みたのである。而して旣に之を詩壇に試みて、或る程度まで成功を得たが、更に小說界を望めば、其の弊瀆は更に甚だしきものである、また彼等自身に於いても其の新らしき眼に心に觀且つ感ずるところは、形式の上に幾多の拘束を有する詩に於いて表顯するよりも、比較的自由なる小說に於いてする方が、其當を得たものであらう、且つ開拓すべき廣大なる前途を領有し得ることを自覺したからである。一層語を切にして云へば、彼等のうちに宿れる新思想が彼等を驅つて自ら創作の方面に向はしめたのである。内外の刺戟相待つて、彼等をして袂を拂つて起たしめたのである。

○次に小說家としての藤村君は、如何に我等の眼に映じたか、映じつ丶あるか。曾つて新小說に揭載せれたる氏の處女作なる長篇は、抒情詩人としての傾向が餘りに、多く顯れて居た。局部局部に抒情的の妙所を語ることが出來るが、全體としての結構ことに、描寫の上に、著しい缺點が見える寧ろ氏は今迄通り詩人として活動して欲しい、と云ふのが一般の批評であつた。併し其の當時の文壇は、技巧派全盛の時代であつた。從つて氏の作の如きも、其の眞價以下に見られた傾のあつたことを忘れてはならん。只主人公の性格が讀者に與ふる印象に不明の點があつたこと、及び新らしい

とは云ひ條、まだ多くの點に於いて、多少從來の作風に囚はれ、全然其の桎梏より脱却することが出來なかつたこと、及び氏の後期の作に見る如き傾向及び缺點の隨處に見られたこと丈けは、否むべからざる事實である。

○藤村君の創作の多くは、信州で出來た。下らぬ刺戟のみ多い都門の忙しい生活を逸れて、靜かな田舍の、讀書と瞑想との生活、秀美なる自然に圍まれたる生活が、如何に氏の思想感情に影響したかは、其の作物によつて明かに窺ふことが出來る。試みに氏の作物を檢ずれば其の多くは材を信州に取つたものである。少くども舞臺なりとも信州に取つてある。――東京に出て來てからの作には、材も舞臺も東京に取つたのが多いやうである。――單に此丈けの事實を以つてしても、其の影響の尋常で無かつたことが測り知られる。

○氏の作物に顯はれたる思想の大體の傾向を云へば、氏は力めて新時代の空氣、詳言すれば新時代の空氣に育くまれたる青年の思想感情を描かうとして居る。無論新舊思想の衝突もあらうし、單に急潮の如く移り行く時代の面影を描かうとしたのもある。併し要するに新らしき時代の人物を描かうと力めて居る。而して常に時代の空氣とも云ふべきものを、其の背景として置くことを忘れないで、其の煩悶、其の發憤、其の驚嘆、あらゆるものを、此と對照せしめやうとして居る。また今一つの傾向は、時とすると氏の作には、一個の概念――嫉妬憤懣とか云ふ――否、人間胸奥より發する感情の表顯を、極めて深刻に描し出さうと力めたものもあることとてある。斯る場合には必ずしも、時代の空氣と對照することをしないが、而も其の感情は多く本能的の種類のもので、其の發露の狀態は、飽までも、熱烈で狂暴て、殆んど野獸的と思はるゝ程までに、大膽に強烈に顯さうと力めて居る。且つまた時とすると作者が其に對して暗默の是認を與へて居ると思はれるやうな場合さへも認めることが出來る。而して此等一切の傾向を覆ふに、一種近世的なる作者の主觀の影どりを以つてし、加ふるに作者獨特の描寫乃至筆致の上

の特色は、讀者に云ふ可らざる清新の感興を與へしむる上に與つて力がある。

◎詩人としての藤村氏は、抒情詩人であり其の詩は主觀的傾向を帶びて居たにも係らず、何處にか客觀的の點を認めることが出來ると云つた、其の點は氏をして小說家たらしむる上に少からざる便利を與へたと信ずるか、其と同時に氏をして全然抒情詩風の臭味から脫却する上に、少からざる困難を與へたやうである。全然異つた方面に進むのなら却つて具合が好かつたであらうが、憖最初から幾分其傾向があつた丈けに全然脚を洗ふことが六ヶ敷かつたやうである。つまり轉向には便利であつたが脫却には不便であつたらしく思へる。其は兎に角氏の作には、局部に非常な抒情的の箇處があつて、時とすると其が全體との調和を失ふまでに、力瘤を入れて書かれて居る。其から又全體の描寫叙述の上にも著しく抒情的の傾向が見えて、時とすると稍繁縟に流れ、人をしてしちくどく感ぜしむる。『破戒』などは其の適例である。從つて粗叙省筆の妙を感ぜしむる場合は極めて尠い。更にまた其の筆致用語句法等に至つても、曾つて抒情詩人として有したる傾向が到る處に着き纏つて居る。如何にも優しく如何にも優雅な筆の使ひざま、句の作り方、文字の撰擇など、僅かに我等をして氏の詩風を思出さしめる。從つて幾分形式に泥み、技巧に囚へられ、粗けづりの美に乏しく、少しく進める者の眼から見ると、一種の型に篏められて居るやうに感ぜらるゝ。かの泣菫君などの散文に見るが如き、多少クラシカルとも云ふべき弊に囚へられて居る。無論潑溂たる氣力の横溢して居ると云ふ風の處は無い。しかも沁々と讀者の胸に忍び入るが如き、優しく細くしめやかな調子も、其の稍形式的に流れた點よりして、幾分其の力を減じられ、ことに本能的の激情を寫す場合などに於いては、這般の筆致は著しくまだるく感ぜらるゝ。如上の傾向はひとり人物や事件の描寫の上のみならず、自然に關する描寫の上にも顯はれて居る。而して氏の作中に顯はれたる自然の描寫は、無論氏一流の特色を帶びては居るものゝ、

時とすると餘り其に力を入れ過ぎた爲め、全體との釣合乃至調和を失ひ、北のみ獨立しやうとする傾きがある。配景たる位置より轉じて中心たらんとする傾きがある。

◯併し最近に至つて、氏の作物ことに其の描寫の方面には、著しき變化を生じつゝある。此の傾向は最近の長篇『春』によつて、極めて明瞭に窺ふことが出來る。春の内容は、故北村透谷氏及び、氏を中心せる舊文學界の諸文士を描いたもので、藤村氏は之を寫すに當つて、從來とは全く異つた筆致を以つてした。力めて抒情詩風の調子を拔き、全然艶氣なしに描かうとしたものらしい。出來る丈け、あるがまゝ、觀るがまゝ、感ずるがまゝに描き出さんとし、筆の上のあやや誇張を避けやうとしたらしい。而して其の點に於いては慥に或程度まで成功して居る。が、餘りに平叙に過ぎて單調に陷り、從つて人をして型を破つて復型に入れるが如き感を催うさしめた傾もある。ことに其の人物事件が讀者に與ふる感興も、少しく平淡に失し、且つ多少ぼんやりした點もあつて、從つて作者の獨り合點に落ちた傾もある。而して其の繁縟な冗漫に流れやうとする癖は猶ほ依然として附隨して居るやうに思はれる。

◯『壁』『收穫』の如き短篇に至つては、更に其の傾向が著しく、あるがまゝに寫さんとする傾向はます〱明かになつて來た。併し平凡なる事象を平淡に描いて而して意味あり價値ある作を得やうとするには、第一作者の觀察眼が非常に鋭く、其の感情が非常によく、修養せられて居ないと、徒無意味の繰言に過ぎなくなる必ずしもアン麵麭の如き作物を望むのではないが、此點は氏の將來大に注意せらるべき點であらうと思ふ。無論氏が形式上の舊型を打破して、自由なる新境地に脱出せられたる努力と奮勵とは、吾等の等しく推讃の辭を吝まざるところである。

△藤村君に就て

村山鳥逕

○自分は曾て本誌に「破戒と運命」と題して、兩書を讀むだ感想を寄せた事がある。其時にも藤村君は是から何程進む人で、其行先は判らぬ、今でも一流の人だらうが、一流中で最も未來のある人だと言つて置いた、今日でも依様然う思つて居る。故に同君を尊敬する意味で其作物に就て卑見を述べず、自分の見た藤村君といふ人物に就て感想を陳ねやうかと思ふ。

○病人を看護しながら膝の上で書くのであるから、到底纏つたものではない。順序の無い雜感である。

○藤村君の長女みどりさんが病氣の時、ある人に勸められて市谷谷町の石塚といふ食物で病氣を直すといふ醫者のやうな人處へ、みどりさんを連れてお爺さんの藤村君が行つた事がある、自分も同君に勸められて、其當時腸か惡いのを診て貰ひに一緒に行つた。其時石塚先生は「犬尿銖」と書いた人名簿に我々の名を書き付け了つて、藤村君の顏を見て「お前さんは完全に發育して居なさる、お前さんは別段惡い處はあるまい、然うだらうとも。」と言つて酷だ不完全な發育をした由の自分の方に向つては、諄々と養生法を說き初めた。大低な人には難を發見する石塚先生さい、同君の五體に是といふ不完全を見出す事が出來なかつた位の體軀を持て居る人だ。中肉中背で頭髮の黑い深い顏色の白くて艶のある、憚様ながら事實好男子である。

○恁いふ事を幷べるのは失敬でもあるし又無用のやうだが、筆者には必要な話の緒で、同君の作物に人氣がある所以は、其完全なる體格と、逢て快い容貌と賴母しい人格とが、自然に作の上に浮動して微妙な働をするのであらうと自分は斷じて居る。ちと是も妙な話で嘲笑されさうなことだが、八犬傳や弓張月を見て居ると喧嘩好の大入道が眼鏡をかけて唐様で原稿を書いて居る處が浮ぶ、京傳三馬各々其人物が書いた物の上に跳るといふ事は、誰も同じであらう、其事なのである。

○人間としての藤村君が既に人氣を吸ふやうに出來て

る。今迄自分は同君が何人とも喧嘩をしたといふ事を聽かない、其は八方美人の爲ては無い、誰も同君に逢つては人氣負がして、强い奴は劬るやうになり、弱い君は仰ぐやうに成る。文才の外に豪い氣才のある人だ。

◎それに藤村君自己一流の常識といふものがある。唯の常識とは異ふやうだ。而も常識に逸れない上に自己獨特の常識がある。自信といへば佳いのかも知れない、人事などを觀察して判斷するのに、隨分外れては居まいかと他て思つても、然うだと判斷すると然うにして了つて、竟に事實が其に附隨して然う成つて了ふ。

◎怖ろしく利巧な人て、自分の缺點なども自覺しないやうて居て、何ても自覺して居る。

◎芝居をする人だといふ人もあるが、自分は其を惡解釋して居る。同君には二面ある或は多方面といふ方が本當かも知れない。一面は例の自信の藤村君是は何日も奥に引込んて居る。一面は他と同化する事の頗る速な藤村君てある。或は相手の心中を洞察する事の上手な藤村君てある。或は此奴には惡した方が面白いとか、自他の爲になるとか、俺の品格を落さないとか、おつに見えるだらうとか思つて早速の間に取成す藤村君てある。此等の事は誰にても多少ある事てあるが、同君の利巧な手際でやられると、此方が其と感附いた時に薄氣味が惡いものだから、思ひ出す度に色々と解してそれに名を附ける。

◎だから赤心を吐露する人には、思ひ切つた本當の事を語つて其に報ゆる。然し大低な人は第一此方が同君の前て思ひ切つた事を言はない、だから先も言はないのてあらうと思ふ。

◎親切な人だ。その親切振が勿體を付けない處に感佩して居る。元大部世帶の苦勞をしたといふ丈に、錢の無いのに思ひ遣りが佳く、知つて、知らない惚けた顏などをしない、何人にても出來るだけの厚意を盡す。是が何ても無いやうな事て、然かしながら今日の社會には珍な事だ。

◎人は得意なものては仲々成功しない、却て橫道て成功する。藤村君自身も社會も其當時是が本領だと思つ

て居たらうが、同君の新體詩は依様横道の成功てあつた。同君の大に成功すべきものは其小説て、其が本領てあらう。是から先だ。

○唯無意味に然う言ふ譯ては無い、第一同君は今も學ぶ心掛が深いし第二に若い處がある。鳥渡見は劃然として成つて居るが、箍を外すと若々しい隠れた藤村君を出す、第三には立入つた話だが今の自己の作物に甚しく不満らしい。

○生きて居る人を論ずるなんて些と可笑しい、本來なら自分などは先覺知友の事だからと一枚位て逃げる所てあるが、偶には遣つて見るのも宜からうと、恁な無遠慮な藤村君雜感録如件。

△島崎藤村論

守田有秋

『一』

新體詩人としての藤村氏には、自分は多くの注意を拂は無つたが、小説家としての藤村氏には、尠からず渇仰の念を抱いて居る。然し自分が氏の聲咳に接する迄は、尙ほ今日程尊敬の度を高める事は出來無つた。

本年五月以來、所用あつて、二回程氏を訪問し、親しく氏を見て、初て氏の人物を崇拜するやうに成つた。所謂自分の如きは、氏に私淑せる一人てあらう。

自分は、此の故に文壇の驍將として、將た自然派文士の大家としての藤村氏を説く前に、個人としての藤村氏を説き度いと思ふが、然し、其れには、別に文壇適當の人があるてあらうから、自分は矢張り、自分の見た小説家としての藤村氏を説くとしやう、固より其が肯綮に當て居るか何うかは、自分の知る所てはない。

『文學界』を地盤として、透谷、秋骨、孤蝶、等の諸氏と共に、藤村氏が文壇の新機運を拓いた事は、世人の普く知る處てあらう。亦氏が、『一葉舟』『鶏』『馬夫』等の長詩發表以來、嶄然として、詩壇に頭角を現はし、新時代の新詩人として、文壇に認めらるゝに至つた事も、今更事新らしく言ふの必要が無いてあらう。曰く

『一葉舟』曰く『夏草』曰く『若菜集』何れも氏が清新なる格調と、絢爛なる詩想を傳へて、十餘年間に亘る氏の內的歷史を語つて居る。然るに氏は、三十五年始て小說『舊主人』を公にし、小說家として打て出た。氏の文學的生涯は、此の詩より散文に轉するに至つて、初て新らしき時期を劃したと云ふ可きだ。

『二』

『春』を讀だ人は、氏の經歷を想像するに難くはあるまい。氏が明治學院を卒業して、『文學界』諸氏の一團に加はり、激しい失戀や、長い生活の煩悶をした後で、東北學院の英語敎師として赴任する迄は、實に悲慘なものであつたらう。げに、『春』と云ふ可く、氏に取つては、餘りに悲しい、餘りに寂しい生涯であつたらう。然し、多謝す、此の長い慘苦や悲痛の中に鍊られた氏は、文學と云ふことの外に、人生と云ふ事を切實に學んだ。思ふに、氏の作品は、其の素養あり蘊蓄ある洋文學の感化よりも、寧ろ、其の數寄多難なる活生涯の長いページの中より材料を得た事であらう。自分は、『春』の中に表はれた「濱町の叔父」と『爺』の中に出て來る「叔父」とが同一のモデルであると氣付いた時、如何に氏の生涯が、氏の作品に影響を及ぼして居るかを深く想ふた。其の後、三十一年、氏は信州小諸の英學塾に田舍敎師として引き籠つたが、爾來七ケ年、氏は此の地に於て、最も平靜なる生活を送り、最も都合よき修養及習作の期に入つた。

斯て氏は、『舊主人』に次て、三十六年『老孃』を公にし、三十七年『水彩畫家』を「新小說」の卷頭に出した。同年夏、津輕海峽を渡つて、初めて北海道の友を訪ふたとき、丁度露艦襲擊の噂のあつた頃とて、殺氣は北海の天を閉して居たので、直ぐ小諸へ引返して、『津輕海峽』の一篇を物したが、此の他の作品は、悉く、信州地方の風物、人情を主材にしてある。即ち、千曲河畔の民情を主にして『藁草履』を、北佐久を舞臺にして『水彩畫家』を、小縣を背景にして『老孃』を、小諸人を主人公にして『舊主人』を書いた、其の後三十九年に上梓された『破戒』は、下水內の飯山を舞臺にし、『朝飯』

は上水内を題材にした。

兎に角、氏の生涯が作品の上に大なる影響を與へて居る樣に、信州なる一地方が、此の大なる文學者の上に感化を與へた事は、驚く可き程である。即ち『綠葉集』なり、『破戒』なり、何れも山國的物語であると言つても好い。

三十七年一月、氏の益友、田山花袋氏は雪の信濃を遙々と、小諸の町に藤村氏を訪ふたのである。丁度山國の小都會は、雪の爲めに埋められて、人も獸も寒さと寂涼に倦んじ、惱んで居た時とて、藤村氏は、天から降つて來た人の樣にして、花袋氏を歡び迎えた。僅かに一日の會逅に過ぎ無つたのであるが、然し二人の溫き情が交換された事は、彼のエメルソンがケルシャの哲人を訪ふた時にも優つて居た、其は花袋氏の『雪の信濃』を讀んでも解かる。兎に角花袋氏が、藤村氏に取つて親友であると同時に、非常なる益友であつた事は想像に難からぬ。かの「詩」を棄てゝ「小說」に馳せ參じたのも、氏が社會の諸相を活寫し、深刻なる人生の描寫を企つるには、韻文よりも散文、殊に小說を以て最も優れりとした結果には相違あるまいが、亦『布團』の作者が、熱心なる勸告と、奬勵に俟つ處があつたのに相違ない。

氏は參拾八年四月迄信州に留つた、そして、其の春『破戒』の草稿を懷ろにし、次の樣な感懷を殘しつゝ、雪の天國を出てゝ、遂に東上の途に就いた。

教師として予が小諸地方の青年に敎へたことは、僅に學問の初步に過ぎなかつたが、その青年の父兄から『田舍』といふ者の意味を學んだ事は多かつた。予は敎師として行き、生徒として歸つた。

——綠葉集序文——

『三』

吾人は『破戒』以前の作に於ても、氏の偉いなる手を認める事が出來る。然し、『破戒』以前の藤村氏の名聲たるや、依然として舊來の新體詩人としての名聲で、敢て何人も氏を小說家として一流に置くものは無かつた。是れは何れの時代に於てもある事で、兎角世間と

云ふものは、人の長所を見ても見ぬ振をするものだ。『舊主人』が出た當時は、紅葉山人の晩年て、鏡花子の名聲天に冲するが如き勢であつたから、餘り文壇の注意を受けなかつたのも無理はない。唯だ末節の一部に風俗を壞亂する個所があつたので、其の筋の禁止命令を受けた爲め、漸く世間の注意を惹いたが然し、其れにしても、同じ「新小說」の卷頭に載つた鏡花氏の「起誓文」を讀んだ讀者は、未だお尻の方に、新體詩人の殼のくつ着いて居るヒヨツコ小說家の作品に重きを置く理由がない、遂に嘲笑の裡に葬り去つて了つた。けれども自分は、此の埋沒されたる作品を以て、『綠葉集』中の佳作と比肩さし度いと思ふ。殊に自分は此の作品を以て、氏が早くより、自然派的作風を有して居た事を證明し度いと思ふ。成程、是を當時の硯友社作家の諸作と比較して見るに、如何にも垢拔けのせぬ、田舍娘風の處はある。然し、垢拔けのした、藝者風の作品のみが必ずしも小說であると云ふ理由はない。自分は深刻なる描寫を試みた自然派風の作品として、此の一篇を長く記憶に存じ度いと思ふ。

自然派の文藝熱は、昨年から起つたのであるから、無論今より數年前の氏の作品に、是を期待する事の出來ぬは當然である、然し早くよりツルゲネフを愛讀して居た氏は、かの花袋氏が早くより『重右衞門の最後』の如き作品を公にしたやうに、早くより自然派に對する傾向を有して居た。『水彩畫家』の如き、『爺』の如き、其の特徵を示した一例である。兎に角、硯友社の諸氏が、未だ過去の夢を追ふて居る際に、故獨步氏や、花袋氏や、藤村氏が、新らしき努力を試みんとしつゝあつた事は、蔽ふ可らざる事實である。

然し、兎にも角にも、『破戒』は、氏の生涯の第二期を劃した作品である、氏は『破戒』を上梓するに至つて、始めて純然たる小說家の班に入る事を許された。

扨て『破戒』は如何なる作品であるか。菊版にして、厖然四百頁の大作、當時否な、現今も尙ほ文壇稀に見る作品である。稍々描寫に冗漫の個所があつた爲め、多少の非難は免れ無つたものの、主人公丑松の心理的作

用を描して神に入れるや、千曲流域の風光を敘して眞に迫れる事や、又は、文壇に於て、曾て見ない程、深刻切實なる人生問題、社會問題に觸れて居る點等に於て、兎に角、一時文壇の視聽を聳てしめたのである。

當時雜誌『藝苑』に於て、羚羊子（上田敏氏？）なる一評家は、此の作が、ドストゥエスキイの『罪と罰』よりヒントを得たものであつて、主人公の丑松は、『罪と罰』の主人公ラスコルニコヴと、同巧異曲の人で、かのズニヤは、此のおしほと同型の人である、そして、丑松が穢多であると云ふ事を隱さんとするのは、ラスコルニコヴが老婆殺害の大事を隱蔽せんとするのと、其の心理的作用が同一であると說いたが、然し此の匿名の評家も、最後に於て、矢張氏の筆に依て信州地方のローカル、カラーの遺憾なく描出された事や、丑松の心理作用の巧妙に寫された事を指摘して、賛辭を以て筆を收めて居た。

成程恁う言はれて見ると、氏は『破戒』のヒントを『罪と罰』より得たのかも知れない。然し、自分は、氏が何處からヒントを得たにしろ、是が、飜案でなくつて、氏の創作である以上は、文壇稀有の作として、讃美せざるを得ない。

多少の非難は有つたにしても、時勢の趨く處は、遂に此の作品を一大佳作として寵裡に入れて了つた、爾來藤村氏の名聲は隆々として旭日の冲天に昇るの感があつた。

『破戒』の一部には、頗るミイスチックの個所があつたが、兎に角最も自然派に傾いた作物として認められた、是に次て表はれた短篇『朝飯』『家畜』何れも大したものではないが、純然たる自然派の作風を示して、來る可き自然派熱の豫兆を示したやうな風があつた。

次て起つたものはモデル問題である。

『四』

昨年『文藝俱樂部』が、『二た昔』と云ふ名稱の下に臨時增刊を發刊した。各名家の雄篇佳作を網羅した中に、藤村氏の『並木』と云ふ一篇がある。其の友人なる戸川秋骨氏、馬場孤蝶氏が、篇中に表はれたる人物のモデ

ルに用ゐられたと云ふので、用ゐられた本人よりも、周圍のものが、大分八釜敷騒ぎ出した。同時に氏の舊作『水彩畫家』に對し、丸山晩霞氏が抗議的投書を本誌に掲げ、其處にも此處にもモデル問題に關する議論が沸騰するやうに成つた。

然し、氏は其等に對して一言半句の辨解らしき事もなさず、更に、大々的にモデルを用ゐて、第二の大作『春』の執筆に掛つた。モデル問題の火の手は、棄て置へ中に消えて了つたが、何時の間にか、自然主義に飛火をして、益々自然主義の火の手を盛ならしめた。

斯る中に四十年は暮れて、本春より、氏が第二の大作『春』は東京朝日新聞に連載せらるゝ事となつた。回を重ぬる事前後百三十五回、四月初旬より始り八月中旬に至つて、初て結末を告げた。主として、彼の『文學界』舊同人をモデルとし、其れに北村透谷氏の悲慘なる生涯や、自家の多岐なる經歷を經緯とし、青春の煩悶と努力を描寫せんとしたものである。兎に角、此の作は、今より十餘年前の社會、人情を土臺として、其の當時の、時代精神を謳はんとしたのであるから、現代の華美な、そして何ちらかと言へば輕浮な、虛榮心と成功熱に浮されて居る青年には、餘り感興を惹かなかつた樣に思はれる。されば、篇中に表はれた主人公の岸本は、無論現代の青年とも違ふし、女主人公の勝子も、現代の女學生の樣に突飛て、進取的の處が、稍尠かつた樣に思はれる。同時に「青木」として描出された北村透谷氏も、現代の文士とは、氣風なり、人格なりに餘程相違があるやうに思はれた。

是を『青春』や、『魔風戀風』や、『コブシ』などの作品に現はれた青年や少女と比較すると、非常なる差違のあるやうだが、成程當時の青年は恁うであつたかと、考へ考へ讀むと、津々とし趣味盡きず、宛らに時代の人に接するかの感がある。篇中、性格描寫に於て成功して居るのは、矢張「青木」と「岸本」である、「勝子」のしほらしい處も、「操」の貞淑な、そして、如何にも情熱のある處も、能く現はれて居る。

一部の讀者は、是を讀て解らぬと言ふかも知れない、

成程普通の小說の樣に、井然たる脈絡のない處もある。けれども、性格の描寫と云ふ點に於て、自分は、確に『破戒』よりも成功せる大作であると云ふ事を斷言して憚らぬ。

末段に入つては、岸本の母と姉が大分活躍して居る。其の他、周圍の人物も、各異つたる個性を充分發揮して居る。唯だ事象の推移が、餘りに急のやうに思はれる嫌ひが無いともないが、兎に角、青木の死と、勝子の死と、兄の入獄等を最も能く配置して、自然に、且つ平垣に局を結ばした處は、大なる手腕と言はねばならぬ。

元來『破戒』に現はれた人物は、比較的に少數で、關係した地方も範圍が極く狹小であつたが、『春』に至つたは、其の活動せる人物、十指に越え、其の描寫されたる地方も、比較的に廣く、且つ事件の發展が、多面てある、然も、是れ程の布置結構を以て、尙ほ何等技巧脚色を加えざるかの如くに、なだらかに纒めて行つた點は、確に成功せりと言はねばならぬ。

尙ほ玆に一つ注意せねばならぬ事は、藤村氏の文體が、『破戒』より『春』に入つて、非常に變化を來せる事である、殊に『破戒』の中に表はれた、冗漫な描寫の筆付が、漸く簡潔に成つた事である。そして、『破戒』の到る處に見えた郷土的叙景の代りに、今度は活動の都會が寫し出された事である。

是を要するに、彼には長所短所交々に備はつて居たが、此の作中には餘り短所と云ふ程の短所が目に付かぬ、けれども其の大した短所の眼につかぬのは、所謂五分の隙もないと云ふ意味ではない。然しながら、如何に偏頗な考を以て、見ても、恐らく是を失敗の作と云ふものはあるまい、若し、斯の如き大篇の、一二ヶ所の瑕瑾を以て、直に劣作なり、失敗の作なりと斷言する人があるならば、其の人の眼玉は節穴である、小說など讀んで解る人てはあるまい。とマア恁う言つて威かして置く。實際、其れ程、自分は『春』を愛讀した一人てある。

『五』

『春』以後、氏は別に何等の作品をも公にしなかつたが、去月(十月)に入て、二篇の作品を公にした、一は「早稻田文學」に掲載された『壁』で、他の一篇は、「文章世界」に載せられた『收穫』である。

『壁』は、其の主人公、吉さんの生涯が、壁であると云ふ、心持を表はしたものである。兎に角、內容と題とが相照應して居るか何うかは別として、兄弟達が寄つてたかつて、苦しい中から、吉さんと云ふ厄ザ者を世話を仕て居ると云ふ事だけで、人生の或何者かを暗示して居るやうに思はれる。決して、片々たる薄ぺらな作物と同一視すべきでない。

『收穫』は、齊藤と云ふ老人と、中根と云ふ男が、佐々木某と云ふ英語の先生を、或地方の英語塾の敎師として世話をすると云ふに過ぎないが、然し、恁んな二三頁の短篇の中にも、人性の美點が、最も能く表はれて居る。唯だ自分には少し呆氣ないやうに思はれたが、意味も何も無い、日常茶飯の事を捉へ來て、其處に何等かの、人生の意味を與へんとした作者の考だけは、能く解つた。無論前者よりはずツと見劣りのする作であるのは止むを得ないが、其れにしても、他の作者より、何となく着眼點の違つたやうに思はれるは、强ち贔負目許りでもあるまい。

扨、斯く見來つて、藤村氏の將來を考ふるに、一寸判斷が付かぬが、兎に角、氏の前途が決して、百花一時に咲き亂れるやうな、華々しい事でないだけは解る。然し、其の代りに決して、凋落の悲嘆を見るやうな事はなからうと思ふ。兎に角、氏は決して藝者の樣な花々しい、そして垢ぬけのした作者ではあるまいが、しほらしい、ウブな田舍娘のやうな處がある爲めに、何時までも、何時までも文壇に飽かれないで、漸進的に、其の手腕を示し、其の步武を進めて行く事が出來ると思ふ。

泉鏡花氏の如きは、藝者美的の文學者である、殊更に技巧や脚色の白粉を塗りくつて居るから、一時は世人を眩惑さす事も出來たらうが、何時までも、諸人の愛を買ふ事は出來ぬ。矢張り女房にしやうと思ふなら

ば、淡泊とした、そして、平凡な、素人美の婦人てなければ不可ぬやうに、人生の慰藉、理想の糧とするには、シンミりした、落着いたものが好い。思ふに眞の藝術は、繪具と刷毛のみでは出來ないであらう。兎に角、妖艶な容貌や、蜜のやうな言葉は御免だ。

　要するに藤村氏が、文壇に重きをなすは、此の如き意味に於てゞあつて、現在も將來も、氏の文學的態度の變らざる以上は、社會より嫌はれるやうな事はあるまい。此の點に於て、氏の文學的生命は却々永い事と思ふ。願くば、今日の如き態度を持して、長く文壇に貢献せられん事を祈る。妄言多罪。

△葡萄の詩人藤村

江　東　生

◎仙臺は葡萄棚の多い處である、藤村が其頃教師をして居た、東北學院の庭の中にも、少さな葡萄棚があつたかに思ふ。實際藤村の其頃の詩には、葡萄棚の下と云ふ文字が多かつた、羽衣は紅梅の窓の下の王朝の詩人、藤村は葡萄棚の下の明治詩人として、我等は「悲む勿れ我か友よ」などの新調を頻に愛吟して居たものである。

◎藤村は確か作文の受持て、何處か素人屋に下宿し夜は二時頃までも讀書して居る、學院にある藏書は、三分の二以上讀破した、生徒の受も好かつたと聞いた時分には、もう藤村は仙臺を去つて了つた。當時佐々醒雪、高山樗牛、相共に二高に教鞭を執る、仙臺は此の三文星を一時に聚めたが、三文士共に其の蘊蓄を此の土地に傾けなかつた。藤村が馬の事を調べて、「天馬の歌」を作つたのも確か其頃と思ふ。學院の生徒から氏の容貌や、風采を又聞しては、獨りで喜んで居つたのてあつた、

◎藤村の詩人たる生涯は、其の情調詩格に於ても、其の傾向に於ても、前後二種の異つた風味を帶びて居る。「若菜集」時代は、全く叙情脈てあるが、「一葉舟」、「夏草」、「落梅集」と進むに從つて、叙事が漸く半を占むる、殊に最後になると、「若菜集」時代の主觀感情一方を離

れて、理智的に靜觀して居る、觀察の土臺も夫れだけ廣くはなつて居る之れ氏か時代と共に、「文學界」のセンチメンタル時代を離れた左劵であるが、一面氏の「落梅集」時代は、氏が色々と新詩を研究の結果、詩よりも寧ろ散文に興味を覺えて、此方に移らんとした躊躇逡巡の時代である、而して韻文に荒さんだ時代である從て此時代の詩には、根底に落着いた安心と感興が見えぬ、動搖或は倦怠の色さへ見えて、之れ迄にあつた樣な氏自身の性格、情調は殆んど影を隱して了つた。

◎藤村が、明治の詩界に一境地を拓いた功勞は大したものである、或は一のエポックメーカーとも云へる、泣菫氏なども、一時は全く氏の後ばかりを追駈けた時代もある。

◎要するに詩人としての藤村は、「若菜集」時代を最も油の乘つた時とする。清新な西歐の詩思を、美しい故國の文字で繰取つた、調子、句法の耳に快さ、舌障りの美くしさ、偕は文學界時代の優しい厭世思想に、行く春の如き青年の悲哀と熱情を交へた、其の情調の流れの寂しさは、如何に多く文字ある當時の青年に、其の模倣者、其憧憬者を作つた事であらう。當時の藤村は、眞の詩人としての意味に於て、遙かに晩翠などを蹴落し青年の渇仰を其一身に集めた者であつた。

◎其當時某氏が、信州は「小諸なる古城の邊」に氏を尋ねた折、百姓に詩人の藤村と尋ねた處、解らぬ、島崎さんと云つたら、始めてあの學校の先生ですかと案內して呉れたと云ふ逸話もある。

◎斯て氏は小諸に蟄居幾年、愈々散文家として立つとの報を聞いた時、我等は氏が、折角堅め得た新詩の領地を惜氣も無く打捨てる事を、一般詩界の爲に悲しんだ。次には氏が韻文を離れて、果して何程の成功を收め得るか、氏は今に進んでも退いても、自己の立場の無い、非常な窮地に立つことは無いかと痛く危ぶんだ。と云ふのは、氏が韻文の如き深くとも狹い、一種の情熱と情感ばかりで、散文界に立つた日には、何時でも同じやうな主觀、脚色、人物、趣向ばかりで、遂には當時の花袋、露伴の第二世とはならぬか、と云ふ介心

であつた。

◎けれども「藁草履」出て、「舊主人」出づるに至つて、少くとも文學界は意外の感を懷いた。見よ、詩界の氏の終末に、聊か微光を洩した如く、氏は今ま創作に於て、曩の特色たる敍情脈を殆んど顯さぬ。花袋は自然派の驍將たる近頃までも、猶ほ其の敍情脈に煩はされて居た、然し藤村氏は早くも其頃から、生れ變つたやうに其舊衣を蟬脫したのである。

◎「藁草履」其他の短篇に顯はれた藤村氏は、第一に平凡を材料とする、第二描寫に、之までの文壇に無い新味を見る、第三に歐州の批評家がヅーデルマンに就いて「道德は設けらるべきもの、相續するものでは無い」と云つたやうな、感情の自然を尊んで、傳習の道德に交涉せぬ處を見る、第四自然の描寫に如何にも沈んで、ふつくりした、水彩畵的の匂ひと味を味はれる等の特色を認めた。然し乍ら氏の作物には、一貫した理想、性格、傾向の影と云ふものは少しも認められなかつた。

◎「破戒」は氏の上京第一の献げ物であつた。一味の人々は、其の煩悶描寫史と云ふ廉を以て、ドストウエスキーの「罪と罰」を粉本としたと云つた、比較される者こそ好い因果た、單に心理描寫報告と云ふならば、必ずしも「罪と罰」を引出さずともの事では無い乎、第一兩者は煩悶の根抵が違ふ、社會に對する階級の苦闘は、罪惡に關する個人の悔恨懊惱とは、其質に於て殆んと比べ者にならぬ。「罪と罰」のラスコルニコフは、斯の如き境遇、斯の如き病的人物、斯の如き壓迫、聖彼得堡の如き大市にある、露國人にあつて始めて出來る悲劇である。「破戒」の如き「動き」のあるものとは全く違ふ。若し「破戒」が「罪と罰」に似たものがあらば、夫れは自然派的であり乍ら、割合に兩者ともに、ローマンチックで、脚色を弄し過ぎた處不自然で、都合の好過ぎる處にある、更に一つは、其の社會的心理的小說たる處にある。

◎其後、長篇の「春」が出たが、本になつてから見やうと思つて見なかつた。象徵的の作物には「黄昏」と、「壁」を見た。「黄昏」は此意味から見て最もまとまつた、

好い作物として今でも頭に殘つて居る。
◎氏の「破戒」には、「罪と罰」其他ド氏の作物に見えるやうな、震慄的の分子が少しも無い如く、藤村氏の他の作物は凡ての書き振りが印象的である爲にや依らう深刻と云ふ分子が餘り見えぬ、あらゆる背景其他が、ふつくりと現はれてる中に、人間の性格と色彩だけは、何れを取つても能く現はれて居らぬ。輪廓、印象が至て朦朧である作物に人間の性格が沒却されて居るのは香りて食へる食物が、香を失つたやうなもので、どうも感興が索然とする。
◎社會の一員としての氏は、肉體も健全なり、意志も堅固なり社會に常識のある紳士である聰明で廣く研究して、何事をも解釋し得る氏の頭腦は、如何なる世紀末の思潮にも同情し得るが、凡てに常識の行亘つてる氏は、自から或る思潮或る傾向に沒入し得る事は出來ぬ。之が秋聲、白鳥氏などゝ違ふ所で、「黃昏」のやうな作物にても、猶ほ高い處から見下す作者の態度は明に認められる、即ち氏は如何なる時にも、客觀的に、眺めて離れて、醒めて書いて居る人である。之が氏の作物の印象の、至つて稀薄な理由ともなる。概して氏の作物には詩人時代と違つて、人を惹き付けるやうな、勁烈な感象のあるものは無い。
◎批評家ヘルラーは獨のズーデルマンと、ハウプトマンを並べて、一を男性的、一を女性的と名づけた。氏は傳習を無視するが、然ればとて之と衝突し、反抗する勇氣は無い、何處までも之を現實に接觸せずに、對象として眺めて置くと云ふ風である。も一つは技巧は如何にも伸び切つて、なだらかで、細かであるが、どうも緊張した處が無い、寧ろ諄過ぎる。夫れや之れやで、全體の調子も、描寫も極めて弱い、內輪であつて奔放で無い、此點に於て氏は女性的である、即ち作物を掩ふ印象は「黃昏」の色である、寂しい、弱々しい夕ぐれの微光である然し何と云へぬ胸をそゝのかすやうな、冥想の底に誘ふやうな光と權威はある。
◎氏の作物は、餘程明るい場面のあるものでも、必ず一部の暗い分子を忘れて居らぬ、思ひ切つて風葉氏のや

うに晴々しく無い、之は信州のやうな山國に能くある空氣、又た外光である此點に於て海岸と山國との相違はあるが、ビヨルンソンの作物を通ずる空氣に能く似て居る其暗い落著いた、しつとりした調子が、いかにもしみ〴〵と胸に響き。殊に「ルネ」などが思ひ出させる。

◎氏の作物の響きは弱い、山國――信州人たる「破戒」の主人公は、宜しく社會に反抗し、謀反する、一種の片意地を有つ、意味の人たるべきに關らず、むざ〳〵と社會の壓迫に屈して了ふなど、いかにも弱い人間になつて了つた、

◎氏の作物を輝かす最後の光の一線は、氏の態度のシンセリテーである、藝術家として耻かしからぬ、持重と苦心品位と研究を保存する爲には殆んと全力を盡すこと氏の如き作家は少ない。否、無い、氏の作物は悉く一作苟くもせざる努力と眞摯に基かざるもの一つとして無い、氏の作物は何時も眞劒勝負でする。一命を賭して書いて居る。

◎氏は詩人として、明治詩界に一時代を創始した創始者である。次には「破戒」を以て、世に未だ說かれなかつた自然主義の先驅を爲した先駈者である、氏は何時にも時代の卒先者、誘導者である、此の榮譽を占むべき人は、必ずや先づ夫れだけの努力と豫備を要とする、氏の如き眼の明らかな、素養ある、眞摯な、忠實な藝術家にして、始めて此の事が出來るであらう。氏が今日の藝術界にあつて、何時も他作家のグループに交ぜられず、超然として一種の地位に据り、たとひ何物を作らぬ時にも、何等かの大なる期待をせらるるによつても氏の重量は大方判ぜらるるであらう。

△島崎藤村氏

徳田秋江

島崎さんは、今の文人中にても、最も進歩を慕ふ人の一人であると信ずるから、私は殊更此處には當面の問題を論ずることを避けやうと思ふ。

氏の私に對するそも〳〵の第一印象は、忘れもせぬ

明治廿九年の、あれは確か若葉の薫床しい五月てあつたと覺えてゐる。私が其の少し以前から故郷にあつて購讀してゐた一文學界」の臨時增刊として發行された「うらわかぐさ」の中に物された「西花餘香」を讀んだ時てあつた。

何時かの本誌(中央公論)て田山花袋氏の事を言つた時にも、私は氏の「西花餘香」といつた隨筆て益を受けたと言つたが、此の「西花餘香」といふ言葉は、文學上に私を開發する上に淺からぬ因緣があると思はれる。私は、文學上て西洋の智識に渴した時代がある。今ても渴してゐる。さうして其の渴せしむる原因をなしたものは、實に嘘も飾もない、此の島崎氏の「西花餘香」の簡單なる隨筆てあつたと記憶する。

私は幼少の頃から、勿論文學は好きてあつたが意識して、自分は純文學が好きだなと悟つたのは其の二十八、九年頃からてあつた。廿八年の確か、秋、「文藝俱樂部」に出た故一葉女史の「にごり江」は私に新文藝に對する趣味の眼を覺し、島崎氏の其の「西花餘香」は私に西洋文學に對する愛慕の念を懷かしめた唯一最大の動機てあつたことを憶えてゐる。

私は其の頃でもまだ、自分は文學が好きだなとは知りつゝも、勉强して將來文學者にならうとは思はなかつから、同じ「うらわかぐさ」の中ても、さう大して興味を惹かぬものは、何度も反覆してまて讀みはしなかつたが、此の島崎氏の「西花餘香」と一葉女史の「あきあはせ」とは其の後も此の片々たる小冊子を取出しては幾度も〳〵讀んで見た。趣味の源泉といふものは斯ういふ次第て涵養される場合が多いやうに私は思ふ。「西花餘香」てはジョン。エヂングトン・サイモンヅの「以太利紀行」といふのが、何とも言へず私の心に觸れた。氏は先づ

——サイモンヅ以太利に遊びて以太利紀行を作る。かの「ローレル」の樹の高く「レモン」の樹の花さくといふところ、泰西の文士が以太利紀行を作るのあたゝかきは、わが國の俳人が松島紀行を作るのさびしきに似ず。

云々と言つて、一口芭蕉の「奥の細道」と比べてあつ

た。それから私の最も氣に入つたのは次の數節であつた。

――忘れがたきはサイモンヅの「秋の逍遙」なり。「秋の逍遙」は紀行中の一節。更に忘れがたきは逍遙して古城に遊ぶの一節なり。庭には「レモン」の樹、柘榴の樹の實もて枝もたわゝなるがあり。城壁に倚りて望めば山河の眺め一眸のうちに入る。ある秋の日の夕ぐれ、サイモンヅ友と共にこゝに來りて徘徊去るあたはず。しばらく城壁にもたれて風光を賞するうち、ふと其友の倚りかゝれる古壁に左の如く記しつけたるを見出しぬ。そのことば。われは眺め入りたり眺め入りつゝ運命のはげしさに泣きぬ。「I gaged, and gaging, wept the bitterness of fate.」讀む人は好古のサイモンヅ、ところは花深き以太利の古壁、記せしぬしを誰ぞと問ふによしなけれども、なさけあり涙あるはこの一語なり。知らずや。こゝろありて尋ねよれる以太利狂の旅人のみかは、朝夕こゝろなくこゝに來りて、われは眺め入りたり、眺め入りつゝ運命のはげしさに泣きぬと、古壁に倚りて涙を濺ぐ花のごとき君もあるべきを。

私は此の句を、さながら近松の「冥途の飛脚」の道行の條と同じやうに――勿論文品詩質は違ふが――愛誦した。愛誦しつゝ遙かに以太利の古跡を夢想し、羨ましきサイモンヅの旅を思ひ、また同時に島崎藤村氏の爲人を思ふた。

其の後段々私の幼稚な智識が開發されて行くに從つて、此のサイモンヅといふ名と、ルネッサンスといふ言葉と、島崎藤村といふ名と、此處には關係がないが高山樗牛といふ名と、が私には同じやうな聯想を生ぜしむるやうに思はれる。

私は前にも言つた通り、文學者にならうとは思はなかつたから、其れ程までに「うらわかくさ」などを愛讀したが、さりとて同じ藤村氏の新體詩などは、さう深入りして讀まうとはしなかつた。尤も「若菜集」なども出た時に買つて一寸讀みは讀んだ。

氏には今までに新體詩時代と現今の小說時代との二期が明瞭に區別されてある。で、此處で一寸其の前期のことを想つて見るに、固より私は詩の議論になつては全然門外漢であるけれど、大體から見渡した所器用に創新な所を所をと眼を着けて行く人である。狹い意味で作家の方を文壇の實行家とすれば氏は何時も實行家として着々と獨創の點を開拓して行く人である。

小説作家となつたのは、「舊主人」を始め「綠陰叢書」第二篇に輯められた諸篇の時代からであるが、愈々專門と決つたのは言ふまでもなく「破戒」からであつて、今更繰返す要もない。「破戒」は態度文致の上にむしろ新らしい點が發見せられる。

「春」は新聞掲載中は私は讀まなかつたから單行本で熟讀して見やうと樂んでゐる。

最近また「壁」と「收穫」との二短篇が出た。私が此の話を書いてゐる時は丁度「文章世界」の「收穫」を讀んだまゝの時であるから、「收穫」に就いては世評を耳にせぬが、「壁」に就いては既に世評を屢々耳にした。世評は概して惡くないやうである。乍併私は聊か無遠慮に世評に反對しやうと思ふ。先づ作家の姓名を聞いて第一に成心を設け、第二に其の作物の意を迎へて見たならば、昔時ある王子が、無用な蟲と思つてゐた蜘蛛の網に一身の危急を救はれて、始めて其の蟲の價値ある點を悟つたといふ寓意と同じやうに、如何なる物にてもそれ相應の價値は認められる。

藤村氏の「壁」を蜘蛛の網だといふのでは決してないが、先頃坪内逍遙氏が「國民新聞」で話された、作家の説明を待たなければ分らなかつたり。又それに就いて戸川秋骨氏の言はれたやうに、餘りに專門化して、專門家でも分らなかつたりするやうなのは何かと思ふ。其樣なに專門化したのを分らないと言つて放棄して置かないで力めて解するやうにするのが文學の徒たるものの努力であるといふ説もあらんかなれども、それも物によりけりだと思ふ。

之れは必ずしも藤村氏の作に就いていふのではないが眞個に成熟した作に就いて解しやう／＼と努力するのは努力であるが、さうでないものに對して解しやう／＼とするのは、恰も轉々煩悶して名吟に得るに苦み妻君に笑はれたといふ譬へと同じく傍で見てゐて多少滑稽の感がある。批評家は作家の聲名に自分を捲き込まれぬ用心が肝要である。（十月十五日）

△水彩畫家

青果生

嘗て雜誌趣味が余に好む小說を尋ねた時、過去に最も愛讀せる作品として、藤村氏の水彩畫家を擧げた。その後、某君、某君、破戒を云はず老孃を云はず、並木黃昏を云はずして、特に水彩畫家を云ふのを怪しみて、その所以を僕に尋ねた事がある。趣味には名を擧げたばかりで、その所以は一言も書いてなかつたのだ。

水彩畫家は僕に取つて最も紀念多き作品である。今回僕の出京當時、（と云つても明治三十七年）放浪の極、雜司ヶ谷の友人の家に食客して居た年の正月に新小說に出た。その當時の僕には二十幾錢を雜誌に投ずる事の出來ぬほど窮迫の絕頂時であつた。每朝一錢のネギを高田の町まで買ひにやられた頃だ。家人の不在を見濟しては公同墓地の欅の木に寐轉んで五頁七頁と讀んだ。そして終には日の暮れるのも知らずに讀耽つて家の人にケンツクを喰つた事すらある。

僕を斯うまで引付けて了つた理由は、作品の價値は別としても、あの事件と丁度同じやうな葛籐が僕の親戚の間に起つたためてある。傳吾の母は僕の母、女音樂家は僕の知人、僕は無論傳吾派の同情家なのであつた。それに不思議な暗合は、あの作中にある龜一と云ふ書生てある。僕が嘗て田舍の私立學校の敎師をして居る頃、引取つてその後ズウッと世話して居た青年があるその青年はあの作中にある通り氣の軟かな、沈鬱な思遣りの深い青年で、僕が無茶な事をするたび喰付き廻つて泣いて居た。その青年の名も同じく龜一である、そんなこんなの譯合からして、僕は水彩畫家を讀む度に泣かされる。

それに、その當時としては書き方の淸新にして簡潔、透明にして詩趣の溢るゝのに驚かされた。硯友社張りのコッテリ細工に倦き果てゝ居た僕は、四も五も無く藤村氏の書方にチャームされて了つた。

最一つ、僕等が未だ中學に腕白を働いて居る頃、藤村氏は東北學院の敎授として來て居られた。その下宿

して居た家は平田屋と云ふ宿屋て、僕が育つた祖母の家とは二丁位しか離れて居ぬ。そこの婆が好く僕の家に來て、『島崎さんと云ふ學者』の噂を聞かされたものだ。この婆さんは今でも活きて居る、昨年歸省の時も遇つた。相變らず『島崎さんと云ふ學者』の話をして居た。この關係も水彩畫家と自分を結び付けた。

その後、紅綠氏の家に食客してからは、同氏の枕元て頼まれもせぬのにこの水彩畫家を繰返し〱讀んで大に紅綠氏に叱られた事がある。

物故せるパウルゼン教授

片山孤村

本年八月ドイツの碩學パウルゼン教授が六十二歳を以て遽焉易簀せしとは、猶ほ世人の記憶に新なる所てある。余は茲に我が國に於て最も多くの讀者を有する哲學者の一人なる此碩學に就いて聊か物語りたいと思ふ。余は哲學の專門研究者では無いが、この人の重なる著書の一二は數年前拾ひ讀をしたとも有るし、殊に今春本誌に於て同教授の論文「父子」を「パウルゼン教授と自然主義」と題してした紹介した因緣も有るので、自から進んでこの事をなすに至つた次第である。材料は乏しいながら二三の書籍雜誌などから採つたと云ふとを始めに斷つて置く。

一

フリードリヒ・パウルゼンは一八四六年七月十六日、ドイツの西北隅なるシュレスヰヒのランゲンホルンに生れ、エルランゲン及ベルリンの諸大學に遊び、一八七五年廿九歲にしてベルリン大學の講師となり、一八七八年助教授に任ぜられ、一八九六年以來同大學哲學科エドウアルト・ツエルレル(昨年亦不歸の客となつた)の講座に於ける正教授として、ドイツ第一流の碩學たる榮名を負うてゐた。

パウルゼンは夙に居をベルリン市外のシュテークリ

ッにトした。邸宅は幽邃な庭園の奥に隱れた住み心地の好ささうな別莊（ラントハウス）、周圍は至極閑靜で學問の研究には倔强な場所である。パウルゼンはこの浮世離れのした別天地で唯書齋に籠つてゐたばかりでは無く、時には疲れた腦を休養する爲に、家內で實用的な仕事をしたり、戶外にいてては庭樹いぢりや畑いぢりをして樂みとしてゐた。元來强壯な人であつたが、殊に戶外の勞働のために、顏は日に焦けて稍黑く、手は發達して筋骨逞しく一見田園生活の人たることを思はしめた。又眼は朗かにして柔和に、頭は雪を載きはじめた許りであつたと云ふ。

パウルゼンが田園生活を好んだのは單に好奇心からでは無く、この性癖は實に其血の中に根ざしてゐたのである。即ち彼れは田舍に生れ、田舍に育ち、田舍の學校で最初の敎育を受けた。自から記して曰く（「敎育所としての田園及村費」）「余は七八歲の頃から年々我が家の農事に携はつた。田も耡けば草も取り、枯草や穀物の收穫にも出た。大八車に枯草や穀物を手際よく積載せたと、七月の日永に朝から晩まで遠方の牧場で草を刈つたり、乾したりしたとは幾度あるか分らない。



パウルゼン

余の回想に於ては余が生涯中此時代ほど樂しかつた時はない。その外庭園では草木を植ゑたり、水を灌けたりするなど、色々の仕事があつた。又時々は人々と共に麵包を燒いたり、食物を煮たり、牛馬に飼料をやつたり、水をのませたりしなければ成らなかつた。之を要するに少年時代の余は人類のあらゆる種類の勞働に習熟したのである。又一年に二三度大工や左官が遣つて來る、仕立屋が弟子を伴れて來て大机の上で二三日働くとがある。靴屋へも折々用事が出來る。鍛治屋へ行くとは、親爺が面白

い男であつたので、大變好きであつた、冬になると友達と夜學校からの歸りがけに、鐵碪(かなしき)から飛び出る火花が魔法の光のやうに、暗い仕事場を照らすのを見ては、素通りは中々むづかしい、必ず一寸立寄つて炭火で手を焙らずには居られなかつた。

玩具も自分で造つた。この哲學者の卵は菩提樹の材木と封蠟とインキで象棋を作つた。簡單な地圖と、すだ〱に讀み破つた「ロビンソン」と、家藏の聖書と讃美歌集とはこの少年の最初の藏書であつた。學校で槓杆と天秤の話をきいて歸り、手製の裝置(しかけ)で實驗をして見たこともある。その時天秤は栗の殼と豌豆とで作つた。又曲注管(サイフオン)を作らうと想つたが、ゴムの管も硝子管も小供の手には入らぬので、蒲公英の莖を曲げて代用したことも有つた。

斯くの如き村童が後年に至り世界有數の大學者とならうとは誰しも夢想だもしなかつた所であらう。併しパウルゼンが幼時より間斷なく自然と觸接したことは、その學風に深く且つ大なる影響を及ぼした。それは外では無い、パウルゼンの學風が實着で空理に流れず、最高の學理を講じつゝ現實の人生を忘れないのは、皆幼時よりの田園生活の賜物である。

パウルセンの故郷をシユレスヰヒと聞けば、吾人は同時に其隣國なるホルシユタインを聯想する、ホルシユタインは余が愛讀する小說「イエルン・ウール」の詩人グスターフ・フレンセンの生地である。此地方の人種はフリーゼン及ザクセン人である。フレンセンは「イエルン・ウール」に於て(第一七五頁其他)この人種を呼んで「冥想的種族」と云ひ、又「此國の人種は特に哲學と數學の才能に長けてゐる」と云ひ、學問に對する熱烈なる渴望を有する青年が、父のために强ひられて隴畝の間に勞役を事としてゐたが、その志望のかなはざる爲め、終ひに發狂して夭折すると云ふ哀れな物語を載せてゐる。談が枝葉に涉るから茲には詳くはのべぬ。而してフリードリヒ・パウルゼンは實にフリーゼン種族の血を享けてゐる。哲學者となつたのも誠に故なきに非ずである。又吾人は彼れが村童時代にはフレンセンが詩中の

ものかと思へば、かのやゝ陰鬱なる大空を背景とせる北國の村落と、鄙びてはゐるが利巧さうなパウルゼンの稚姿が歴々(ありありく)と眼前に浮び出るやうな心地がする。

二

次ぎにパウルゼンの講義振に就いて話して見やう。パウルゼンの講義は簡易平明にして而も實質に富み、眞に講義の體製を得て居たと云はれてゐる。換言すれば、パウルゼンの講義には書物を教へたり、書物を筆記させるやうな、惡しき意味に於ける學究臭味は無く、聽衆を刺激して自から講義の題目に精通するを努めしめる爲めに、唯重要なる着眼點を授けるばかりてある。講說は大河の洋々として流るゝが如く、何等聽衆の耳目を聳動するが如き急湍も無ければ深淵も無い。唯時々小さいけれども鋭い警句が出て暗室中の火花の如くに其敍述を照らし、聽衆が數十語をきいてもなほ解するとの出來なかつた意味を電光石火の間に會得せしめる。これがパウルゼンの講義に於ける一種人を魅するの秘密なる力の一つである。又講義中には人をからかふやうな諷刺(イロニー)なる藥味の雜つた溫厚寬和の情が教授の身邊より溢れ來つて、聽衆に快い溫い感じを與へる、固より人望ある教授のとてあるから、講堂は開かれると二三分間に立錐の地もなくなる。聽衆の中には男學生も、女學生も、花羞かしき乙女も、お婆さんも、老紳士もゐる。インキ壺の蓋を取り、雜記帳(ノート)を開いて待つてゐると、始業時間後五分にして教授の姿が見える。急いて講壇に登りて姿勢を正し、北國訛のとれない低い聲て何か言ひはじめて、巧みに聽衆の注意を集中せしめる。パウルゼンの辯舌には稍冗長に流れる缺點がある。この文章(ザッツ)を長引かせる癖に慣れない人は、聞きづらく思ふとも有らう。パウルゼンは講義中屢所謂「解り切つた事」をいふとがある。之は大學の主要任務は確實なる基礎(エレメンテ)を作ると。哲學の原理に手引するとてあると云ふパウルゼンの教育上の意見から來るのである。聽講者の中には後にその教育者たるパウルゼンを凌駕する程の學者になるものも居るだらう。併しこの人たちも始めから高遠なる學理を授けられたらんよりも、

寧ろ高遠なる學理に攀ぢ登るべき確實安全なる階梯を得たとの難有味が後に至つて始めて解るだらう。

三

講壇の人として人望のあつたパウルゼンは、亦文章家として更に多數の愛讀者をもつてゐた。彼れは實にドイツ現代の第一流の記者（ジユールナリスト）である。社會に何か喧ましい問題が起ると、かの愛讀者等は、パウルゼン教授も亦筆を執つて、その雄勁質實にして而も彫琢を經たる論文（エッセイ）に於て、愼密穩健、情理並び到れる意見を發表せんことを期待してゐた。筆の人としてはパウルゼンは高等教育制度、大學教育及行政に關して多大の貢献をなした許りでなく、學校に於ける宗教科、政治と道德との關係、國會政治の衰微、文學詩歌等殆んど有らゆる方面に涉つてその健筆を揮つた。

パウルゼンの著書の重なるものを擧げると、

「哲學序論」　十六版

「倫理學系統」　八版

「イムマヌエル・カントの傳記及學說」

「フイロソフイア・ミリタンス」論文集

「ショーペンハウエル、ハムレット、メフィストー、一名厭世主義の自然史」

「ドイツの諸大學及大學に於ける學問の研究」

「倫理學及政治上の論文」

「ドイツに於ける教育制度の歷史的發展」

論其他文及二三の著書もある。此等の論文著書にあらはれたるパウルゼンの學說については、別に適任者が有らうと思ふから、今回はこれ丈けて筆を擱く。

（完）

包圍されたる伊藤公（下）

黑頭巾

其一

●公伊藤は趣味の人也。而して公が漸く老ひて、克己の力、衰ふるに及びては、公の趣味は、公の缺陷となり了せり。

●而して、公は、公の趣味を滿足せしむべき幇間者流に依つて、包圍されつゝある也。

●公は酒を飲み、煙草を吸かし、美人を好む。書畵骨董、聲樂よりして、芝居、落語圍碁及びあらゆるゲーム、すべてこれを愛好せざる莫き也。

●公の趣味は廣博無邊なり。然れども、必ずしも藝術に對する深厚なる同情あるには非ず。

●公は書を好み、書に於ては、恐らくは、近世、政事家に匹敵無かるべし。

●殊に公が、近年の造詣に至つては實に驚く可し。其の豐滿にして、崇嚴なる筆態、天晴見事といふの外あらず。

●公山縣の小田原に新築せる別莊の、坐敷に掲げたる扁額、古稀庵、爲山縣老兄囑といふ筆蹟は、就中、公にありても稀有の傑作也。

●蓋し相手は公山縣也。公伊藤たる者、滿身の力を揮はずんばあらざるべき也。

●然れども、公の書は、又能く公の浮氣を表現し、驚く可き傑作あると共に、又た驚く可き不出來もこれある也。

●兎に角、公は、書の外の藝術に就ては、いづれにも趣味を有すれども、孰れに對しても凝り固まりたるものあらず。

●骨董、盆栽、飼鳥など面倒臭きものに對しては、公は、好きなれども、手を下すには冷淡也。蓋し公は所謂、物草太郎也。怠惰性、無性漢たる也。

●されば公は、詩、碁に各々宗匠を抱へてみて、つねに、之れを作へども、立入つて面倒見てやるにもあらず。

●公は、詩人、碁伯をば、投遣りにして、養ひ置く。恰も鷄を園中に養ふが如き也。

●雁金準一も亦た嘗て彼の師匠たり。其後、彼、他の青年を勸めて、己の後任とす。

●然れども、木偶と爲り畢りて、彼の玩弄に供せらるゝは、年壯氣鋭の碁伯の甘んじ得る處に非ず。彼は遂に辭し去れり。

●聞說、靑年碁打の彼の邸にありて、內師匠たるや、月俸三十五圓を支給せらる。

●三十五圓の手當は、身の廻り、小遣に費されて、剩す處無し。其の收入は、公に伺候する實業家或は政客の提供する、「袖の下」たらずんばあらず。

●公伊藤は、所謂碁淫なる者也。十面廿面、未だ倦むを知らざるの人たる也。

●公が碁盤に向つて興に乘ずるのときは、來客の何人たるを問はず。殆んど無制限に應接室に待たしむ。或は其の席に列するを得るも、心ならざるに、幾面となく、拜觀の榮を餘儀無くす。

●實業家、政客は、かくまで暢氣なるを得ざることあり。此際、密かに碁伯に「袖の下」を贈りて、巧みに局面を操縱し、公をして手を收めて、要談を聽かしむるに至る也。

其二

●公伊藤は碁淫たり。碁狂たるを失はず。公は、つねに、碁打によつて包圍せらる。

●公を包圍するの幇間は、屢、碁打となりて現はる。

●公は殆んど極端に碁を好むと雖も、之を伯大隈などに比すれば、固より數段の下にあり。公は笊の笊なる者也。

●伯大隈は、初段に二目位の實力あるべし。公山縣は公伊藤より弱く、侯井上は更に弱し。

●碁は、人格を表現す。伯大隈の碁は、智略に富み、低く張りて、緣を這ふ方にして、勝つと雖、位高からず。

●公伊藤の碁は、笊だけに、頗る早し。或は公は、一時間平均四面を打つといふものあれども、そは酷評也。唯だ公や格別の早碁たるを失はず。

●公の碁は、全面に涉りて、兎も角も崇大なる作戰計畫あり。其の蹉跌するに當ては、中押負たるを失はざれども、其の作戰の適中するに及んでは、大陸の平原に六軍を行るが如く堂々たり。而して公は喜色滿面に溢る。

●公が猶ほ小田原の滄浪閣にありしときの事也。嗣子

博邦。小宮三保松等と碁を打つに、公、來りて助言して已まず。

●青年者、大に乃爺の干渉を厭ひ、去つて玄關脇の書生部屋に入りて盤に對す。謂ふ、迚も公の來る氣遣ある無しと。

●豈計らんや、公は青年の行衛を物色して、書生部屋にも入り來り、手を鳴らして煙草を取寄せ、悠然として坐り込む。

●公の助言は、必ずしも一方に偏すに非ず。白を呼び黒を動かし、全面に干渉し、遂に公一人にして、白、黒の遣ひ分けを爲すに至らずんば已まず。

其 三

●公が、故侯西郷従道と共に渡韓せしとき、船、横濱を發するに先だち、公は富貴樓上にありて、碁盤に對して夢中也。

●見れば公は玉の汗を吹き／＼打つ。曰く、發熱今まさに三十八度六分也と。

●公の病は眞實也。公の健强無比なる此の熱を推して尙ほ渡韓の途に上る。

●公は當年、健康に對して、極めて、自信の厚かりし也。只だそれほどの熱を推しての圍碁は物數奇といふも愚か也。

●公の熱を推して、碁を打つは、恰も小兒が微恙を排して獨樂を舞はすが如し。公は小兒の如き人也。

●當時公の相手たりしは畫家、山本芳翠也。芳翠は公の幇間也。公曰く、『待テ待テ』芳翠悠々として曰く、『殿樣碁は厭よ、』パチリ。『殿樣碁はイヤよ』パチリ。パチリ。

●芳翠は畫才よりも俗才あり。彼は美髯一尺に餘りて、白髮々たり。極めて器用なる男也。

●彼も亦た一箇の流行兒たるを失はず。彼が、歸朝後幾くも無くして、油畫を以て岩崎彌太郎の肖像を畫きしに、彌太郎これに千圓を贈る。

●當時にありて、千圓の畫料は破天荒也。芳翠、有頂天に上り、俄かに馬車を傭ふて東京市中を、廻はす。

●芳翠は、つねに幇間として公伊藤に伴隨せり。箱根

環翠樓の隠居老人も亦た公が快心の相手たりし也。

●玉の湯の環翠樓の老人は、舊藩士にして、稍政治思想あり。公つねに曰く、『彼、生意氣に、政治論を遣るには困る』

●蓋し、公が箱根に至る毎に、直ちに老人の安否を問ひ、健在なれば、即刻隠宅より拉し來らしむ。

●而して老人の盤面に對するや、戰まさに酣にして、石を指間に挾みながら、まさに下さんとして言ふ『閣下は國家の棟梁也。今の時、酒を飲み碁を打つべきに非ず』

●老人は、かく言つては一石を下し、下しては、また言ふ、殆んど口癖の如く然り。點燈後、老眼朦朧となるに及んで即ち辭し去る。

●原善三郎の番頭某、亦嘗て、碁を以て公に知らる。

●公は此男を相手として、一日、午後四時頃より始め、調子に乘りて、勿驚、三十二番を打ち畢りて、夜は明け、翌日の紅暾、此の大政事家の面上を照らし來る。

●此の如きは、公が如何に碁淫なるをやを徴するに足る也。

其四

●公が趣味の人たるは、寧ろ大政事家として人格をして更に貴からしむるもの、吾輩は、公が趣味の、老ゐて衰へざるを喜ぶ。

●然れども、公が老ゐて、趣味、其の德を累するに至つては、公の爲に遺憾なき能はず。

●公は趣味の博きが爲に、老來、包圍の緊密、幾重を加へつゝある也。

●當年、公の嗣子博邦、馬關にありて、負傷するや公急行して其の病を見舞ふ。

●然れども公は、旅館にありて、爲すことあるに非ず。日々、無聊に堪えず。命じて些の緣邊ある者は、屬吏、書記の微と雖も呼び來りて、碁の相手たらしむ。

●青年者流も、公の横好きに敵せずして、概ね旗を捲きて奔る。

●後には、護衛の巡査を呼び上げてお相手を勸めしむ。碁を知らざるの査公は護衛に適せずとせらる。

●而して彼等、二面位、打ち畢れば、則ち腰の痛むに堪えずして引き下がらんことを請ふ。

●蓋し査公等の愚直なる、制服の儘、嚴しく畏り、恭しく前に屈して、局に對するが故に、腰の疲るゝこと非常にして、壯者と雖も、數面を重ぬるを得ざる也。

●其頃は、公は、濫打すると共に、氣力も亦た旺盛、萬事に拔け目無く立廻り、周公が三たび哺を吐き、王莽が謙恭士に下るの慨無くんばあらざりき。

●此の時にありては、趣味は、公の利器たりし也。公の羽翼たりし也。

●趣味は、公の光を增し、公の行動をして味あらしめき。公をして床かしき人たらしめき。

●公が內務大臣たりしとき、沼津、三島地方に來りしことあり。當時、靜岡縣の內、駿河と伊豆と、頗ゝ地方的感情を異にするの時也。

●公は旅中の疲勞をも厭はず、直ちに車を驅りて柏木忠俊の墓を弔ひ、一詩を賦して歸り來る。

●柏木は故江川英龍の名臣にして、明治以後、韮山縣介たり。其墓を掃ふは、其地方に敬意を表する所以、公の詩、巧ならざりしといへども、亦以て、一時民心を動かすに足らずんばあらず。

●他日の公伊藤は、又た當時の精悍勤勉の風あること無し。右のものを左にも動かさざるに至つて、老境愈深し。

●當時、公が快心の友に故上野景範あり。森有禮。鮫島尚芳と、併せて薩藩の三才子の目あり。三人今や皆故人也。

●若し上野をして數年の壽あらしめば、彼は外務大臣となる可かりし也。而して彼は、翩々として、公伊藤と相提携して交際場裏に出入す可かりし也。

●上野が歐洲に公使として駐劄するに當り、つねに、極上等の三味線を携へき。蓋し公伊藤の贈る處といふ。

●上野は公と風流韻事の友たる也。而して、公が上野を思ふて、つねに忘れざるの情は、機微の際にもあらはれき。

●廿五六年前の事也。一日。上野の愛兒景明、尚ほ十

二三才、下婢を隨へ、徒步して、麻布の三ノ橋を過ぐ。

●忽ち前方より、傳呼、聲急にして馬車を驅り來るの大臣あり。査公は人力車にて、其の後方に隨ふ。上野の小兒を見て、忽ち馬車は留まる。

●車中より出る者は、公伊藤也。曰く、『君は上野の兒か。お父さん、病狀、今日、歐洲より來電あるや如何』

●十二三歲の景明、僅かに、貴客の公伊藤なるを辨ず。今に至つて、當時の音容を髣髴として忘るゝ能はずといふ。

●公の壯年は、此の如き態度あり。彼は、馬車急馳の途上にも、薄覺の小兒を見遁すことを爲さゞりし也。

●老後の公は、又た此の情味ある態度ある無し。公は頻りに人を忘る。而して、性來の趣味、徒らに痼疾を爲せり。

●此の如くにして、趣味は公の缺陷を爲せり。而して包圍軍は、此の缺陷よりして、公を蠶食しつゝある也。

其五

●吾輩は、公伊藤の消息を聞く每に、公の衰へたるを悲む。

●公や、公山縣、伯大隈より若きこと三歲。井上。松方兩侯より若きこと實に六歲。公や未だ老ゐたりといふを得ず。而して公の大に衰へたるは何ぞや。

●公の衰へたるは、眞に、其の不節制、不謹愼及び誇大病より來るものならずんばあらず。

●久しい哉、公の驕れるや。公の驕れるは、則ち衰ふる所以ならずんばあらざる也。

●聞說。公の統監府にあるや、午餐後、一回、短き晝寢を爲し。晩餐後に至つて、再び十時頃迄、宵睡を爲し。それより起き來りて、一時過頃迄、或は、碁を打つ。

●京城にありて、つねに、公の碁友を勸むるは、少將村田惇也。東京に歸朝する間は、秘書官古谷久綱奉仕す。

●京城は、酒と煙草と極めて廉也。葉卷を吹かし、舶來の葡萄酒を飲む者、非常に多し。而して其の巨擘は勿論公なり。

◉客嘗て、男岩崎久彌を訪ふ者あり。葉卷を取出し、火を點ぜんとす。見れば、久彌は、朝日を吸ひつゝあり。客、大に耻ぢて、遂に葉卷を吸ふを得ずして去る。

◉若し男岩崎久彌をして、毎日、朝日一袋づゝを吸ふに留まるとせば、日本一の豪富の一個月の煙草代は、公伊藤が葉卷の一本に若かざる也。

◉公が酒道樂たり、煙草道樂たり、而して女道樂たり、天下の大道樂者たるは、毫も東洋に於ける大政治家としての、公の德を累はすことあらざる也。

◉然りと雖も、公は道樂に過ぎて、不謹愼、不節制に陷り、以て計らざる失敗を招ぐに至つては、即ち大に公を責めずんばあらず。

◉若し公にして、謹愼、節制するに非ずんば、或は、公を彈劾する有力者、識者に依つて包圍さるゝに至るあらんことを、吾輩は恐るゝ也。

其六

◉公は對外軟の傾向あるは事實也。徒らに恐露病を以て公を譏るは、酷に失するものなるべし。

◉公は、維新當初萬事大混雜の時より外交の局に當り、つねに外人に突き込まれたる、苦るしき經驗を甞め盡したれば、三歲兒の魂を百歲までも持して、日本の國力發展の後に至つても、公は、實に外人を恐るゝの習性となりて脫却する能はず。

◉公は、外交家として、尤も外國の實情に通ずるに相違なし。然れども、公は、對外軟の大政治家たるを失はず。

◉統監としての失敗の大なるものは、間島事件たらずんばあらず。

◉間島は半島の生命也。間島無くんば、半島護る可らず。間島を失ふは、恰も保障を捨て、雨戶を外づすが如し。臥榻の危險言ふ可らず。

◉公は自ら間島を見ず。公の大官、若くは祕書官と雖も、一たびも、間島に入らず。

◉間島駐劄の兵士は、勢寡にして、多數の支那人を壓して、韓民守護の責を全くするに苦めり。而して百方懇請するも、公は、兵員を增遣せざる也。

◉若し歐洲人ならしめば、其の將校は、必らず統監の失政を、本國の新聞に通信すべく、其の兵士は自暴自棄せん。

◉聞說、間島にある支那人、實に跳梁を極む。多數の兵士は、良民に粉して入り來り、暴慢無狀。大道に橫はり、橋上に臥して、日本人の進行を妨ぐるに至る。

◉日本の兵士は大和魂ある者也。長官の命を畏み、涙を吞んで平和の血戰に從事しつゝあり。

◉間島の官民、心ある者、兵士を憐み、切齒扼腕せざるはあらず。然れども、統監は位高くして、其の實情を知らず。

◉公伊藤は、輓近益、短氣に、肝癪の急を加ふ。短氣、肝癪は、驕慢より來る。克己力の消耗より來る。克己力の消耗は公の老衰を意味するに非ずして何んぞや。

◉公が餘りに短氣なるが爲に、統監府の大官は、公に對して諫爭し得る者あらず。

◉最近に在りては、鶴原も、木内も、公の前には木偶也。諫爭するも、漫に霹靂を贏ち得るに過ぎざるを以て、敢て言はず。

◉此の如くして、公は、唯々諾々、唯だ公の崇大なる理想論を敬聽する、日韓の官人原に由つて包圍されつゝある也。

其七

◉公伊藤の統監府にあるや、毎週、韓國の大臣會議を開催す。集まる者、李完用以下、韓人の大臣、日本人の次官、統監府の大官、秘書官參列す。

◉李完用、宋秉畯、趙重應等は、巧みに日本語を操つるも、其の他は一切解せず、日本の大官も亦た韓語を知らず。國分象太郎此間に立ち、極めて流暢に、日韓の通譯を爲す。

◉されば、如何なる場合にも、熱烈にして痛快なる調子は、此の議會に見るを得ず。笑ふも通譯、怒るも通譯也。

◉此の尨大にして、ダラシ無き內閣會議は、世界無比也。而して公は、副統監を從へて、之を主裁し、指導しつゝある也、

●侯井上の輿津に病むや、公伊藤、急遽之を見舞ひて看護に從事す。侯の大患中、すべて面會を禁ぜらる。公山縣、公大山と雖も、侯を見るを得ず。

●公伊藤は、獨り、醫師の禁令に頓着せず。つねに病室にありて周旋す。蓋し唯一の親友の病、憂慮措く能はざるにも由るものあるべし。

●而して公伊藤、此時、統監の正裝を着け、大勳位を佩用し、劍佩鏘々として、井上邸に出入す。秘書官亦た劍佩以て相隨ふ。

●公は大勳位、統監の制服を着けて、垂死の元老を看護したる也。

●公は燕遊間居も亦た統監大勳位の裝を爲す。統監大勳位は公の生命也。

●此の如くして、公は到底、統監を辭するの意ある可らず。公は、其の失政を自覺するの機あらずして、統監に終るならん。

其八

●光榮ある公伊藤の生涯も既に七十に垂んとす。天賦の強健を以てすと雖も、公は、最早や、克己、謹慎以て晩節を全くするを期せざる可らざるの時也。

●而して公は、不相變、醇酒美人、以て節制の德を失ひ、敢て晩節に志篤きを發見する能はず。

●大博延期を、逸早く、醉餘の放言に漏らして、新内閣に熱湯を呑ましめたるは、公伊藤也と傳へらる。

●而して其後、また、加藤高明の英國大使任命事件を逸早く、漏洩したるも亦た公也。

●公は、醉餘に、これを鶴原定吉に漏らし、鶴原によりて新聞に漏るゝに至る。

●言ふ者罪無く、罪は酒にありとはいへ、此の二回の漏洩、皆公が酒の爲也といふに至つては、吾輩、公の晩節の爲に、大遺憾無き能はず。

●此の如きは、公の酒、單に三面記事の種たるに留まらざる也。最早、公の人格問題とするも、公豈、一辭あるを得んや。

●一杯の酒の爲に、約束の秘密を守る能はずとせば、大政事家たる公伊藤は、斷じて酒を飲む可らず。

●此の如きは、吾輩唯だ公一人の爲に言ふにあらず。廣く政壇の爲に且つは後進靑年の爲に言ふ也。江湖の識者、亦た吾輩と感を同じくせん。

●公伊藤が猶ほ五十餘歳。酒色の爲に衰へず。書も讀み、有爲の氣力も旺盛なりしとき、早く既に晩節を云爲せり。

●公が二十九年、第三次の伊藤内閣を退きしとき、滄浪閣に歸臥して詩あり。

万里風煙獨倚レ欄。滄浪一閣對二蒼巒一。歸レ林倦鳥先收レ翼、逢レ雨寒花猶帶レ丹。世路狂波追二鶴髮一。人間晩節託二漁竿一。休レ論宣室問二神鬼一。千古長沙涙未レ乾。

●近年の公の詩、得意豊滿、「望月の缺」ること無きもの計りにして、晩節恭遜の意徴見するものある無し。吾輩、公の爲に痛惜せずんばあらざる也。

●『人間晩節託二漁竿一』の句、大宰相、忠誠謹愨の人格を見る。其の口、公は、今、忘れたるよな。

●若し、公にして、今の醉餘放言の態度を改むること無く、克己節制以て晩節を守ること無くば、天下、忠良、謹愨の人物恐く起つて、公を攻擊し、包圍するに至らん。

●公知るや、此の包圍軍は、何よりも、尤も恐るべきものたらずんばあらざる也。

●公にして『晩節託二漁竿一』の志を忘れなば、公は薨じて國葬さるゝあらんとも、公の事業は簡冊に輝くあらんとも、公は長へに、大宰相、大人物たるを得ざる也。是豈、公の志ならんや。

●吾輩は、聰明絶世なる公伊藤が、三たび猛省して、其の晩節を以て、信を天下忠良の人物に取るあらんことを期待せずんばあらざる也。(完結)

新刊發賣

故國木田獨歩遺著

欺かざるの記 前篇

小杉未醒畫伯装畫
滿谷國四郎畫伯口繪

菊判紙數七百頁、箱入美本、定價金貳圓五拾錢

特價金貳圓

送料 内地 拾八錢
清韓臺灣樺太 四拾錢

期待せられたる『欺かざるの記』は出でたり本書は先生が唯一の遺著にしてその價値につきては已に世に定評あり茲に故人の意を體して洽く本書を讀者に頒たんがために特價を以て貴需に應ず部數期日に制限あり乞ふ速に申込まれよ

特價部數參千部

◎本年十一月十三日限り

發行所 東京市神田區富山町壹八 佐久良書房
東京市京橋區南鍋町二丁目 隆文館

前篇賣捌所 佐久良書房

大賣捌所
東京 北隆館 東海堂 東京堂 良明堂 太洋堂 上田屋 前川文榮閣 至誠堂
大阪 吉岡 寶文館 盛文館 杉本書店
京都 東枝書房
久留米 菊竹書店
名古屋 星野書店
新潟 川瀬書店 萬松堂
長岡 覺張書店 目黒書店
大連 大阪屋號

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告により御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

文學博士・藤岡作太郎校及著 ● 中村不折書
異本山家集 附西行論 定價金八十錢 郵稅八錢

文學士 小山内薫著 **夢見草** 定價三十錢 郵稅四錢

文學士 上田敏著 **海潮音** 定價金壹圓 郵稅八錢

横瀬夜雨著 **花守日記** 定價六十五錢 郵稅八錢

文學士 尾上柴舟著 **金帆** 定價四拾錢 郵稅四錢

蒲原有明著 **春鳥集** 定價七十錢 郵稅六錢

文學士 小原無絃著 **花の詩** 定價五十錢 郵稅六錢

與謝野晶子 山川とみ子 増田まさ子 著 **戀ごろも** 定價四十錢 郵稅四錢

與謝野鐵幹 同晶子 著 **毒草** 定價五十錢 郵稅六錢

文學士 佐藤芝峰 英獨對譯 **小倉百首評釋** 定價四十錢 郵稅六錢

文學士 久保天随著 **日本絕句選** 定價三十錢 郵稅四錢

小島烏水著 **烏水文集** 定價七十五錢 郵稅八錢

前田林外選 **日本民謡全集** 正續 各五十錢

訂 熊谷無漏編 **かふき俳句集** 定價三十五錢 郵稅六錢

發行所 東京本郷區東片町廿六 本郷書院 振替貯金口座一四九六一
賣捌 東京堂、上田屋、至誠堂、前川、東海堂、各書店

反省社編輯

空文年表

菊版約三百頁 紙質上等

定價金五拾錢 郵稅八錢

△本書と他の年表類—年號紀元の外には一切史上の事件を擧ることなく餘白として存したりこれ書入れを目的としたればなり

△本書の體裁——配列には特に意匠を凝して、短簡に且つ明瞭ならしめたり、又各年號に對して索引を設け、支那歷史中に於ける小覇王の年號は、別表として卷末に附したり

△本書と學者學生各自に年表の原本を作製するの勞力と時間を省略するを得べし

△本書と發行所—東京市本郷區駒込西片町十番地反省社の電話—は下谷九百十九番にして振替口座番號は三十四番なり

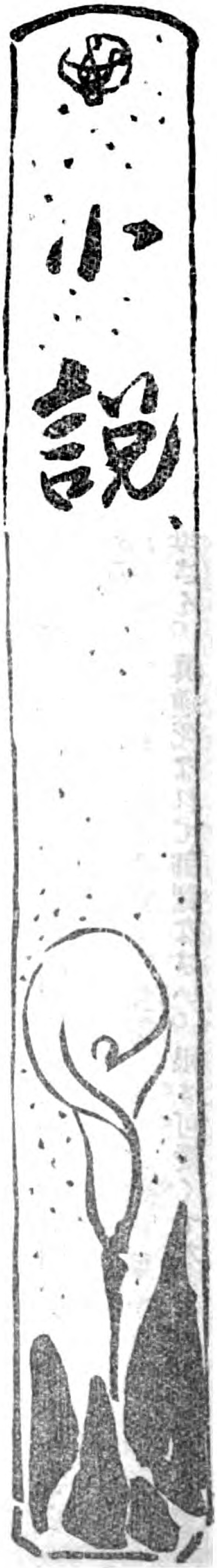
信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す


十二月一日より
十五日まで
祝月賣出し
餘興福引
最高百圓、以下數千點
オコーチャン
大丸呉服店
東京日本橋區
通旅籠町
電話浪花
八三三
六六三
六〇五

中央公論

新年號豫告

月と共に盛大となりつゝある我『中央公論』一年間の發展、實に斯界稀有の事實として同業者の皆驚嘆する處、吾人は此熱心なる江湖の眷遇に酬ゆる處なかるべからざるを信じ、今日より專ら材料の精選、編輯の改良に盡瘁し、來春正月を期して益々讀書界を驚倒さするの摸範的雜誌を發行せんとを期し、已に第一流の論客數名に懇願してたる堂々たる大論文寄稿の約を得、又人物評には現首相桂侯に對する各家各樣の批評を集錄し、而して小說には現代の最も有力なる作家たる小栗風葉、田山花袋、島崎藤村、正宗白鳥、四氏の苦心慘憺たる名作を掲載すべく諸家已に起稿に着手したれば其の題目及び內容の如き次號の誌上に公表し得べし。本號の世に出づるの日、如何に新春文壇の光彩を發揚すべきかは今日よりして讀者諸彥と共に吾人の樂しみ待つ所也。



爐傍

眞山青果

一

卓三が銀行から歸つて、羽織だけ着換ひに座敷へ入ると、うしろに妻のお初が跟いて來て、おきみ叔母さんが先刻から來て待つて居ると云ふ。「又御無心だらう。」と卓三は太い眉を妻に顰めた。

「何んですか、もう二時間も前から待つて被在います。」

「お前に何んとも云はないのか。」

「私なんかに、これまで一度だつて被仰つた事はありません。」と綿の厚い伊勢崎絣の平常羽織、手置ばかりて着られるのを後からフワリと掛けた。

「徳太郎が起きてるやうだ、早く寢かして了へ。」と大きな聲で妻に云付けて、卓三は羽織の紐を結びながら、白足袋のまゝ茶の間へ出て來る。

「そら、お父樣のお歸りだ。」とおきみ叔母は膝に遊ばせて居た徳太郎を下して、自分も坐勢を直した。更紗の座蒲團を些いと撒らせた。到來らしい赤飯を小皿に、お茶が出て居た。

「お待たせ申したさうですね。」と卓三は直ぐ搔繰つて來る小兒に片手を任かせながら、ムッとして爐傍へ坐つた。そして、「御免下さい。」と爐椽に深く胡坐を組んだ。白メリヤスの餘り新しくない股引であつた。

「實は今日折入つて御相談したいと思つて來たんですがね、何日も〳〵の事だから、さぞ貴方も煩さいだらうと思つて。」と叔母のおきみは卓三の顏色を窺ひながら途切れ〳〵に云出した。

「また潔の事ですか。あの先生の事なら最う眞平だ、私の手て行くんぢやない。」と妻の汲んで呉れる番茶を咽喉音高く飲みながら、不興氣な口振である。

「本當にあれの爲めには、私まて肩身が狹くなつて世間へ顏向けが出來ない。寧そ死んでゞもくれゝば私も安心が出來るんですけどもね。」と小裂の立つた太い指で、叔母は膝の上の塵を拈つて居た。年の割に髮の毛は黑いが、皺の深い骨だつた顏立て、若い時にした瀬戸の總入齒が、近頃メッキリと年寄らしく見せた。叔母は今年四拾八てある。

「そんな事を被仰いますけど、叔母さん。眞逆死なれて御覧なさい。根は可愛くてならないんだもの。」

と甥の妻は鼠入らずの前にカタコトと膳立しながら、叔母の顔を見て笑つた。

「いゝえ、本當に私は何んとも思ひません、今度と云ふ今度は、愛措もこそも竭き果てゝるんですから。」と、然も〳〵思上つたと云ふ樣子を見せた。

「何うでせうね。」と笑つて居る。

「全くですよ、初子さん、貴方達には私のこの心が見えないんですから。子となんか思ひません、敵ですよ。」と云つても相手に信ずる色のないのを見て、おきみはあれた掌を凝つと見詰めながら、遣瀬なげの溜息を吐くのであつた。

「おい、何うしたんだ。」俯向いて素知らぬ顔、火箸で爐の灰に手習ひして居た卓三は、膳を待ち兼ねて險しく云つた。

お初は臺所へ起つた。

「卓さん、毎々の事でさぞ煩さいでせうけれど、私は最う思案に餘つて相談に來たんです。今となつては何所へも話しするところがありませんしね。」

「だッて、大原の年寄まで引取つて世話してるッて事ぢやありませんか。」

「世話をすると云ふ程でもないですけど、あのお年をなすつて行端に迷つてお出なさるのを見ると氣の毒でしてね。眞逆に歸つて下さいとも云はれません。」とおきみは過をわびるやうな口振である。

「氣の毒なのア世間一列です。私共だつて斯うして夜夜中まで稼いで居るのは、自分の妻子を養ひたい

ばかりなんてすからな――まあ、御免なさい。」と下女が搬んで來た夜食膳を引寄せて、九谷燒の小さな猪口に先づ手酌の一杯を乾した。そして、さも不味いものでも飲んだやうに顏をしかめて、「おい、全るで水だ。」と臺所へ起つた妻に小言である。

「あら、お前お燗を見なかつたの。」とお初は下女をたしなめた。

「好うございますよ。私が直しますから。」とおきみは下女にまで愛措づくつて、德利を取つて爐の霰釜へつけた。

卓三は默つて何か考へて居たが、燗の好ひ加減を見計つて、手酌で四五杯、立續けに遣つた。ガラス德利に一合のおつもりが最う幾らも殘らない。今年三十二の、若い卓三の目瞼がホンノリと赤くなつた。背こそ低いが、乾とした男らしい顏に、口髭を短く刈込んであつた。

おきみは所在なさに、姊の子を膝へ呼ばうとして、些い〳〵と小さな足先を後から引張つたりして見たが、兒は父の膳に取亥いて離れない。物喰ふ父の口許を一心に見上げて居た。

卓三は一本を飲乾して、「お母さんにもう一本貰つて來い。」と空德利を渡した。

「お母さん、お酒。」今年四つになる德太郎は兩手に抱いて臺所へ驅込んだ。

「何んと云ふ可愛いんだろ。」とおきみは目皺を寄せて見送つた。

卓三も見て居た。

二

屋根にバラ〳〵と音して居た雨が、急に強くなつて、雨落にビシャ〳〵と降つて來た。お初と下女は汁鍋の蓋を取つたまゝ、慌てゝ乾物を取込みに出て行つた。

おきみは火の氣の薄い火鉢を前に、姉が話を切出すのを待つて居た。十月末の雨の夜、袷には耐える寒むさである。腰から下がゾク〳〵するやうだ。それに、未だ晩飯前の空腹な胃袋には、グツ〳〵と沸り立つ味噌汁の香が、強く鼻へ來る。おきみは羅宇に紙を卷いた煙管で幾服も〳〵煙草をふかした。その度吹殼を灰に埋めて、その灰をヒタ〳〵と平らにならして居る。

卓三はあら方炙きの一本も飲乾した。

「それで叔母さん、一體何うしろと云ふんです。まア伺ふだけは伺ひませう。」と酒に聲が餘程甲張つて來る。焚下しをドッサリ盛込んだ居爐裡に、裾をまくつて胡坐の膕をあたゝめた。

「私は所詮那奴と同居が出來ないから、貴方と相談した上田舍へでも引込もうかと思ひます。小學校の裁縫教師をしても活して行けない事は無いでせう。あれ一人の爲めに、小さい者が可哀さうでなりません。どんな辛棒てもするから兄さんと別になつてくれッて皆然う云ひます。見てやつて下さい、私の苦勞を見習つて、小さい者どもの顏付まで段々くまびて賤しくなつて行くやうです。」とおきみは薄汚れた双子袷の袖裏を出して鼻を拭いた。

「ぢや好いでせう、然う決めたらば。」と卓三は即座に事も無げである。

「えゝ。」と俯向ひて火を見詰めて居た。

「然うなさい、然うなさい。潔は所詮貴方の手で行く先生ぢやない。早く見限を付けた方も好いでせう。」と又新しく妻にねだつた一合を飲みながら、ジロ〳〵と叔母の顔を見て居た。

お初は德太郎を寢かしに、奧の座敷へ引込んだのである。

それには答へないで、おきみは、「あゝ、私は何んの因てこんな苦勞をするんだか、小さな小兒どもさへ無けりや、疾に何うかなるんだけれど。」と獨言のやうに溜息を吐いて居る。

醉ふた卓三には面白い言葉尻である。「疾に何うかなるね。何うなんだね、え、叔母さん。」と嘲るやうに笑つて突ッかゝる。

「何うなるものかね。最う〳〵二度と皆樣のお世話にならないやうになるだけさね。」と幾らか腹も立つて、叔母は大膽に云つて退けた。

「身でも投げるかね。」

「眞逆。」と憤つた。

「ぢや、その年をして最う一度お嫁にでもなる氣かね。」と卓三は腹を抱いて笑つた。

おきみ叔母は蒼削めた顏を怒らして、凝つと甥の顏を睨んで居た。目には涙が一杯溜つて、洋燈の灯がチラクラする。

おきみの良人は仙臺に名高い小學校の校長であつた。長い間肺病を疾つて居て、五年前、六人の兒を殘して死んだ。總領の息子がその潔である。今高等學校の醫科に通つて居る。おきみが遺産として良人

に殘されたものは、一町歩足らずの田地と、家屋敷と、遺族扶助料の三百圓とてあつた。で、その金を以つて町家の小さな古家を買ひ、門前の茄子畠を潰してそれを建てて、家族はそこに移り住んだ。本宅は他に貸してその家賃が活計のたそくとなつた。

おきみは何時も口癖に、何を云つても今は免狀の世の中である。男でも女でも免狀がなければ世は渡れぬと云つて、苦しい中から小兒どもを夫々の學校へ通はせた。潔が達つて繪書きを志望するのをも、無理に我を張つて醫科へ入學させた。妹の一人は高等女學校、一人は師範學校へ入れた、その下の三人は未だ小學校へ通つて居た。

潔は飽迄醫學校を嫌つた。一度は半度退學して亞米利加へ行くとて神戸まで逝出した。一度は東京へ出て或る西洋書家の弟子となつた。その度におきみは他を賴んで悴を無理に連戻し、理が非でも醫者にしなければならぬと我を張つた。親戚や知人が如何に說いても聞入れない。井戸へ飛込むの毒を飲むのと云つて騷ぎ廻つたのである。それこれの事て、田地も何時か他手に渡り、屋敷にも可也の借錢が出來た。期限〳〵の書換ひに證書面は段々高が上つて行くばかりだ。潔は最う棄鉢になつて、學校は怠け放題外に出ては芝居と酒とに暇を潰して居た。

卓三はおきみが兄の子である。外に泣付く所がないので、おきみは始終甥の卓三にばかり無心を云通してある。酒に氣は大きくなるが、職業に似合はず堅實な考を持つて居る男て、これまでも好く親戚どもの世話を見て來た。早稲田の經濟科を出ると直ぐ仙臺銀行の手代となつた。それより四年眞面目に勤

め上げて、今では銀行でも好い顔になつた。

おきみは急に歸支度をした。

寒うさうな顔をムッとして起ちかけた。

「叔母さん、最う歸るんですか。で、相談は何うしたんです。もう可いんですか。」と卓三は何んでも相手が欲しくなつた。

「お暇しませう。何時も〳〵面白くない話ばかり持つて來て申譯ありませんね。」と煙草入を帶にはさみながら厭味を云つて居る。

「ひどく憤つたね。で田舍行きは何うしたんだね。」

「まア好く獨りで考へて、その上での事にしませうよ。」

「はゝはゝゝゝ」と突然卓三は手を振つて笑出した。「ぢや何うです、當月はこれを上げます。これでまアその田舍行きなんて話は無い事になさい。ね、餘り人騒がせしない事さ、賴むぜ、叔母さん。」と獨りで陽氣になつて懐の紙入から新しい五圓紙幣を二枚疊の上に拈り出した。

おきみは濟まぬ顔付をしながら、それでも紙幣を見て居た。

「叔母さん、私の身にもなつて見て下さい。一人しか無い叔母さんだ、世話はして上げたいさ。貴方も不幸な人だ。濟まない〳〵とは思ひながらも今の身では何うにも出來ないんだ。待つてお出なさい。その中にや私も何うかなつて、貴方一人ぐらゐにそんな不自由はさせて置かないから。」と頭をフラ〳〵

させながら娟々と初めた。「まア、そんな顏しないで一杯何うです。」と盃をさした。

「本當に何時も／＼濟みませんね。ぢやこれは頂戴しませう。」と四ッに折つて、袂の尖へしまつた。

「潔を一晩寄來して下さい。惡るい事は惡るい奴だが、私は憎んぢや居ない。潔白な面白い所のある奴だ。」

「駄目ですよ。何うて邪奴は親の頸に繩を付ける奴です。誰に似てあんな者が生れたんだか、本當に世間へ顏向けも出來ません。」

「でも叔母さんは、可愛くて爲方がないッて評判ですぜ、はゝはゝゝゝ。」

「私が？」と生眞面な顏をする。

「隱したッて駄目さ。子だもの可愛いに決つて居る。可愛いと正直に云ふさ。」と笑倒けてる。

「まア何んと云はれても爲方がない。私は何も云ひますまいよ。」と故と難かしさうな顏して居た。

今一本、今一本、と卓三は叔母に酌させて四五本飲んだ。妻のお初は憤り切つて座敷へ引込んで出ない。卓三は獨り上機嫌になつて、やたらに浮かれた。歌が出るやら氣焰が出るやら大騷ぎであつたが、終にはそこへ打仆れて、鼾を搔いて寢て了つた。たゞ、潔には見所がある。一度連れて來てくれ、私が保證して立派な男に建直して見せる、と幾度も／＼煩さいほど念を押して居た。何うて酒の上とは思ひながらも、滿更惡るくは聞かなかつた。

三

酔つていいぶくる甥を無理に寢かして、毛繻子の小さな蝙蝠傘を借りて、おきみがそこを出たのは十時過ぎて居た。

秋の雨はビシャ〳〵と執念く降る。鼻緒のゆるんだ、低下駄を穿いた素足に撥かゝる繁吹が氣味惡るく冷たい。空腹を怺えて喫つた煙草に眩暈がして、落凹んだ顳顬がヅキ〳〵痛む。飲つけぬ酒の過ぎたやうだ。でも袂にある十圓を思へば、何んとなく心丈夫なやうな氣がする。何所に何圓、何所に何圓まア漬大根も二百と思つた所を二百五十は乾すに可い、鹽も俵で買はうと、そんな胸算用をしながら、暗い長い屋敷町を濡れながら歸つた。

この町を突ッ切つて大通りの角に出た時、おきみは偶と足を停めた。角は蕎麥屋である。明るい電燈の灯が暖簾をもれて街道に射し付け、横手の小窓からは眞白な湯氣がスウと雨の空に流れ出た。中は如何にも暖かさうだ。

前後を見廻したが、人通りは殆んと無い。店々は最う大戸を下して居た。おきみは遁込むやうにして中へ入つた。二階へ上つて、火の氣の無い座敷の眞中に、雨袖を抱合せて座つて居ると、小女が蒲團とカッと火を盛つた鐵火鉢を搬んで來た。

「熱うくしてね。あんかけの饂飩を一つ下さい。熱うくしてね。」と火鉢にしがみ付きながら云つた。矢張りまた煙草入が帶の間から出た。

「御新規さま、おんかけが一ッ。」と節付いた聲て、階子段の中程から小女が大聲に通すのを聞いてヒヤ

りとした。

あんかけを喰終つて、何か別なものをと定價付の貼札を讀んで見たが、これと云ふものも見付からぬ。又あんかけを注文した。歯性が悪るいので、蒲鉾は指てちぎつて細くして口に入れた。

煙草が粉ばかりになつて居る。女中に頼んで朝日を一つはづんで、それをユックリ吹し終ると、揚子を使ひながら外に出た。乾いた足に濡鼻緒が冷たかつた。

蕎麥屋から二つ目の角まで來た時、軒下の溝板を渡りながら羽織を被つて來る三四人連の書生どもに遇つた。可也醉つて居ると見えて、高聲に何か喋り亂らして來る。

やゝ十間も通り過ぎて、おきみは紺絣の細かい羽織を着た一人が氣になつて立停つた。透して見たが所々の軒燈のみにはその後姿さへハッキリ分らなかつた。高調子の聲ばかり聞える。

「潔。潔。」と呼んで見た。返事がないから人違ひかも知れないと思つた。

「石井さん、石井さん。」と今度は伜の仲間の名を呼んだ。

書生連は立停つて、何か話合つて居たが、又歩るき出した。急に急ぎ足になつたやうでもある。

「石井さん、些いと、石井さん。」

おきみは最う半町ばかりも行過ぎた書生連の跡を追駈けた。途中泥濘に落ちて、片足がグショリと泥になつた。臑から内腿まで飛沫が上つて氣味が悪るい。そして、辛つと追付いて見ると人が違つて居た。下げて居る辨當包みて職工どもか何かと知れた。

「何んの御用ですね、小母さん。」と一人が馬鹿にするやうな言草である。

おきみは何んとも答へず、片裾を託し上げながら戻りかけた。

「何んだ。馬鹿にしてやがる。」とドッと笑つて職工連は行過ぎた。

おきみは急に家が氣になつて、セカ〳〵と歩るき出した。

四

途中から跣足になつて家へ歸つて見ると、家はヒッソリと寢鎭つて居る。暗い茶の間に三分ランプが細々と點いて居た。

「何うしたんだね、今頃から寢て了つて。お今、おみね。」と戸口から娘どもを起して置いて、自分は足駄を下げて井戸端へ行つた。

「誰？お母さん？」と寢恍けたやうな姉娘の聲が聞えた。

濡れ足のまゝ家に居ると、厄介になつて居る大原の年寄がズル〳〵と裾を引いて起きて來た。おきみの母の妹で、在所の可也な農家に嫁つたのだが、不幸續きに忰が死に嫁が死に、田地田畠も他手に渡して、今は孫の源吉と共に仙臺へ出て來た。源吉は縣廳の土木雇をして他に出張して居る上、送金も思ふやうに出來ぬ所から、年寄は斯うして親類中を流浪して居る。

「お今、おみね、私が歸つたんだ。起きたら何うてす。」と入口に足を拭きながら奥まで叫んだ。

「だつて最う十一時だもの、何か用があるの、お母さん。」とお今の聲である。おみねは寢たふりして

先刻から何んとも云はない。

「今夜は雨も降るし、貴方も晩いやうだから、私がすゝめて今寝かした所ですよ。」と年寄は爐に埋けた火をほぢり起しながら、とりなして云つた。

「母が斯うして夜夜中腹をへらして歩いて來るのに、家で長々と寝てるツて法がありますか。誰の爲めに歩いて居ると思つて居るんだらう。」とブックサ云ひながら濡れた羽織を脱いで釘にかけた。

「ほ、未だ御飯前かい。晩いから私は最う卓三の家で濟じた事と思つた。」と年寄は臺子に手を當てゝ見たが、スッカリ冷め切つて居た。火もポッチリだ。モゾクサと台所へ起つて行つた。

「お今、お今。」とおきみは大きな聲で、起ち兼ねもしない風である。

「煩さいのね。お母さんは何時でも騒ぎ立てるんだもの。」とお今は細紐一つで起きて來た。

おきみは火氣のない、冷い爐を懐手して見詰めて居た。

「何うだつたの、坂田(卓三の家)で何うかしてくれて、明日學校の授業料は納められるんでせう。」と立つたまゝだ。

「お前こそ自分の事ばかり云つて居る。些つたアお母さんの肚にもなつて見るものだ。」

「だッて、毎日會計から催促されて私お友達に體裁が惡るいんだもの。こんな位なら寧そ學校なぞやめて了つた方が好い。」と鼻聲になつて、これもペタリと母の傍へ膝付いた。

「何うとも勝手になさい。あゝあ、お前だちに責殺されるやうだ。」と投出したやうに云つて、大きな

溜息を吐いた。

年寄は台所から枯杉葉を一摑み摑んで來て、それを爐にくべた。爐椽に摑つて俯向いてフウ〳〵と吹立てる。白い煙がブス〳〵立つてパッと燃え立つた。灰がヒラ〳〵と上つて、年寄の破つた白手拭に降つた。夏も冬も白手拭に髮を包んで居る老人である。

「それ、お母さんはお飯前だと云ふ。お今さん用意をして上げなさい。」

「お飯は止しませう。何んだか氣分が好くない。」と止めて置いて、「そして兄さんは、又出掛けたのぢやないか、」と座敷の方を顎で指しながら聲を秘めた。

「最う先刻よ、お母さんが出ると間も無くでした。」

「また醉つて來るんだらう。困つた奴だ。」と考へて居たが、急に何か思出して。「あゝ。又持出された。」と慌てゝ眞暗な座敷へ飛込んだ。用簞笥の抽斗をガタゴトさして居たが、突然、「お今、お今ランプを持つて來て。」と叫ぶ。

「何なの、お母さん。」と釣ランプを持つて行つて見ると、おきみは違棚の前に目を光らして立つて居た。聲に驚いて年寄も後から跟いて來た。

「お前こゝに置いた毛絲のお錢入を知らなかつた？」と聲は慌て切つて居る。

「私、こッちのその机の抽斗に入れて置いたわ。何うして。」

「どれ、どれ。」とおきみは机の抽斗を啓けた。

海老茶色の鏡入が机の中にあつた。中の錢も慥かに入つて居た。

「あゝ。本當に喫驚した。又持出されたと思つた。」とホッと息を吐いて居た。

「厭なお母さん。靜かに探したら好いぢやありませんか。」

「だつて、これは餘所から預つたお金だもの、これなぞ持出されると、私は首を縊つて申譯しなきアならない。でもまア本當に好かつた。」と茶の間へ戻つた。

中の間には子供が四人枕を並べてスヤ〳〵眠つて居た。おみねなぞは枕を外して、小さく口を明いて居た。

年寄は切りに心配して、何か食べるやうにとすゝめて見たが、おきみは茶ばかりガブ〳〵飲んで居た。

「乾度何所かで喰べて來たんですよ。」とお今は然う云つて居た。

五

入口は態と戸締しておきみは中の間の臥床へ入つた。重い蒲團を二枚も着た。黴の臭がプント鼻へ來た。お今と年寄は火の仕末なぞして居たが、お今も明日が早いと云つて寢て了つた。

年寄ばかり一人、爐傍に坐り込んで、螢のやうな火種て、何服も〳〵長煙管の煙を喫つて居た。

「叔母さん、最う晩いからお休みなつたら何うてす。」とおきみは中の間から聲を掛けた。第一はランプの灯が邪魔になつたのだ。

「え、今寢ます。」とばかりて、相變らずユッタリ構えて居る。

「ねえ、あきみさん。」と年寄は鈍さうな聲であつた。何時も泣いてるやうに顫えて聞える人だ。

「何んですね。」蒲團から頸を出した。

「私が思ふには。潔さんにはお嫁を探かすより外はないね。若い人は嫁を持たせると辛棒するものだ。」

「だつて、誰が潔の嫁に娘をくれる者がありますか。叔母さんは氣の好い事ばかり被仰つて居るもの。」

とおきみは他人事のやうに笑つてかゝつた。

「然うばかりではない。田舍あたりでは隨分望んで來る者もあらうと思ふね。家の孫の源吉にさへ媒介する人があるんだもの。」

「然うですね。」とは云つたが、源吉へ媒介されたと云ふ娘は、高が田舍の小商人の娘、辛つと小學校を卒業したばかりの者ではないかと可笑しくなつた。

「私は斯うして見て居るのに、潔さんは惡るい人ではない。たゞ逆ひ性の强いところが不可ない。あれさへ癒れば根が利發な人だから乾度思ひ返す時がありますす。」

「もう／＼那奴の話は止しませうよ、話しても腹が立つから。それよりか、叔母さん。最う寢ませうよ。十二時過ぎてすよ。」とコロリと寢返つて枕を深くした。

年寄はまだ／＼と同じ事を繰返して、色々珍らしくも無い例を引いて居る。おきみは唯好い加減に、「フン、フン。」と聞いて居た。

「小母さん、最う寢ませう。何んだか大變草臥れて了つた。」

年寄は長い煙管を頬杖にして、モゾクサして居た。

おきみは蒲團を眉まで被つて、怡しき夢に入る用意した。毎晩の癖て、寢付くまでの間を色々の空想に耽るのだ。この頃はもし玆に五千圓あつたらばとそれを考へた。銀行の利子は七朱とか云ふ。五七の三百五十圓だけ年に入る譯てある。月に割ればザット三十圓。今の暮しに三十圓づゝの利金が入れば、薪も流木の格安なのを木小屋に積み、味噌も家て煑やう、門前の生垣も土塀にする。古瓦ても屋根に瓦を葺く、とそれからそれと端もなき空想に耽つた。それには先づ肝腎な五千圓の出所てあるが、偖何處からそれを儲けたものだらう。それが決らぬ中は寢ても安心が出來ないやうな氣がする。祖父の代に他に貸して置いた山林が偶とした事から手に戻る事としやうか、納戸の唐櫃の中から何んとか云ふ寶石を見付けた事にしやうか、と思迷へばはてしが無い。

その間に一時を聞いた。外の雨は段々と強降になつたやうだ。肩が寒むくて寢付かれないので、そこらを探つて坐蒲團に肩を包んで、又その空想の續きを追ふた。

二時に近かつた。門がガラ〳〵と明いて、表戸にゴトリと觸る音がした。潔が歸つて來たのだ。

「おい、お今、お今。」と呼んだが、誰も目を覺さない。

「おい、お今、明けないか、僕だ。」と、戸口をガチ〳〵やつて居る。おきみは目を大きく開らきながら何うするかと耳をすまして居た。

誰も目を覺ます模様が無い。

潔はブツ〳〵云ひながら、泥濘を渉つて台所の方へ行くやうだ。そことても明く筈はないのだ。暫く音が無くなつた。

おきみは又心配になつた。締出しを喰つた腹癒しに、又この夜深を何所かへ飛出すやうな事はすまいか。そんな事があつては大變である。眞逆に自分が出る譯には行かぬから、誰か目を覺してくれさうなものだと、窃つと、蒲團から足を出して妹娘の背中をこづいて見たが、ウヽンと唸つて寢返りして了つた。

潔は庭先を廻つて、鉢前の雨戸をドン〳〵と叩いた。「おい、俺を内へ入れない氣なのか、おい。」と云ふ。可也醉つて居る聲だ。

その聲に初めて年寄は目を覺した。枕元のカンテラにマッチを擦つて、出て行つた。おきみは眠つた振して居た。

内から啓けるのを待兼ねて、潔は激しく妹を叱り付けて居たが。啓けてくれた年寄なのに氣の毒がつて「何うも濟ません。」と切りにあやまつて居た。

「何うだ、頭からまで雫が垂れる。羽織は何うなすつた。」

「濡れたから友達の家へ置いて來た。」

[illegible]縁側を踏鳴らして、ドシ〳〵自分の書齋へ入らうとする。

「潔。」とおきみは險しい聲を寢床から放つた。

「何んです。」と障子の外に停つた。

「何時だと思ふ。」

「二時過ぎました。」

キッパリ云はれて、おきみは言葉が出なかつた。

「何んだ。その用ですか。」と通り過ぎて了つた。

「だから叔母さん、打遣(うつちや)つて置いて下されば好いのに。少し懲(こ)りさしてやらうと思つて居たのに。」とおきみは年寄へ不平を持つて行く。

「この雨の降るのに、眞逆そんな事も出來ない。然うしちや却つて逆つて來るものだから。」と又冷えた蒲團へもぐり込んだ。

奥の書齋でドシ〳〵と、押入から衣具を疊に投出す音がする。

おきみは眼が冴え切つて眠られさうにも無かつた。

六

おきみは翌朝晩かつた。年寄とお今とで朝の用意をして了つた。額を揉みながら起きて來て、竈(へつつい)の前に蹲んだ。そして、煙管を取上げた。

「お母さん、授業料は好いのね。」とお今は又念を押した。

「僕ア書學の本だ。廿三錢だ。」

流し前てブツ〳〵顔を洗つて居た季兒(すゑつこ)の義一が唄ふやうに云つた。

「あゝ〳〵幾らでも持つて行くが好い。家は喰はうと喰ふまいと。」と欠伸交りに云つて、「そして兄さんは、今日も學校へ出ない氣かね。」

「今僕起しに行つたけど、駄目だア、睨み付けるんだもの。」

「お今、お前行つて起してお出て。ソッとするんだよ。また肝癪を起すと不可ないから、もう七時半だもの。」

お今は直ぐ戻つて來て、「駄目よ、お母さん。頭が痛いから一時間目は休むんですッて。寢てるわ。」とある。

「だッて來月は試驗があるんだ。最う一度起してお出て。」

「駄目よ、とても起きやしないから。」

「皆、死んで了へ。」とおきみは聲高に罵つて、持つて居た煙管を板の間に投出した。

小兒どもは母の不機嫌に恐れて、コソ〳〵と朝飼の膳に向つた。そして我勝ちに學校包を持つて出掛けた。家の中は急に森となつた。年寄は二枚も襲ねた布子の上に、お今の袢纏まで着て、ワサクサと食散らした飯臺の上を片付けて居た。

外は高く晴れた秋の朝である。明るい朝日が冷たく椽側に射込んだ。四五町先きの醫學校では十分前の鐘が鳴り出した。ドッ、ドッ、ドッと靴を踏鳴らして、制服の學生どもが急足に通る。蟠りの無い大きな聲に。元氣らしく喋り笑つて行く姿が、表の生垣越しに見える。

おきみはその勇(いさみ)ある姿を、煽り立てられるやうな氣がして眺めて居たが、最う耐え切れなくなつて潔の書齋へ入つた。

机の上には昨夜の儘のランプが細く燻(くすぶ)つて、室の中は油煙が漲つて居た。脱捨ての濡着物や足袋を其邊中(そこら)へ投擲げて、潔は頭から蒲團を被つて、海老のやうに足を縮めて臥て居る。近頃は毎日のやうに學校を怠けて、保證人へは度々學校からの注意があつたのである。

「潔。」

おきみはベタリとその枕元に坐つた。二度三度搖り起すと、辛つと目を覺して眩しさうに母を見上げた。

「お前今日も學校を休むんだね。」と初めは涙含んだ聲であつた。

「煩さいな。一時間目は體操だから休んでも好いんだ。」

「その位、學校が厭なら、高い月謝を拂ふ事はない。止したら好いだらう。斷然止してしまひなさい。」

「煩さいッたら。那方(あつち)へ行つて。」と又蒲團を引被る。

障子の下棧には朝の日が薄らと射付けて、始業の鐘は消魂(けたゝま)しく聞えた。騒聲しながらドッ〳〵と驅付ける學生の群もあつた。

「潔、潔。」とおきみは猛り立つて、行也蒲團を引脫(ひきぬ)くらうとする。

「何をするんだ。」と潔は鋭く叫んで、母から夜具を奪取つた。

「不孝者、不孝者。」と母は聲を立てゝ泣出した。

「不孝でも好い。僕ア何うて不孝者だ。貴方だつて僕に孝行されやうたア思ふまい。」と寢不足の蒼い顔に笑つて、又寢にかゝるのだ。

「起きろ、畜生。起きろ。」

「起きて何うするんだね。僕ア寢て居る方が勝手なんだ。」

「出て行つてくれ。お前のやうなものは家に置けない。」と何所までも蒲團を引剝からうとする。

「置けないたッて生れた家だ、何所へ行けるもんか。」と剝がれたまゝ寢て居て、飽迄も太々しく出る。

「その顔を見ろ。人相まで惡垂れて來た。親不孝。」と大聲に泣喚いてそこに突伏して了つた。

潔は頰髭の伸びた隈びた顔に、飽迄平氣さうに天井を見詰めて居た。

「おきみさん、おきみさん。さう貴方のやうに一概でも不可ないから。」とオロ／＼聲で年寄の仲裁するのを機會に、おきみは嘘噺りながら出て行つた。

「また芝居だ。」と潔はフンと鼻の先に冷笑して、又寐仕度にかゝつた。

七

おきみは洗濯物をかゝひて井戸端へ出た。溜めて溜めて置いたのが十何枚とある。日向へ盥を持出して、影干の皂莢を手の痛くなるほど揉込んだ。一枚づゝ濯いては乾す大きい小さい着物で、竿の掛場もない位であつた。明るい日に光つて雫がキラリ／＼と土に落ちた。

おきみは仕事をして居る間、何も考へなかつた。一枚〱と捗取つて行く着物を眺めると、これが皆自分の手に養つて居るんだと云ふ、強い矜もあつた。この着物は誰に仕立下して、それから下へ〱と最う三人目の弟が着て居る。裏にあてた補綴は皆自分の丹精だと思つた。

本宅を貸して置く裁判官の下女が水を汲みに出て來て、「おや奥様、大變お精が出ますね。お兄様が大勢てすから、お大抵ぢやないてせうね。」と感心して居た。

「小兒など多く持つものぢやありません。これてすからね。」

「だッて好御座んすわ。末が樂みてすもの。立派な御隱居樣てす。」

「さア、どんなものてすかね。」おきみは濡れた腕を後へ當宛つて、折れさうな腰骨を伸した。

下女は自分の親元も兄弟が多くて母に苦勞をかけた事やら、それでも上から〱何うやら道が立つて母はそちこちと引張凧になつて居る事やらを自慢さうに話した。自分も兄の家に居れば別に氣苦勞もないのだが、それでは濟まぬと思つて他人の水を飲んで居るとも云ふ。おきみは唯フン〱聞いては居たが、この人達と較らべられて耐るものかと思つた。

二度目の洗物を取りに家へ戻つて見ると、潔は今起きたばかりのところ、爐傍へ坐つて寐腫れた瞼に長煙管の煙草をふかして居た。年寄は膳拵へして居た。

おきみは何か酷い事を云つてやらうかとも思つたが、素知らぬ振して默つて外へ出た。間も無く潔は制服を着て、ステツキを振りながら家を出て行つた。何方へ行くかと額に手をかざして見て居ると、學

校とは別な方角の町通りの方へ行つた。

「又書籍て日を潰すんだな。」とおきみは情なさゝうに、人通の無い日向町を行く忰の後を見送つた。

洗濯をすまして家へ入ると、最う十二時に近い。腕は拔けるほどだるく、眩暈がしさうてならぬ。年寄は切りとすゝめるけれど、おきみは晝飯も喰べずに、直ぐ蒲團を出して襦袢のまゝに臥た。

枕元が騷々しいので目を醒すと、最う小兒どもが學校から歸つて來てる。季兒の義一は學校の朋輩を二三人連れて來て、廣い屋敷の中を駈ずり廻つて遊んで居た。一人は軍人の兒、一人は醫者の兒、何れも小ザッパリとした姿をして居る。おきみは義三の髮の毛の耳まで被さつて居るのを見て、懷の錢入から白銅一つを出した。それを義一に持たせて床屋へ出してやつた。

「短かく苅るんだよ。一分刈ッてのが好い。」と云付けた。

そして、繼物ても出さうか、それには晝が晩いしなぞ考へて居る所へ、海老茶袴を穿いたお今が歸つて來て、「久太郎が大根を擔けて來てよ。」と母に敎へた。

「何んてす立つたまゝ、御挨拶をしてからものを云ふんてす。」と娘をたしなめて置いて、穿掛下駄のまゝ表の方へ出て見る。

久太郎は馬を門脇の櫻の木に繫いて、五十本卷の一束づゝを木小屋の前へ擔んで居た。

「今年の大根は何うだね、又去年のやうに砂目ぢやないか。」とおきみは腰に手を當てゝ見て居る。

百姓は恐縮さうな顏の頰被りを取つて、

「大丈夫で御座りす。今年は上出來だ。見てくなんせ。」と掌でゴス〳〵と大根の肌を磨いて見せた。

百姓は大根を搬び終つて、山芋の苞を下げながら椽側へ來て腰掛けた。

今日は和子が見えない。何所さ行きしたね。」と家の中を見て居る。

「何所だか、學校へでも行つたらうよ。」

「然うしかね。實は和子樣にお願申す事あつて來たんだけんど、お留守では困つたな。何時頃歸らさりすかな。」と火鉢のあるのにプウ〳〵掌に吹殼を吹いて居る。

「何んか用なのかね。」とおきみは百姓に飯を出す用意に忙しい。

「いゝえね、この頃から家の三番目の息子が食過ぎて困つてるから、藥を調合して頂くべと思つてね。それではア山芋など掘つて來たのしや。」と阿つて居る。

「だッて、一度も診察しなくちや駄目ぢやないか。何所の國に病人を見せないで藥を貰ふッて法があるものかね。」と氣輕るく笑つた。

「この前、俺アが胃で困つた時頂いた藥があるんでがす。あれを飮ませたら大層驗があるやうだから、又あれを合はせて頂くべと思つてね。」

「そんぢや最少し待つて居るさ、その内には歸つて來るから。」とおきみは胡栗足のお膳を搬んで來た。酒も一德利付いた。　（完）

モデル

國木田はる子

(一)

『相變ず勉强ね、皆んなが大變上手に成つたつて姑さんがほめて居らしつたよ、兄さんも着好いと言つて喜んで居らしつたつけ。』と姉の幾子は妹達が裁縫をして居る側へ來て座つた。

『おほめに預かつて恐れ入ります。』と兼子と言ふ、妹は笑ひながら叮嚀におじぎをする。

『お兼姉さん、後が恐ろしい事よ。』と言ふのが冬子。

『何故、冬ちやん。』

『でも、姉さんが持つて入來つしやつた包みの中から、全速力駈足にねがひますと仰しやり相な仕立物が出相ですもの。』

『マア、冬ちやんの口の惡くなつた事、これは貴孃方に仕立物をして戴く御禮につまらないものだけれど持つて來たのですよ。』と幾子は笑ひながら包みを引寄せて。

『お氣には入りますまいが、兄さんが此れは兼ちやん、此れは冬ちやんと見立てくださつたのだよ。』と包みのまゝ兼子に渡す。

『姉さん毎度すみません、私達だつて稽古に縫ふのですから、一々お禮なんていりませんよ、眞實にお氣の毒樣です。』と兼子は包みをとくと華美な紡績絣の反物の上に絹縮の半襟が二ッ乘つて居た。

『マア可い事。』

『何んて可いのてしやう、嬉しい事兄さんお見立がお上手ね。』と二人は嬉し相に暫く眺めて居た。

『姉さん、此の絣も大變可いのねこれは誰にくだすつたの。』

『冬ちやんも察しの惡い人ね、これは松坊のてしやう、姉さん。』と兼子は幾子の顏を見る。

『そうてすよ、松雄の衣服と羽織に成るのです、それは駈足てなくつても可いから何卒ねがひます。』

『アラ姉さんこそ人が惡ひわね、此れは私のだよ、マア嬉しいと心の內で喜んて居たのに當が外れたわ』と冬子は笑ふ。

『其はお氣の毒樣てしたね。』と幾子も笑つた。

『隨分冬ちやんも慾張りね、私は一目視てこれは松坊のだな、と思つたわ。』と兼子は言ふ。

『だつて包みごとお寄しなさつたから、そう思つたのよ、可いわ、私はどうせ慾張りですよ。』と冬子は淚ぐむ。

『マア、最早おこつたの、飛んだ事を申しまして濟みませんてした。』と兼子は眞面目に成つて謝罪まる。

『何んだねエ、お前達はつまらない事で言ひ合ひなんかして、見つとも無いじやないか。』
『でも慾張りだなんて人聞きが惡いわ。』と冬子は泣いて居る。
『だから謝罪つたじやァ有りませんか。』と兼子はふくれる。
『お前達は氣樂だね。』
『何故、姉さん。』
『でもつまらない事を言ひ合つて、泣いたり腹を立てたりするのだもの、見つともないじやあないか、氣樂だから其んな事で喧嘩などするのだよ。』
『眞實に姉さんから見れば氣樂に見えるてしやうね、けれど此れで中々ねエ冬ちやん。』と兼子は言ふ。
『エヽ、眞實よ姉さん。』と泣聲で返事をする。
『何にが眞實よなんだい、冬ちやん。』と幾子は笑ふ
『兄さんは相變らず御多忙いの。』
『エ、如何して冬ちやん。』
『お約束の事があるから。』
『上野の展覽會だらう、此の頃に連れて行くと言つてらしつたよ。』
『そう嬉しい乾度ね。』
『エヽ、其れはそうと今日はつウちやんの事を聞きに來たのだよ。』

『小說の材料になるの。』

『ア、。』

『お祖母さんがおつしやつたけれど、姉さんには滅多な事は話せないつて、家で話した事がみんな兄さんのお書きに成つたものに出て居るつて、驚いて居らしつたわ。』

『惡口さへ書かなければ可いてしやう。』と幾子は笑つて居る。

『それはそうだけれど、姉さん眞實にウゥちやんは材料に成つてよ、ねエ冬ちやん。』

『エヽ、其れは可愛相よ姉さん。』と冬子は言葉に力を入れる。

『其うかへ、相變ず賣ないのかね。』

『エ、 たアマにしかお座敷が無いのですつて。』

『そうだらうとも、一體彼んな子を藝者にするのが間違つて居るのだよ、色は白いし愛嬌も有るけれど、決して別品では無いものね。』

『でもつウちやんなんか可い內ですよもつと慘いのが澤山有りますよ。』

『そうかねエ。』

『標緻ばかりては無いのですよ、それは〳〵氣が強くつて、此の間もお客を打つたのですつて。』

『マア、亂暴ね。』

『そうして逃歸らうと仕たものだから、待合の女將さんが立腹て、御祝儀と玉を拂つたら歸して遣ると

言つたのですつて、さうすると、エヽ拂ひますともと言つて夜の十二時すぎに待合の女中を連て家へ來たのですよ、さうして母さんからお金を戴だいて、女中に持たせてかへしたのですよ、此んな事が抱へ主に知れやうものなら大變だと言ふので、母さんが待合へ行らしつて、女將さんに謝罪つて待合に宿まつた事にして、其晩は家に宿まつたのですが、つウちやんは暢氣だから大喜びて一人でしやべり明かしたのですよ、明る朝また其内に來ますつて、嬉し相ににこ〳〵笑つて歸つて行つたので、母さんは最早眞ッ平だ、つウちやんのお蔭て待合の女將さんなんぞに、頭をさげたと口惜がつて居らしつたわ。」

「さうだらうつて、彼れても家とは遠いながらも親類なんだから、親類内の者が藝者に成つて居るなんて事は餘り見つとも可い事じやァ無いから、廢業せたら可いじやァないかね、つウちやんだつて可愛相だわ。」

「それで、此の頃つウちやんのお母さんとも相談中なんですよ。」

「幾歳だつたね。」

「私と同だから十六ですよ。」と冬子は言ふ。

「それで藝者。」

「エヽ、去年からですよ、七年の年季て行つたのだから、未だ二年と少し年季が殘つて居るのです。」

「マァ可愛さうにねエ、つウちやんだつて父さんが生て居れば、彼んな賤しい事を仕ないでも濟んだらうにねエ。」と幾子はつく〲歎息する。

（二）

「マアお幾姉さん暫く、叔母さんはお留主なの、今日はお土產を持つて來たわ、何んだか當て御覽なさい當た方には澤山あげるから。」と鶴代は入來て來るなり四方をきよろ〳〵見廻しながら、持つて居る桃色のハンケチ包みを振り廻す。

「今川燒でしやう。」と冬子は笑ひながら言ふ。

「マア憎い、何時も今川燒だつて言ふのよ、私だつて彼ればかり喰べちや居ないわ、ねエお幾姉さん、貴孃何んだと思つて。」と幾子の鼻の前へ突きつける。

「サア、何んだらう西洋菓子のやうね。」

「マア當つた如何してわかつて。」

「でもそんな樣な臭氣がしたのですもの。」

「あらそう。」と鶴代は嗅ひで見る。

「成程、サア皆さん召上れ。」と包みをあける。

「つウちやん家へ來るつて出たの。」と兼子が聞く、

「いゝへ、お稽古の歸りなのよ。」

「大變な方角違ひじやアありませんか。」

「だつて皆さんに逢ひたくつて仕樣がないのですもの、來ちやア惡ひの。」

『いゝへ。』

『昨夜ね此のお菓子をお客さまに貰つた時に、明日は此れを持つて當家へ來ようと思つて、留助姉さんに見付かると喰られて仕舞ふから、ばアやさんに預けて置いて今出掛に裏口から渡して貰つたの、其の替りばアやさんにも遣つたから、へつたわ一ッ二ッ。』と勘定を仕て居たが。

『何故喰べないの皆さん、おゝ寒ひ。』と其處に有つた火鉢にかじり付く。

『今日はそんなに寒くは無いじやアありませんか、おやつゥちやんは襦袢を着て居ないのね。』と幾子は鶴代の袖口から覗き込む。

『無いのですもの。』

『あら此の春縫つてあげた長襦袢は如何して。』

『有るもんですか。』

『如何したの。』

『察しの惡ひ人ね、春夏秋てしやう、中央に夏つてものが有るわ、襦袢は單物に怪て仕舞つたの。』

『マア、其れては寒ひてしやう。』

『仕方が無いわ、其の替り下襦袢は着て居てよ袖の無いのも洒落てるわ。』

『平常の着物は貴方がこしらへるの。』

『エヽだから此んな洗ひざらしばかり着て居るの、此の羽織だつてお酌の時代に着て居たのよ、』

「お座敷へ出る時は如何するの。」

「それは友染のすばらしのが有るから可いの。」と鶴代は菓子を積むだり並べたりして居たが。

「私が一ツお毒見仕ましやうね。」と一ツ取つて喰べ始た。幾子は鶴代をじつと見て居たが、突然。

「ねエつゥちやん、藝者を廢業なさいな。」と言つた。

「エ。」と鶴代はびつくりして幾子の顔を見た。

「眞實に廢業なさいよ。」と兼子も冬子も聲をそろへて言ふ。

「廢業て如何するの。」

「裁縫を習得つて、讀書を一通やつてお嫁に行くの。」

「私のやうな者でもお嫁に貰つて呉る人が有るかしら。」

「其れは貴方が眞面目な人にさへ成れば、幾程も貰つて呉る人は有りますよ。」

「だけれど、此の商業を仕た人は直ぐわかるつてね、樣子で、留助姉さんなんてハイカラに造ると、其れは〳〵立派な奥樣と見へるけれど、口を聞かせるとかたなし、手眞似で話しをするから、私だつて廢業たくつて堪らないのよ、嫌だ〳〵と思つて居るから、お座敷へ出ても面白くお客樣を遊ばせる事が出來ないのよ。」

「相變ずなの。」と冬子は聞く。

「エヽ、お座敷なんて月に十度も有るか無しよ。」

『マア其れては女將さんがさぞ嫌な顔をするでしやうね。』

『エ、だから實に辛いのよ私今迄に幾度死んで仕舞うと思つたか知れないわ、けれど私が相續人だから家を立てなくつては成らないし、お母さんにも早く樂をさせてあげたいと思つて、死のうと川端まで行つては何時も色んな事を考へて、柳の下で泣いて來るのよ、けれどお幾姉さん嫌だと思ふ人の處へはお嫁に行きたくないわ。』と鶴代はにつこり笑つた。

『其れは嫌だと思ふ所へ行くには及ばないわ。』

『だつて藝者てさへ嫌がりながら落籍られる人が澤山有るわ、けれど眞實に藝者なんて罪な商業よ、惚た眞似をしてお客をだますのよ、留助姉さんなんと來た日には、其れは上手よ一所にお座敷へ出るてしやう、そうすると人前もかまはずに、貴方が暫く來てくださらないから淋しくつて仕方がなかつたの、つッちやん、私が始終お噂して居るのが此の方よ、なんて未だ中々其れは〳〵うまい事を言ふのよ、留ちやん僞言ばかりとも言へないから、其處ん處はうまくお調子を合せて置けれど。』

『だから廢業なさいと言ふのですよ。』

『けれど此の頃のお客樣は如何して中々だまされない事よ、まご〳〵すると反對に藝者の方が欺されて慘い目に合されるのよ。私だつていろは位は讀めるし、人形さんの衣服も縫うし、御飯は焚けないけれど、下地ッ子の時代に勞働ひたから臺所事だッて、雜巾がけだつて、私の處の格子を拭き込んだのは私なのよ。冬ちやんなんか、買物をするのが氣まりが惡ひなんて、言ふけれど、私なんか今でも燒芋屋へ

ても行く事よ、おてんの立食ひなんてお茶の子よ。』
『今でもするの。』
『アラ嫌だ、今は仕ないわ、けれどばアさんに買つて來て貰つて家で喰べるわ、家の近處のは其れは美味い事よ、皆さんに喰べさせたいわ。』と鶴代はつまらない罪の無い事を云つて居たが。
『アヽそう〳〵、藝者を廢業のも考へものよ。』と言ふ。
『何故つウちやん。』
『だツてお嫁に行つた先でお母さんを引取つてくれるかしら。』と心配相な顔をする。
『引取つて呉る家へ行けば可いじやア有りませんか。』
『そうすれば可いわね、此の頃こんな事を考へて居たのよ、私し隨分因果な性だと感心するのよ、家の女將さんなんて隨分薄情な人だけれど、私が餘り賣れないから他所へ行けば、私のやうな者でも三百圓位を貸すと言ふから、其のお金を上やうと思ふのよ。』
『ヤア其れは飛んだ考へ違ひですよ、惡い考では無いけれど、つウちやんは嫌だ〳〵と思ひながら、やつて居るのだから此れからだつて全盛つてはないのに、そんな澤山の借金を脊負て、如何して返す事が出來ます、お酌に出てから四年目でしやう、貴方はお金を借りて行つたのではなくつて、仕込て貰ひに行つたのだから、抱へ主はそう損は仕て居ませんよ。』
『其うだわね。』

『だから早く年期だけ勤め上げて素人にお成りなさいよ、私がお金持だと落籍して家の子にするのだけれど。』と幾子はつく〴〵言ふ。

十二の時から他人の中でもまれ〳〵て生長なつた鶴代が、少しもひねくれた心持を持たず、優しく温和なのに幾子は感心した、と同時に此んな商賣をさせたのが口惜くつてたまらない。

『今日は日曜ね、晩にはお座敷が有るかも知れない、毎日々々夜に成るのが實に辛ひのよ、だから鶴代さんお座敷と言ふ聲をきくと生き返るやうよ。』と鶴代は笑ひながら話して居るが、聞く方の胸は一杯に成つて、皆な思はず涙がこぼれた。

お兼は立ち上がつて自分の長襦袢を持つて來た。

『つウちやん、私はめつたに外へ出ないから此れを着て頂戴な。』

『あら、いひ事よ、其の内調製へるわ。』

『マア其んな事を言わないで、つウちやんお着なさいよ。』と幾子も側から進めるので、

『お氣の毒樣ねエ、じやア早速着て行くわ。』と鶴代は氣の毒相に着替へて。

『お陰樣で温たかく成つたわ、サア歸ろう餘りおそく成ると叱られるから。』

『眞實よ、ちよく〳〵度々遊びにいらつしやいよ。』

『エヽ、有難とう、此の頃表の芝居は始つて居るの。』

『エヽ。』

『じやア一寸立見を仕様かしら。』

『藝者が立見をするなんて外聞の悪い事を言ふものじやアないわ、其れよりは早くお歸りなさいよ。』

『ハイ〳〵御免なさい、おやかましう、叔母さんに宜しく左樣なら。』

と鶴代はがらころと歸つて行つた。

時計

水野葉舟

一

「貴方、貴方……繁ちやんが時計を壞しましてよ。」

隣の室で、女が慌た聲を立てた。と仕切の唐紙を開けて、其大きな目に何處か、おろ〳〵した心持を見せて、振り返つた私の顏をぢつと見る。

「時計を……」

私が當惑してしまつて、默つて居ると、女は口の中で繰り返して呟く樣に言つた。で私も、

「時計を？……持つて來てお見せ。」

と言ふと、女は其儘すつと立つて、坐敷に入つて來た。左の袂の下に壞れた其古い置き時計をひそませて居たのだ。

「ついお玩具にして、こゝの處を……」と後の小さい扉を開けて見せた。

私は默つて其時計を受取つた。そして振つて見たが、カチッとも言はない。髭の樣な撥條がはづれて、はねてしまつて居る。……ほんとに古い時計だ。車は黑い染がついた樣に錆びて居る。私はつくづく見て、面の方をむけた。四角の昔流行つた型だ。周圍のニッケルは禿て黃くなつて居るし、面の時間を盛つてある白い盤もボッちやけて居る。振ると、がちや〱と中の螺旋が弛んだ車ががた〱になつて居る音がする。もう、器械がすつかり離れ〱になつて、斯う壞れてしまつた樣で、今迄、よくも動いて居たと思はれる程だ。

私は今迄にも度々こんな事があつたので、も一度振つて見た。死んだ樣に、やはりカチッとも言はない。ぢれて、又二三度、やけに振つた。けれど同じ事だつた。

それを見て居ると、女は

「直ぐ時計屋にやりましよう？」

と言ふ。

「駄目だよ、こんな古いもの、」

「古くつたつて、今迄動いてたんだわ。」

「駄目さ。新しいのを買ふ。」

「買ふつたつて……」

と、女は泣き出しさうな目をする。

私はふと、鈍い……老人(としより)の首を、振る様なセコンドの音を思ひ出した。

「これでも動いてりやいゝんだけれど、……もう駄目だよ。古いんだもの、……少し金を如何かして、安いのを一つ買つて來よう。」

としみじみ言つた。女は默つて俯向いて居る。私は自の額(ひたひ)をさわつて見た。熱が出た樣に少しあつい。目を閉つてぢつとして居ると、つくづく自分の心の暗いのが悲しくなつて來た。

「何故、斯う貧乏なのだらう?」

と思ふ。

女は暫く、私の横顏を見つめて見たが、そつと立つて行つた。すると、隣の室で、

「繁ちやん!。如何してそんなにおいたをするの?」……と言つて居る。弱々しい涙聲だ。すると、子供がしくしく泣き出した。女は少し慌(あわ)てて

「そんなに泣かなくつてもいゝわよ。……もうしないね。さ、お父ちやんの處に行つて謝つていらつしやい。」……

私は胸が苦しくなつて來た。

「淸!」

と怒鳴(どな)つた。

「へ?」

女は慌てて、出て來た。目に涙が湛つて居る。私の近くに坐つて

「ハ？」

と言ふ。私は何と言つていゝか分らない。暫く默つて居た。女は俯向いてしまつた。

「子供になんぞ、そんな事て謝らせるんぢや無い！」

私は僅に斯う言つた。

二

其夜、私達は默つて向ひ合つて居た。女は寂しさうに、折々私の顏を見る。……私は此頃からの心持て、何となく身體が疲れきつて居る樣だ。それと反對に神經は鋭く弱くなつて居る。ぢつとして居ると、種々な事が順序も無く浮んで來る。――外は闇でしんとして居る。

ふと、鈍い、老人の首を振る樣な、古時計のセコンドの刻む音が胸に浮ぶ。……耳をすまして聞かうとすると、四邊が今迄よりも一層しんとなる。

「何時だらう？……」

私はものものしく聞いた。

「まだ早いてしよう？……近所ても起きてるから、」

……私は、眞暗な戶の外が、まざ〳〵と想像される、夜が更けるに連れて、闇が深くなる。……そ
れが何とも言すなく不安な感じがされる。

寂然と、夜が澄み渡つて行く。と、今迄カチカチと音がして居た時計が、何故ともなしに、ぱたつと音がしなくなつてしまつた。其最後の音か寂然とした中に消えて行つた。……今はその後の樣な氣がする。音がしなくなると、天地が空になつて、闇が、愈々暗くなるばかり……私はその闇の中に、突き出されて、何處へでも行け。と言はれた樣だ。

「あの古い時計でも、も少し動いて居て貰ひ度かつた。」

と思ふ。

「おい。何時だらう？」

不安な心持にたへなくつて暫くしてから又聞いた。

「さあ、何時てしようね。まだ早いわ。」

女は同じ樣な事を言ふ。……

私は目をぞつと女の顔に向けて、默つてぢつと見た。すると。女も、寂しく大きな目をして、私の顔を見る。その顔が、燈火に照らされて、冷めたく、悲しさうに、ぢつと動かない。……

私は二人が、斯うして、何時までも、何時までも、たゞ向ひ合つて居なければならぬ樣な氣がした。……そして、この闇夜に自分がちやんと、ここに生きて居ると思へなくなつて來る。……その重つくるしい、しんとした中に、玄關の格子がからつと開いて、郵便が來た。

「あら、十時だわ。」

女は嬉しさうに言つて、立つた。

私もほつとした。

三

次の朝、起きると、日が美しく照らして居る。

「清、何時だらう？」

いつも起きると聞く癖が付いて居るので、私は斯う言はうとしたが、止してしまつた。すると、何となく家の中がひつそりして居る樣に思へる。

私は飛び起きて、書棚の引き出しを掻き廻はした。少し前に飜譯した原稿があるのを思ひ出したので、それを直して賣らうと思つた。

晝少し前に、やつと仕上げたので、たつた一枚の洋服に着更へて外に出た、うるさがられも、嫌はれもして居るが、やはり行きつけた、××雜誌社に足が向く。途であゝ――と吐息をついても見た。けれど、貧乏に馴れてしまつたのか、さう恥かしいとも思はずに、神田のX――町で電車を降りた。

――斷つて置くが、私の家は代々木だ。

日本家に、喰付けたドアを開けて、中に入ると、すぐ其の編輯室に望月と言ふ、髯自慢のでぶ〳〵肥つた主任が居る。私をぢろつと見て

「や、大將御盛裝て……」

と、先づ冷笑した。私は仕方なしに追従笑ひをした顔をした。だが、胸がぐつと迫つて來る樣で、自分で、自分の淺ましさを罵つた。……何事もある事だけれども、その後では餘り情なさにほろりとする。

こんな事で、私が暫く默つて居たと見えて、

「何か御用ですか？」

と望月はわざと丁寧に言ふ。

「え、實は……」

と言はうとするのを、

「あゝ、原稿ですか？、何です？」

望月は何氣なく言ふ。

「フランスの奇談集の飜譯です。……いつかも一度お願ひしたあれの續きですが。」

「はあ…… それで？」

「載るのは何時でもいゝのですが。」

「金ですか。」

と言ふと、急に尊大な口付をして、その小さい惡賢い眼で、ぢつと見る。

「今日戴き度いのです。少し入り用の事が出來たもんですから……」

私は自然と言葉尻りが弱くなつて來る。

「今日？……其は少し困つたな。」

彼は平氣な顔をして居ながら、困つたらしく言ふ。そして、机の上の雜誌を取つて弄つて見たが、私が押して言ふと、

「ぢや、一寸相談して見樣、」

と言つて立つて奥に行つた、

二分もたつと、奥から出て來て、一寸にこついて見せながら、

「では、これだけ……お馴染だから、特別ですよ。」

袋に入れた銀貨を渡す。

「有難う。」

私も一寸、今迄の不愉快さを忘れて言つた。そして其をズボンのポッケットに入れると、二言三言立ち際に話をして、勢よくそこを出た。

人通の多い街通に出て、そつと手を入れながら、ポッケットの中で状袋を破くと、チヤラチヤラ言つて、五十錢銀貨がたしかに九枚ある。

私は町の右側を、ボクボクと無意識に歩るいて行くと、ガラス張りの店がある。ショール店だ。暖かさうな、眞白なショールが惜し氣も無く、ぶら下げてある。

「もう、冬仕度か」と、ふと胸に浮ぶと立ち止まつてガラスの中を覗いて見た。そしてヅボンの中に手を入て見たが、

「これつばかりで、何が買へるもんか！」

と、甘い夢でも見た後の樣に苦笑した。

それて、其處を離れると、

「何處に行かう?!」と考へた。時計の事なんぞは何時か忘れて居た。そして、何かに引つぱり廻はされて居る樣に、ぶらぶらと當なしに歩き出して、小川町の停留場まで來た。

「久し振りだ。日比谷にでも行つて見やう」……とふと、思ふと、すぐ其處に來た電車に乘つてしまつた。

乘ると、私は氣がいらいらする。もつと他に面白い處がありさうだ。何か自分がつまらない處に引つぱられてでも行く樣て……　眉の間に皺をよせて、苦々しい顏をして車の中の人をぢつと見る。すぐ側に居た細い目に黃金緣の眼鏡を掛けて、洒落た服を着た、若い男が、其、私の目と見合はすと、微かに鼻てあしらふ樣な輕薄な笑ひを含ませる。私は顏をそむけてしまつた。

日比谷に來た。いち早く飛び降りて、すつすつと公園の中に入つた。そこらを悠々と歩いて居る人などには、目もくれずに、急いて、三橋亭に飛び込むと、いきなり

「葡萄酒！」

と言つた。

ほつとなつて隅の方に腰をおろした。相恰、正面に大きな鏡が立つて居たので、すッかり、自分の姿が映つて見える。

顔色の惡さ恐ろしい程貧血をして居る。髯が伸びて自分ながら病人じみて居る。唇ばかりが赤く、眼が如何にも險しく光つて居る。

「痩せたな、」…… とそつと、頬をなでて見た。

そこへ、女が臺付きのコップと、ジンフリンデルの罎とを持つて來て、一杯ついだ。私はキユッと飮んで、コップを下に置いて又つがせた。

と、何か食ひ度くなつた。二品ばかり注文して、此度は、少しづゝ飮んだ。酒の氣が身體の中に沁み渡る。枯れた樣な頭に、かつと血が上つて來る。目が潤んで來た。私は又一杯つがせた。——食ひものが來た。私は貪る樣にそれを食つてしまつた。そして、又ぢつと燒を見た。

「嵐に吹き晒された樣な顔だ！」

と今度は自分で自分を嘲つた。やがて、立つて、

「勘定！」

と、威勢よく言つて、かくしから銀貨を二枚出して、そこに置いて出た。

顔がほてる。私は兼ねてから空想して居る快活な、豊かな生活を、……ぼつと夢の樣に胸に描きな

から、花園の中に出た。人一人居ない。カクタスと、葉鷄頭が美しく日に照らされて居る。その中の空のベンチに腰をおろした。そして考へて見た。

何か前途に面白いものがある樣だ。今にきつと良い事がある。……と心にたしかに思ふと、ふと振り返つた。十二三間離れた處に、華美な絹パラソルが二つ、風に浮いて居る樣に、輕く秋の日光の中に漂ふて、ゆらりゆらりと歩るいて行く。

私は又、急に立つたが、身體の筋がすつかり拔けた樣にだるくなつて來た。日に蒸されて、身體中が汗ばんで居る。

ふと、原口を訪ね樣と思つた。それて、すぐ引返して、電車に乘つた。四谷て降りると、T――町の下宿に行つた。

四

原口の處を出た。骨董好きの原口に、散々暢氣な事を聞かされて、外に出ると、もうすつかり日が暮れて居る。

薄暗い横通りの町を歩いて居ながら、私はふと時計の事を思ひ出した。

「何しろまだ、金があるから、何處かて安いのを買つて行かう。」と、かくしの金をいぢつて見て、町の兩側に氣を付けて歩いた。一町行つても、夫らしい家は無い。……ては、大通りに行かうかしらと思つたが、大通りの電燈のきらきらする店に立つのが、あまり晴れがましく思はれる。

「何しろ、何でもいゝ古道具屋の店に並んで居るのでさへ無ければ……新しいのでさへあれば。」

と又思つた。そして行くと、道の左側に、大抵の人は知らずに、通り過ぎてしまひさうな店を見付けた。私はつつと、その前に立つた。虫屋の前に立つた樣に、幾つもの時計の音がする。

「疊時計を見せてくれ。……一番安いので可い。」

と言ふと、店に居た十六七の子僧が、

「はあ」

と言つて、其處に並べてあるのを二つ三つ持ち出して來た。そして

「これは如何で……」

と、小形な、華奢なのを手に取つて見せる。

「幾らだ?」

と聞くと、わざと商標を見て、

「二圓七十錢でございます。」

「もつと安いの……」

と言ふ處に、奧から三十七八の前に黄齒を入れた仔細らしい男が出て來た。

「好うこそ……」

と、主人らしい物馴れた樣子で挨拶をして、

「お時計でございますか？……」

と言ふ。私は氣が急げる樣に、

「うむ、その安い方のを貰はう。」

と言つて、そこへ並んで居る目覺しを指した。

「此てございますか？……此は和製で、お安うございますれど、中々確でございます。」

私に渡した。で其を包んでくれと、言ふと、その間に、主人は獨逸の時計と、そらさない樣に言つて、其を手にとつて、一應改めて見てからが如何の、日本製が此頃ではよくなつたのと、頻りと、何方にでも好い樣な功能を述べたてる。

私は其を聞きながら、たゞ何てもなく返事をして居た。心では、一番安いのと言つて、時計を買つたが、可笑く思はれてならない。

「何故おれは斯う自分の生命の長さを計るものを買ふのに、安いの、安いのと言つて、やくざなものを買はうとするのだらう？」

と思つた。そして「生命の長さを計る」と言ふ事が、ひどく面白く思つた。

それを觸げる樣にさせて、金を拂つて、その店を離れた。道々も、生命の長さを計る道具を價切り倒さうとしたのがおかしく思つてならなかつた。

そして、歩きながら、珍らしさうにその箱を耳にあてゝ、音が聞えるかと思つて聞いて見た。

五

四谷から中野行きの電車に乗つた。何だか、大したものを買つて來た樣な氣がして、さげて居る、その時計の箱をそつと腰掛の上に置いた。そして私は車の中を見廻はした。

正面は三十六七の年配の陸軍の主計が二人並んて居る。ふとその話が耳に入つた。

「君は明治幾年だい。」

一人の顏の長い、才子らし方が、一寸となりを振り返へつて聞く。

「明治三年てす。」

一人の肥つた、目尻に皺のよつた、人の良さゝうな方が答へる。

「ほう、僕と同年だね。」

「あなたと、さうてすか、此年になつて、見習士官ては駄目てすね。……

と目尻に皺を寄せて笑ふ。

「さうても無いさ。……お子さんは」

「二人てす。とてもやりきれんてすね、私はもう諦めて、田舍に歸らうかと思ひます。……もう斯うして居るのもいやになつてしまつた。」

と、相變らず笑つて居る。

「田舍に往つて何をしますか?」

輕く笑ひながら聞く。
「さあ、釣でもしますかな。……田舍にはまだ兩親がありますから……」
「さ、それは結構だ。……何ですか。君は役所では、余程古い顏でしよう？……」
「えゝ、これでも一番古顏です。ですから、一番私が我儘が言へる。將校でも新しい若い人なんぞには私の言ふ事が、よく通りますよ。」
と目尻の皺を一層深くして得意さうに言ふ。これがこの人の本當の心らしい。
私は、それを聞くと、贅澤に世の中に倦んだ顏をして見せてる、と思つた。そして、その樂天家に同情した樣な、冷笑した樣な笑を、微かに口に浮べた。

* * * * * * * * * * * * * *

やがて代々木で降りた。闇の中を歩いて、家に入ると、上り口で、
「時計を買つて來た。」
と得意さうに言つた。
「まあ」
女も嬉しさうな目をした。それて早速箱を開けて見た。……流石に新しいから、キチキチとしつかりした音がする。……

（完）



花蕎麥

漱石生

花蕎麥に富士よく晴れし月夜かな
禿山をこゝまで墾き蕎麥の花
木曾は山の畠あればみな蕎麥の花
除け難き大石を中に蕎麥の花
舊道はくづれし儘にそばの花
花そばや此頃夜毎月の暈
谷またぐ電信線やそばの花
花蕎麥や裾野は芒不二くもる
花蕎麥や段々畑の瀬川まで
花蕎麥や寺貧なれど畑はあり

THE TEMPLE BELL.

Trembling in its thousand ages,
Dark as its faith,
It wails, hunting me,
(It's a long time since I lost my faith,)
Up through the silence with a scorn,
Heavy but not unkind,
Out of the dust of the temple and night
Into my heart of dusk;
Hushed after my song of cities played,
Weary and grey in thought,
My heart replies to the wail of the bell,
Slow-bosomed in sadness and faith,
With my memory rising from dusts,
Namu amida butsu: Namu amida butsu:

THE HOLY PILGRIMS.

Beckoned by an appointed hand, unseen yet sure, in holy air;
We wander as a wind, silver and free,
With one song in heart, we, the children of prayer.

Our song is not of a city's fall;
No laughter of a kingdom bids our feet wait;
Our heart is away, with sun, wind, rain rain;
We, the shadowy roamers on the holy highway.

BIRD OF SILENCE.

Older than love and tears,
Bird of silence born before the world and wind were made,
Lonely ghost away from laughter and life,
Wing down, I welcome thee,
From the skies of thoughts and stars,
Bird of Silence, mystery's brother, as white
And all of as is mystery,
Tired of humanity and of voice,
With thee, bird of Silence, I long to sail
Beyond the seas where Time and sorrows die,
Bird of silence, dweller of eternity and space,
Make me live in the thought before dawn was born,
I lost the voice in a willow spray
To whom a thrill is its golden song,
As a lotos whose break of cup
Is the sudden cry after aerial dance.

YONE NOGUCHI

和歌　紫舟選

○　青山清華

凋落の野の一本の若樹にも似たりとおもふわれが淋しさ

はつ秋のあさのみぞらの濃みどりにひゞきて鳴れり遙かなる潮

あゝ御空唯みてあるに尊しや胸つゆほどの愁ひとゞめず

なつかしう心をりけり秋の氣のひやゝかに充つ天地の中

地にうごく靜けき晝のもの々影ながめてをりぬ泣きうみし眼に

憂き人の姿ゆくなり樹下路みどりの色の重なれる中

媚ある眼ふと我を見てほゝゑみしその日に似たる胸のおどろき

秋の日のうすき光の冷やけきさびしきほどをなつかしむかな

やがてみむ君とおもへば胸おどるこのよろこびを誰れに告ぐべき

しづかなる人と言はれむ性をえむねがひに今日もうなだれてあり

一日として胸安き日をみざる都のいへにけふも日暮るる

倦み果てぬ日頃悲しと見て過ぎし悲しさ今ぞよろこびとせむ

○　梶原重雄

あきかぜにふかれてか來し蹌踉と捨てらし人いくたりかゆく

灯ともしてはじめてわれが家なりしてゝろづよさにまた眼をば閉づ

ふとさめて隣の鷄の夜啼くをつめたき涙頬にながしきく

灯をけせば窓のひまもるうす明り見てなにとなきたのしみに寢る

躪すりもののめづらしく室をみぬ暗のつめたさ身に感じては

黒牛の態にものゝ寢そべるを襖へだてゝふとお

もふ夜半
夜の樓の曲れる階(はし)の二十五を登りてものにあはなむとする
ふとさめて闇をすかせばやみが生む惡獸あまた壁につどへる
古鄕に古りぬる鐘の音(ね)を耳はもとめてやまぬ秋のくれかな

○　　　松本白衣

ふとおもふ死にたるわれにねもごろの涙をたもふ幾人ありと
石工よ汝が擦る石の墓となる日をおもひ見よ冷めたからずや
此の日まで胸に彫られし少女ども埴輪につくりそが中に寢む
今日もまた涙足らずて泣き絶えず明日(あした)に殘るかなしみどもよ
葱の香のつよきをかげば君の面くらき厨に際立ちて見ゆ
事もなく嬉しさおぼゆ姉たちの中に座りて林檎喰ひし夜
なにのためにこは流したる涙かと思ひあたらぬ

○　　　關本梁村

心わびしや
われとわが心あざむきわれとわが悲しみつくり斯くて世に生く
なりはひに斯く倦んじては罪の世に住むべくもなし死を願ふかな
七人のうれひの神とよろこびの神とつくりし君なればかも
わが心風に流るる雲のごと力なきかな君とわかれて
秋の風手にいろいろの花もてる少女出で來ぬ夕芒原
君見れば何ともわかぬなつかしきうれしきようの憂ひおぼえぬ
君とわれわかれて今は悲しまずまた樂しまずただに日をすぐ

○　　　大友月人

えもいへぬかなしみどもにさいなまれさいなまれつゝ同じ道行く
何となくうゑをおぼえて今日も行く乳房もとめてなく稚子のごと

ふと仰ぐ月の光にすぎし世のさまざまのかげ我目路をゆく

かぎりなきつをさおぼえて促がされうながされては廣き野を行く

蟬のからひとつ搦まる朽葉よりややにひろがる沠の寂とも

いましめの一語もとめて得ざる夜に父を思ひぬはゝを思ひぬ

○ 太田生麥

地に一日そらに一日とてもごもに心みだれぬ安き國得ず

國統ぶる大帝王が南面のひとみに似たりすさまじき瞳よ

君逐へどまた後邊に人ありて呼ぶらむ心地うき道をゆく

紫に黄にくれなゐに空わたる雲のすべてのなつかしき日よ

○ 大石天裳

膝枕そゞろ崩れて夢に入るとばかり衣の溫うして

耻なくてさひしからずや蝸牛日ごと壁にたゞ步みゆく

疑は胸に起せる自らの疑なりといへど疑ふ

朝の日の紅き靄するそか中に語りてありぬ若人のむれ

○ 山村龍子

霜の花しづかに咲ける美くしき土に向ひてわれ麥をまく

よき人のかく多き世に一人を失ひしのみと强ひて憂ず

手のものを奪ひとられし子の如く泣かましものを幼かりせば

○ 井淵みたま

ながからん命のごとく思ひつゝすゑを「望」と人はいそがる

あやまてりあゝさりながら改むる心をしらずのろ〳〵にすぐ

○ 千葉高軒

我が生命永くもあらず人の世に歌の力のほろびぬ日まで

日はさしぬあかり障子に日曜の朝寢の床のうら耻かしう

野の水　佐藤琢琅

○恐ろしき胸に懐きて死の國の衛士の装束をはゑがきても見つ

○別るゝ日君はわが手に思ひ出のかなしき玉をそと置きて行く





蛇入穴

蛇穴に入るや腐りし毒菌　へき
穴に入る蛇の尾に散る芒かな　同
穴見れば蛇や入りしと塞ぎけり　同
穴深く古塚の蛇かくれけり　同
蛇穴に入りて毒泉涸れにけり　同
蛇穴に入りて歸りぬ湯治人　同
蛇穴に入つて廢れし婬祠哉　同
薄刈りて山瘠せぬ蛇穴に入る　同
穴に入る蛇の尾細し蓼紅葉　同
蛇穴に入るや朝顏末一輪　双嵮
蛇穴に入りて狂女の癒えにけり　月蟾
蛇穴をさがして上る杉古木　綠韻
蛇穴に入つて競馬の禁止かな　柳陀

蛇穴に入るや草刈る鎌の側 白有
蛇穴に入るや朽ちたる鐘つき堂 杏所
腹黒き人死して蛇穴に入る 火箭
朝貌はひからびぬ蛇穴に入る 月耕
毒草を嘗めつくし蛇穴に入る 吟朗
穴に入る蛇や芒の小雨降る 玉雪
蛇穴に入るや蛙の壁一重 青雉
蛇穴に入るや地藏の足の下 不子
穴に入る蛇に鷄頭斜めなり 仙山
蛇穴に入る廢園の夕べかな 月峰
童等の蛇入る穴を塞ぎけり 木蓮
蛇穴に入りて醜草枯れにけり 柳子
穴に入る蛇と蟻との實懇かな 哲郎
穴に入る蛇見て行きぬ山の寺 藻川
蛇穴に入らんとぞ思ふ落葉かな 眞佐矢
穴に入る蛇見て寒し里の丘 木瓜
山中暦日なし蛇穴に入る 不言
蛇穴に入るや夕日の鱗雲 其櫻子
青のろしのろ〳〵穴に入る尾かな 鹿の子
穴に入る蛇に行者の呪文かな 奇溪
穴に入る蛇懶げに動きけり 木犀

經堂に年古る蛇や穴に入る 刀川
蛇穴に山家の晴や薪木積む 葵雨城
蛇穴に入るや藪原燒開く 尺水
說教の堂下や蛇穴に入る 松碧
蛇穴に入りて一茶にホ句もなし 盛花
稻掛に杭うてば蛇穴に入る 鯨舟
蛇穴に雀は海に入る日哉 方外
蛇穴に入るや木に來る鵙の聲 綠蔭
明日はいる蛇の法樂日南かな 小魚
蛇穴に佛果を得んと入りにけり 風狂子
蛇穴に入らで死に居る芒かな 槐山
蛇穴に入りて山の濕泉さびれけり 濛雨
蛇穴に入つて尾花のそよぎけり 石人
蛇穴に入りて野分となりにけり 同
蛇穴に入りて天下は治りぬ 一淚
蛇穴に入るや鄉社の力石 同
蛇穴に入つて地震ふ一日かな 拍鷗
我が事は巳みぬと蛇や穴に入る 同
穴に入る蛇を嘲る烏かな 其蜩
蛇穴に入るや路畔の疱神 同
蛇穴に入る卦や左府を呪ひけり 三錢子

數尻の落窪や蛇穴に入る　三錢子
萩の根の穴に入る蛇小さかりき　背南
蛇穴に蜻蛉は草を離れけり　同
蛇穴に入りて三顧の君も無し　桃紅
蛇穴に入りて我世のやせ蛙　同
世の秋を蛇南山の穴に入る　烏城
蛇穴に入るや浮世の虫の聲　同
蛇穴に入るや松下の登仙石　春陵
蛇穴に入るや相馬の古館　同
蛇穴に入るや晝から虫が鳴く　梁村
蛇穴にたゝりある碑の下に入る　同
蛇穴に鳥搆に急ぎけり　伍平
蛇穴に入る時鳥余處を鳴く　同
蛇穴に入りて大坂冬の陣　北星
蛇の入る穴とも云はず野菊咲く　同
穴に入る蛇の尾動く野菊かな　草童
蛇穴に入る村塾の垣根かな　同
蛇穴に入りぬ庵主は禪に在り　初聲
蛇穴に入りて折れ伏す芒かな　同
蛇穴に入るや蛙も續きけり　春月
蛇穴に入るや山莊あらはなり　同

蛇穴に入るや野道の馬の沓　竹雨
蛇穴に入るや籬落に蟬の殼　同
蛇穴に入つて靜けき山河かな　同
蛇穴に入るや聖の入寂す　麥花
雲冷ゆる山のお蛇や神の蛇　同
蛇穴に幻住庵は荒れにけり　同
蛇穴に入つて呉越の和睦かな　花舟
蛇穴に入るや芒の穗の亂れ　同
蛇穴に入るやこの塚幾世經し　同
蛇穴に入つて人買絶えにけり　吾始皇
蛇穴に入るや稻妻しば〳〵す　同
蛇穴に入る南無妙法蓮華經塔　同
穴に入る遲々たる蛇に夕日かな　琴星
蛇穴に入るや芋堀る村の秋　同
法師蟬聞きつゝ蛇の穴に入る　同
どの穴に蛇入り去りし畠かな　碧雲居
穴に入る蛇見て居るや瘠蛙　同
洞木のその根の穴や蛇入りぬ　同
蛇穴に山賊洞に戻りけり　青葵郎
椋の來て蛇入る椎の根穴哉　同
蛇入りし穴に一葉や天下秋　同

蛇穴に入りて醜草茜なか　稲村居
蛇穴に入るや池水の冷やかに　同
蛇穴に入りて國是の定りぬ　同
蛇穴に入るや澤邊の鬼薊　氷雨
蔦からむ切株や蛇穴に入る　同
穴に入る蛇に草の實はぢけけり　同
小石原蛇入る穴のなかりけり　秋灣
八重葎刈れば入りけり蛇穴に　同
穴に入る蛇に何等の悔も無し　同
蛇穴に入つて紅蕈生ひにけり　春溪
蛇の土龍の穴に入りにけり　同
蛇穴に入る大澤の小雨かな　同
穴に入る白蛇に祠したりけり　同
姨捨ての歸り路や蛇穴に入る　天睡郎
蛇穴に入る時伯夷山に入る　同
蛇穴に入るやみそ萩散る夕　同
苛政次ぐ此國の蛇穴に入る　同
蛇穴に入る首塚の芒かな　太郎
蛇穴に入るや殘礎の興福寺　同
蛇穴に秋蠶は繭となりにけり　同
の蛇世の秋風を恨みけり　同

蛇穴に入るや鬼門の石祠　青城
蛇穴に入らで野人に捕たれけり　同
蛇穴に入るや垣根の烏瓜　同
石打てば蛇穴に入る野菊かな　同
穴に入る蛇に佛性無かりけり　柿膓
蛇穴に入るや山雲たゞならず　同
穴に入る蛇の尾長き入日かな　同
蛇は穴に僧や何處へ寒からん　同
思ふ事も無くてや蛇の穴に入る　同
蛇穴に入つて歸順の土民かな　鬼洗
蛇穴に入る洛外の貧寺かな　同
蛇穴に入る草叢や日の弱り　同
碑のほとり蛇穴に入る芒かな　同
松の根に蛇入る穴の二つかな　同
蛇穴に入るや本來無東西　同
蛇穴に入つて蔦のひよろゝかな　同
地獄谷奈落の穴に蛇入りぬ　柿山伏
蛇は穴に水引草の穂立ち哉　同
慧苡は蛇穴に入る水邊かな　同
藪寺や蛇は堂下の穴に入る　同
蛇穴に釣人が堀る蚯蚓かな　同

庫裡の裏蛇入る穴に夕日かな　柿山伏
蛇穴に入るや野菊に蟲つるむ　同
姫蛇は壁の小穴に入りにけり　同
蛇穴に入るや衣手風寒し　同
花蓼や我見て蛇の穴に入る　同
蛇穴に關外を過ぐ王車かな　同
蛇穴に入りて此國秋安し　同
蘭のかげ小蛇も穴に入りにけり　同
高僧の下山や蛇穴に入る　同

本號應募者總て八十四名、句數千四百九十六句、應募句數の多かりしは鬼洗、柏鷗、梁村三氏の五十句づゝ、花舟氏の四十七句、小魚氏の三十八句、烏城氏の三十六句、仙山、背南二氏の三十五句、柿山伏、吾始皇、柿腸三氏の三十四句づゝ、濛雨氏の三十三句なりき。

募集課題　冬田　十一月十五日締切
手鞠　十二月十日締切
應募俳句は加賀國金澤市櫻畠九番丁十九番地大谷正信宛の事



スヱン、ヘディン氏來る

默笑子

スヱン、ヘディン氏來る。スヱン、ヘディン氏來る、大探檢家スヱン、ヘディン氏來る、近く米國實業家の來遊を迎へ、米國大西洋艦隊の回航を迎へたる我國民は、更に豪膽毅魄罕世の壯擧を敢てして、足跡の繁き蜘蛛の糸のそれの如く、普く中央亞細亞より東部諸邦に及べる此快男子を待つに如何の態度を以てすべき、此世必ずしも澆季なりと叫ばざれ、唯その民心動もすれば怠漫を生じ、紅燈綠酒の間長袗を曳いて狎妓と戲

る丶の中にのみ、一種の風流韻事を認めて、別に乾坤一擲の丈夫的快心事あるを知らざるに當りては、之を救ふに古聖賢の金句、若くは古英雄の傳記等もあるべきも、更に現代に活潑々地の壯擧を試みつゝある大冒險家大探檢家を知らしめ之を學ばしむる事亦民心を他に移して頽俗を改むるの効尠少なりとせんや、スエン、ヘヂキン氏は瑞典の人、夙に地理學をトックホルム、ベルリンの諸大學に修めしが、志專ら未開地域の探究にあり、千八百九十四年、當時猶ほ少壯の身を以て悍然として遠征の途に上り、第一回にはパミール高地を究め亞細亞大陸第二の高峰ムスタグアタに登り、新疆省に入り擔里木盆地を探りて、タクラマカン沙漠を横斷し、和闐、羅布泊より東の方青海に出て、鄂爾特斯を經て北京に赴き、轉じて戈壁沙漠を横ぎり恰克圖に出て、西比利亞よりして歸歐し、行程約六千哩、而かも其中八百哩は全く前人未踏の地域に屬す、第二回は再び擔里木盆地より始めて水路羅布泊に出て、或はタクラマカン沙漠の東部を回り、或は西藏の東北部に四千米以上の高地を巡り、羅布泊の地理を究めては漢代樓蘭の遺址を發見し、更に西藏の首府拉薩に向ひしも喇嘛敎徒に入れられず、蒙古人に變裝して志を果さんと計りしも亦成らず、踵を反して西藏中部の湖水地方一帶を討ね、それより印度のレーを經カミミルに出てぬ、その行程亦二千七百哩と稱す、而かもその二千七百哩は悉く前人の足址を印せざる所といふに在つては、その困頓難苦備さに至らざるなきの狀も亦た概見すべからずとせず、更に第三回には道を轉じて波斯より、同じく印度のレーに向ひ、之より西藏の西北、之も前人の未踏の地に屬するを跋渉し、次第に東南に進んで西藏の東西に走れる「ニンチエンタンラ」なる一大山脉、即ち正に世界第一の巨峰ヒマラヤと伯仲なる大山脉にして而かも從來の地理書に收められざるものあるを發見し、遂にブラマプトラ河畔シゲチエに出て、喇嘛法主の歡迎を受け、更に同河並にサトレヂ、インドス三河の水源も極めてネパールの一部に入り、再び和闐に入る、而して今や遙に我國に來らんとするもの、

今回の全行程はそも幾干哩にか達すべき、吾人未だ之を詳にするに至らずと雖も兎に角如上の經歷に徵し、前後通じて十五年間一身を探検に委ねたる氏の人となりを想像せば、其事の偉は直にその人の偉と關連して其處に如何ばかり吾人の心胸を開拓するものあるべきぞ、吾人の祖先は或は朝比奈巡島記に或は水戸黄門日本廻遊記に少からず抱懐を大ならしめられき、吾人は又福島中佐の騎馬旅行によつて少からず豪宕卓犖の想念を賦與せられき、而して全世界の人民はダスコダガマ、若くはフラクリンによつて如何なるインスピレーションを受けしぞ、否とよクルソー漂流記やガリバーの大小人國に依て如何ばかりのインスピレーションを感ぜしぞ、否とよ近くは更に生きたる事實として、サージヨン、フランクリンの北極探検譚は如何、サージエームスロッスの南極探檢譚は如何、又更にリビングストンやスタンレーの中央亞弗利加探檢譚は如何、吾人も少時その譯本によつて少さき手を鼓動する心臓に加へしものの幾回なりしかを憶ふ、今や一大大探險來る。

スエン、ヘヰデン來る、吾人は更に如何の感想を以て此現存せる快漢を待つべき、世には輪廓に一種のインスピレーションありとて漢字を擁護するものすらあり、若し言ひ知らぬインスピレーションの量のみを以て論ぜんも、吾人の彼を待つべきもの甚だ所以なくんばあらず、而かも事豈に只それのみにして盡きんや、地理上の大探檢そのものに就いて別に互に一大功蹟あるべきに於てをや、フランクリンの發見が米大陸に西英の領土を作り、リビングストン、スタンレーの踏査が佛大陸に金剛共和國を現出したるが如きをいふのみに非ず、例へば太陽の如し、地理學上の大探檢は太陽の如し、見る人の心々業々によつて、熱を借らんものはその熱により、光を欲せんものはその光により、如何樣にも利用し活用し得べきが如く、之も亦如何樣にも利用し活用し更に應用し得べし、政治家は政治宗教家は宗教に、史學者は史學に言語學者は言語學に、地學者は地學に、而して商業者而して農業者工業者豈又次第にその用路を見出すことなくして止まんや、我邦

人久しく東洋に桃源郷の夢を貪り、今日に於ても多數は船底一枚の上を恐れ、敢て對岸の大陸に巨擘を奮ふの概乏しければこそあれ、迷夢怯夢次第に秋霧と霽れ行くに連れては、他日大に此等大探險家の恩澤に感泣するの日あるべきなり、否有らざる可からざるなり、されど一般の思想は今日猶ほ此處に至らず、時あつて福島中佐の快擧、河口慧海師の壯圖を喫着し激稱することありと雖も、只に草艸紙的偉人の偉擧と同一視するの以外に多數は左迄大なる意味を附し居らざるが如し、吾人甚だ遺憾とせずんばあらず、渠成りて水自ら通ずるといふ、若し我邦人にして十分膨脹的大勢力あるものたらしめば、常に何等か發動の準備のヲサ〳〵怠られざるものあるべく、而して機會の到來を翹足して待ちつゝあるべきなり、即ち探險家の行く所は渠の開くる所、吾人は水の如く、招かれずしてその後へに追隨し、何等か一奇を策すべきにあらずや、我國とて雄圖を抱いて探險に從ふもののなきにあらず、知らずや大谷光瑞伯の足跡は露領中央亞細亞より支那土耳其斯坦に入りパミール高原を橫斷して印度に出でたるを、又知らずや、渡邊哲信堀賢雄二氏のそれは露領中央亞細亞より新彊の北部を經、天山南北路を過ぎて蘭州に出でたるを、更に知らずや陸軍少佐日野强氏のそれは蘭州より天山南北路を經て印度に入り、本願寺僧侶橘某野村某二氏のそれはアルタイ軍臺によりて外蒙古を橫斷し、天山南路に入り、寺本婉雅氏のそれは印度より西藏に入りたる事を河口慧海



氏の西藏探險は旣に江湖に喧傳せられたる所なれば重ねて說かざるも可なるべし、大谷伯より始めて河口氏に至る、唯一日野氏を除くの外は、皆桑門の出、之を以て或は自己の宗敎的必要のみより出てしもの壯は壯なりと雖も云々の調を以て冷眼視し、斯くて渠成るも水至るも用意を欠かんか、迂愚の誹を招ぐものは抑も誰ぞや、否それにても假に可なりとなすべく、單に宗敎的必要に出づるものにて、それ以外に何等の影響する所なしとするも尙ほ一事の遂に言はざる可からざるもの存す、宗敎家の行くは他の行くとは自ら効果を異にす、苟も佛耶兩敎の如き世界的宗敎たらん上には、その法衣に博愛の和風伴ひ慈悲の暖日從ふ、されば異域人民との應酬に於て十分に圓滿滑澤なるを得べきと同時に到る處に他國民族なるもの丶親睦し易きを敎うるの點に於て一長あり、斯くて異種異族の間に同胞的觀念の一條の聯鎖を通ずるを得べし、是れ人道上大に尊重すべきの事として又他の方面にも多大の便宜を感ずべきなり、宗敎家をして世界の道路の開拓者たらしめよ、是れ尤も至要の事たるなからんか、曩に我國民はブース大將を歡迎しぬ、ブース大將は神の旨を說くよりも神の旨を行はんと勉むるもの、而して彼の如きの尊敬を世界より集むべしとせば、大谷伯以下の諸緇徒も亦佛陀の御旨を實現するの使徒たるべく、而して又當に世界の感謝を受けて可なるべし、スエン、ヘヰヂン氏は大谷伯と未だ半面の識あらざるも、伯の名を熟聞して心往禁ずる能はず、曾て遠く書を寄せし以來、兩心相投じ爾來唱酬渝らず、去月ス氏より、印度に出でたるの報を得るや、伯は地學協會の諸賢に圖り、遂に電報を以て我國に招致するに至れるもの、その來着は當に一旬餘日の中なるべしス氏の大谷伯に於ける正に雄心相照すものなる哉、政治上に於て中央亞細亞に重要の關係あるもの殆んど英露土の三國に限るの觀あり、故にその探險者の多くも英ならざれば露といふの現勢なるが、ス氏が前に述べし如く蘇典人なるの一事は、氏を何等政治的關係なく唯斯學に忠實なる一探險者と信ぜしむるに於て感謝の念の更に深切なるものあ

るを覺ゆ、即ち氏の行くは當に宗教家のそれと選ぶ所なき感觸を與ふるものなるを信ず、米國實業家や米國大西洋艦隊を迎ふる、其處に邦人の忠悃の情あるは固よりなるも、一面又國交上の意味ある事も免かるべからず、從つて人目を眩耀するが如き盛典も擧げられたりとせん、ス氏の來る、それとは頗る關係を異にす、從つて形式上に於ける斯くまでの事は固より期せざる事なりと雖も、醫界の明星コッホ博士を迎へたると同じく、等しく學界の貢献者として國民のス氏を迎ふる決して疎漫ならざらんことを期待するものなり、更に冒頭に顧みて玆に附記すべきは、刻下風紀頽廢の傾向に對して大に先覺者の注意を惹き、挽回策として兎角の術策を講ずるあり中に紳商の徒の混ずるをも見ぬ、吾人は之を甚だ感ずべきの事として又直に此等紳商の徒に望むべきものあり、そは他にあらず、大陸探險の如きは薄資の能く辨ずる所にあらざれば、民間有爲の器卓犖の才なきにあらずとも、空く志を抱いて朽つるなからずとせず卿等にして同志相謀り若し此等の徒に志を成さしむべく資を給する事ともせんか、その國家に貢献あるべきは元より、更に頽俗の滔々を率ゐて巽なる所に向はしむるものあるを確信す、而してその盛名はカーネーギーの教育事業に投資するよりも更に赫々たるもの盖しなからずとせず。至嗚。

材料豐富にして豫定の頁數を超過せる爲め本號丈け「海内」欄を省く



出鱈目

空谷子

△明け方にフト眼覺む。昨夜痛飲したる醉未だ覺めず。頭はボウとし、顔はカッと熱つて、喉頻りに渇く。而して醉中にいひ且つ行ひたる馬鹿らしき事、恥づべき事、一つ一つ胸に浮び來る。此時の悔恨の切なさ、つらさ、亂醉の味知らぬ人に語ても到底分るまじ。

△今日より暫らく禁酒する。と思へば非常に心淋し。酒と別るゝは單に酒のみに別るゝにあらず。酒と關聯したる總てと別るゝなり。醉と斷ち、迷と斷ち、女と斷ち、其他一種陶然たる無我の境にのみ得らるゝあらゆる快樂と絶つなり。と思へば仍更ら心細し。

△禁酒をするに法あり。半年とか、一年とか、或は五年とか一生とか餘りに長き間酒を飲むまじと思へば、却て淋しさに堪へずして、ナニ飲んで了へといふ氣になるもの也。夫れより今日一日丈けは酒飲むまじと覺悟し、明日も明後日も今日一日丈けはと思つて、半年なり、一年なり、或は五年なり一生なりに及べば、少しも苦しきものにあらずと或人の說也。左もありさうな事也。

△米國の水兵は概して無邪氣なりしやう也。イヤに脊大ぶつて品を作るといふやうな處なきは僕の氣に入つたり。小さな提灯や旗を持て、小供に菓子なんどを吳れて面白がつて居る水兵もあり。こんな事は嚴めしき儀式ばつた事以上に人の情を動かす。

△芝翫の大倉は優近來の大出來。羽左衞門の佐七と並んで歌舞伎座十月狂言の双璧たりき。松助の周庵、ウハヽヽヽと笑ふあたり。輕妙無比。番類例によつて見物の溜飲を下ぐ。

△訥子の日蓮は日蓮の強さうな處は稍々あらはし得たり。訥子にしては感心く。女寅の皆鶴姫甚だよし。十藏の大根にゃ呆れたり。

△日本の學問文學を艱險難解ならしめし張本人は井上毅也と論じたる人あり。其當否は別として今少し平易にして平民一般に分るやうにしたきもの也。若し詔勅の如きものも言文一致にて下し賜はるやうにならば如何ばかり平民一般の幸福なるべき。

△文部省展覽會洋畫部にて僕の欲しきものは、北村四海作の「春」「秋」(彫刻)。和田三造の「合歡花」。高村眞夫の「夏の椽」。石川寅治の「金魚」。ベレスフォードの「靜物」。

△玉成會にて予の趣味に適したるものは横山大觀の「冬の月」米原雲海刻の「月」

△「吉田松陰」の緒言は近來の大論文。再讀三讀の價値あり。結論は緒言に比して稍々見劣りす。

新刊批評

▲欺かざるの記（前篇）

國木田獨歩著　左久良書房發行

本年正月二日か三日と覺ゆ。予年始に獨歩氏の宅に行く。氏予に語るに年來の日記を公にするの志あるを述ぶ。予大いに之を賛し、人生の眞の智識は各人皆自己の思想行動を正直に語るによつて得らるべしといふ。獨歩氏喜んで君も亦我自然主義の信者也といひ、更に言葉を續いて、予は明治といふ不思議なる時代に住する一個の人間也。明治といふ時代は東西文明が相逢て、實に奇々妙々なる幾多の出來事を目眩しき程演出したり。明治の歴史は我國開闢以來最も多事にして又多彩なる歴史也。又將來と雖も恐らくは斯程に多事多彩なる事はなからん。名門名家の凋落。赤手空拳にして巨萬の富を得たるもの。憲法發布、議會開設、日清日露の兩大戰、伊藤博文なるものは憲法制定其他に功勞ありとて公爵となり、岩崎彌之助なるものは政府の造船業を請合ひて海内第一の富者となる。此間に一の國木田獨歩なるものあり、彼何等の目覺しき活動をなさず、只獨り思ひ、獨り考へ、獨り行ひ、獨り書き、只自己の信ずる處に從て生活せり。かゝる人間も時代の大潮流の外に立てるが如くにして實は然らず。全じく一の時代の兒として我れ茲にあり。此亦碌々なる我れを世間に發表して明治といふ不思議なる時代には又我れの如きもの住せりと知らするも一興也。我れと全じきもの外になくとも面白く、あれば仍更ら面白し、これ予の日記を敢て世に公けにせんとする所以也と。此「欺か

ざるの記」は即ち其日記を公けにしたるものにして今回發行なりし前篇には明治廿六年二月四日より廿七年三月卅一日迄、一年二ケ月の記事を收む。

凡そ世には如何に正直ならんとするも到底正直なり得ざる人あり、又如何に不正直ならんとするも到底不正直なり得ざるものあり。獨步氏の如きはどうしても不正直なり得ざる方の人と覺ゆ。其記する所眞摯誠實にして又一點の虛僞なし。記事にして他人に興味の薄きものあり、又文章の幼稚なるものあり。然れども一代の才人、國木田獨步氏を研究せんとするものにとつては箇程に便利なる書は斷じてなし。予は此書の文學的價値に於ては「アミールの日記」等に比して甚しく遜色あるを認むるも其眞摯なる點に於て決して彼れに劣らざるを見、獨步氏に興味を有する總ての人に向て其一讀を推奬す。(定價貳圓五拾錢特價貳圓)(狩生)

▲何處へ

正宗白鳥著
易風社發行

正宗白鳥氏の小說集也。「何處へ」を卷頭として「玉突屋」「六號記事」「彼の一日」「五月幟」「村塾」「空想家」「株虹」「凄い眼」「世間並」の十篇を收む。皆本年中の作也。多少の出來、不出來はあるも氏の作には皆眞面目なる努力の影の見えざるはなく、從て讀むべからずといふ惡作は一もなし。「玉突屋」最も傑出し「五月幟」「凄い眼」「蛛虹」等又面白く、「何處へ」の努力の功又決して徒勞に畢らず。氏は一作毎に人間の見方も廣くなり、書き方にも肉が附き、將來の發展頗る恐るべきものあるを感ぜしむ。小疵を拾へば文字の不妥當、口調の無頓着等なきにあらざるも、かゝる眞面目なる佳作をなす人、外に數ふる能はざるを思へば今の讀書界に向て充分推奬するの價値あるを信ず。(定價八十五錢)

▲浮草

二葉亭主人譯
金尾文淵堂發行

ツルゲネフの著「ルーヂン」の譯也。ルーヂンはツルゲネフの作中にても最も現代の我國人に喜ばるべきもの、而して譯者は斯道の大家、二葉亭氏也。此譯が如何ばかり當時(十年ばかり前、太陽に連載されたり)の文壇を稗益したるかはいはずもがな。今日の文壇にあつても優に創作を凌駕するの價値を落さゞるは原作の傑出したるを驚くと全時に又譯筆の巧妙なるを嘆ぜずんばあらず。(定價一圓廿錢)

▲嫁が淵(後編)

小笠原白也著
金尾文淵堂發行

嘗て「大阪每日」の懸賞に當選して好評を博し、劇に仕組まれたる小說の後編也。描寫、敍述に一種の癖あり、又素人離れのせぬ恨なきにあらざるも、結構脚色通俗にして婦人小兒にも面白く讀ませる用意怠りなし、所謂家庭向きの小說といふべし。(定價金六十五錢)

▲紅淚

生田葵山著
今古堂發行

葵山の小說、極彩色の浮世繪を見るが如し。濃厚なる化粧振り時に人の心を惹くことなきにあらねど、動もすれば餘りに臙脂の臭の強過ぎるに顏を背けしむ。彼れは確かに書くべき物を有す。又書き得たり。而かも其畫面は紅紫爛斑、青白亂雜。何となく俗惡なる所あるを免れず。敍景の如きも澤山の文字を徒役して而かも印象薄し。今一段の工夫あらんことを望む。葵山の人氣漸やく下火となつて、而して今や病床にありと。

此不遇の人に忌憚なき忠言を寄す。彼の捲土重來を望むが故也。然し狹山宗の人に渇仰さるゝ價値は確かにあり。(定價八拾錢)

▲木村長門守　　綠園生著　金尾文淵堂發行

綠園叢書第一として發行したるもの也。豐臣の末路にあたつて、最も興味あり、且つ詩的題目に適したる木村長門守を傳したる歷史小說也。古きデューマ、スコットのことは扨て措き、近くメレズコウスキー、シェンキーウイッチの如き歷史小說を以て一代を聳かす人あるに我國の歷史小說なるもの、文學的價値の甚だ乏しきを恨まずんばあらず。此書の如きも今少し文學的に書き得べき餘地あらんに惜しき事してけり。澁柿園の木村重成と比較論評せば面白からんも今は暇なき故略す(定價七十錢)

▲名數者　　德田秋聲著　今古堂發行

曾て「時事」に連載せられて好評を博したるもの也。濃艶にして含蓄ある書き振り、家庭の好讀物也。氏の佳作といふ能はざるも紛々たる多數の新聞小說よりは確かに讀應へあり一讀を奬む。(定價金七十錢)

▲朝起のすゝめ　　本多靜六著　修養閣發行

生理的に精神的に、朝の冷氣に打たれて麗なる太陽の光を呼吸することは、大なる益のあるものである、本書はその効用を述べ更に古來之によつて成功の礎を築いた人逹にその遺訓を收めたもの。(正價三十五錢)

▲克己論　　石原謙譯述　内外出版協會發行

ウイリアム、ジョージ、ジローダン氏の原書を譯したもの、克己の要訣以下十六章、能く忍び能く戰ひ、以て健全なる人格を作り、以て能く大志を遂げ得るの人ならしめんと期するものである、行文は平正で毫も艱澁の譏を得べくもない。(正價六十錢)

▲農村自治の研究　　山崎延吉著　永東書店發行

自治制が實施されては居るけれと、未だ農民にはそれに就いての明確なる智識と精神と信念とが無く、從つて如何にすれば金融が圓滑で衣食が潤澤であるか、如何にすれば農村の維持を完全にしその生活を愉快ならしめ得るかに十分の考察が及んで居ない、遂には貧弱に陷り遂には田園を嫌い、斯くて都會生活に憧れて馴れぬ手業に到頭一蹶複た起つ能はざるものも出來る、之を憂ひて十分に自治に要する智識と精神と信念とを與へんとする、而かも唯の談義の弊に陷らず、一々手段方法等が直に實施し得る樣に說いてあるのが此著である、本書は必ずや同好の士に分つて益する所が尠少であるまい。(定價一圓五十錢)

▲二宮翁逸話　　留岡幸助著　警醒社書店

尊德翁の人物の偉大なることは時を逐ふて見出されて來る、從つてそれに關する著書等も漸次に殖えて來て居るが、今此書を見るに名の示すが如く唯の逸話であるが、而かも各章悉く實際的に發達した圓滿なる翁の頭腦から流露する警句若くは所行で充たされて居る、翁の家庭に入つて直にその敎誨に親炙するの想がある。(定價五十錢)

▲現代人物觀　　黑頭巾著　讀賣新聞社發行

人物評論家としての黑頭巾氏はその觀察の周匝と着眼の奇捷と、更に

その造句の簡勁にして而かも艶麗の色彩を失はざるとによつて現はれ、聲名嘖々一般讀書子の間に嘖傳されて居るのは人の皆知る所であらう、而かもその先驅として最初に江湖に見えたのは何であるか、實に此著現代人物競である、黒頭巾氏の文才は得易からざる特種の文才である、而してその評論の文體は實に氏が創出の文態である、口語態が滔々として一代の勢力を占めつゝある潮流の唯中に獨り不拔の砥柱の如く頑として非口語體の文章を守るは更なり、尚ほ漢文調の熟語を目まぐろしき計りに紙上に配列して居るが、而かも字索句錬、情に即し景に即し情景に並び即して、見ては堅きものの味へば常に清脆にして滋味の滴るものあると同時に毎節一口嘖き風で一貫して居り、長くて四五行を滅多に超えぬ處風光取次に新にして七彩不斷に眼に輝くの趣がある、既に特種の文才が更に特種の文體を創めて、正に自己の壇場を作つたものと評すべきである、此鋒尖に掛つて當代の一癖ある人物その數幾百といふを知らざる人物の眞相が縱横に暴露され、揶揄され、罵弄され、稱揚され、諷刺され、面責されたのが此著であるを思へば、眞價は蓋し多く語らずともの事であらう、曾て讀賣紙上に出たものゝ二度平公ではあるが、卷頭に收められた十數葉の諸人物の小照、中に罕見のものも少くないのは大なる景物として一度見たものにも見直すべき價値は十分にある。(定價五十八錢)

▲教育史餘材

横山健堂著
開發社發行

著者は教育史專攻の人で已に近世教育史の好著もある、その平生洽く探り博く求めたる史的材料を輯錄して時折自己の意見を書き錄したものが本著である、「女子教育の變遷に就いて」以下十八章、孰れも考證あり觀察あり、而して卓見あり、而して雄辭あり、而して一讀過の間に文字に無限の妙趣あり、研學の上よりも趣味の上よりも共に讀んで共に大益あるの佳什と思ふ。(定價金六十錢)

▲頼朝

幸田露伴著
東亞堂發兌

之は歷史小說といふてはない、一々詳細なる史實に照して、その性行の餘りに殘忍酷薄に見える一面に、又一代の人心を矮軀に收攬して鎌倉覇府の基礎を据えた跡を見れば一概に左りとも列し兼ぬるものゝある即ち永く後昆の疑問となり居る大頭公の人格を諸種の點から闡明し描寫したもの、流暢易解の筆一種の興に催されて何時しか讀了せしむる快がある。(金一圓十錢)

▲基督敎の起源

波多野精一著
警醒社書店發行

第一章猶太敎、第二章イエス、第三章エルサレムの敎會、ペテロ、第四章パウロ、第五章第四福音書と綱を分ち、一々精透の識見で歷史的批評を試みたもの、基督敎の本質を眞面目に研究せんとするものは、此種の著述多き中に最も嶄然として頭角を拔く本著に因るべきである。(定價九十錢)

▲都市の研究

三宅磐著
實業の日本社發行

世の進步に連れて人々都市生活を愛するに至り、從つて都市の膨脹を來し、又諸般の設備の改むべきものゝ生ずる免れぬ現勢である、斯くて此自治團體たる都市の經營を如何にすべきかは眞面目なる問題とならねばならぬ、本書はそれを解決すべく著されたる著述である。(正價七十錢)

○壹冊定價　金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅八錢）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢

以上郵稅共

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本郷西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし

一弊社振替貯金口座は三十四番なりこれにより御送金の方は登記料金貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の内より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし

一郵券代用は必ず壹割增の事

一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金を送られざれば其號限にて發送を止むべし

一領收證を出さず望まるゝ向は返信料を添へらるべし

明治四十一年十月廿七日印刷
明治四十一年十一月一日發行　（禁轉載）

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野耕一

發行所（振替下谷九一九）　反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場


享和元年創業
日本ニ於ケル時計商之元祖
宮内省御用達
D.K.
東京市京橋區八官町九番地
小林時計店
電話新橋一〇〇三
電信略語コ(ヌ)コ八
振替口座七八〇七
營業品概目
時計附屬品、指環、簪、
帯留、ブローチ、手釦
紀念品一式
最新流行品目
錄品切調製中
紀念品
賞牌メタル
迅速廉價
金銀